



有価証券報告書

事業年度 自 2017年4月1日
(第75期) 至 2018年3月31日

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

(E03827)

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第75期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	6
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	9
第2 【事業の状況】	10
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	10
2 【事業等のリスク】	13
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	16
4 【経営上の重要な契約等】	29
5 【研究開発活動】	30
第3 【設備の状況】	31
1 【設備投資等の概要】	31
2 【主要な設備の状況】	32
3 【設備の新設、除却等の計画】	34
第4 【提出会社の状況】	35
1 【株式等の状況】	35
2 【自己株式の取得等の状況】	37
3 【配当政策】	37
4 【株価の推移】	37
5 【役員の状況】	38
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	43
第5 【経理の状況】	53
1 【連結財務諸表等】	54
2 【財務諸表等】	107
第6 【提出会社の株式事務の概要】	127
第7 【提出会社の参考情報】	128
1 【提出会社の親会社等の情報】	128
2 【その他の参考情報】	128
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	129
監査報告書	130
確認書	132

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2018年6月28日

【事業年度】 第75期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

【会社名】 損害保険ジャパン日本興亜株式会社

【英訳名】 Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 西 澤 敬 二

【本店の所在の場所】 東京都新宿区西新宿一丁目26番1号

【電話番号】 03 (3349) 3111 (代表)

【事務連絡者氏名】 法務部部长 神 田 直 樹

【最寄りの連絡場所】 東京都新宿区西新宿一丁目26番1号

【電話番号】 03 (3349) 3111 (代表)

【事務連絡者氏名】 法務部部长 神 田 直 樹

【縦覧に供する場所】 金融商品取引法の規定による備置場所はありません。

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 最近5連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

回次	第71期	第72期	第73期	第74期	第75期
決算年月	2014年3月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月
経常収益 (百万円)	1,895,196	2,670,877	2,942,881	2,982,076	3,332,883
正味収入保険料 (百万円)	1,585,257	2,211,128	2,552,193	2,550,336	2,854,755
経常利益 (百万円)	78,075	179,541	211,574	242,238	139,088
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	35,503	49,794	155,062	170,790	140,550
包括利益 (百万円)	122,544	405,237	△147,545	248,030	179,874
純資産額 (百万円)	786,633	1,631,653	1,328,444	1,549,405	1,590,385
総資産額 (百万円)	5,076,962	7,947,206	7,611,370	9,132,953	8,949,190
1株当たり純資産額 (円)	793.22	1,651.30	1,343.81	1,508.47	1,588.05
1株当たり当期純利益 (円)	36.07	50.60	157.57	173.55	142.82
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	15.37	20.45	17.37	16.25	17.46
自己資本利益率 (%)	4.89	4.14	10.52	12.17	9.23
株価収益率 (倍)	—	—	—	—	—
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	35,957	61,793	111,739	177,875	42,885
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△8,830	△790	△54,954	△287,167	128,131
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△28,453	△152,640	△52,717	292,047	△55,320
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	439,970	503,803	499,118	676,184	801,469
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	21,987 (5,025)	33,053 (3,550)	32,532 (3,257)	33,331 (2,686)	34,260 (3,016)

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 株価収益率については、提出会社の株式が上場されていないため、記載しておりません。

(2) 提出会社の最近5事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第71期	第72期	第73期	第74期	第75期
決算年月		2014年3月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月
正味収入保険料 (対前期増減率)	(百万円) (%)	1,413,818 (6.51)	1,891,605 (33.79)	2,218,425 (17.28)	2,165,694 (△2.38)	2,168,009 (0.11)
経常利益 (対前期増減率)	(百万円) (%)	68,079 (4.64)	166,828 (145.05)	178,086 (6.75)	230,474 (29.42)	175,220 (△23.97)
当期純利益 (対前期増減率)	(百万円) (%)	27,350 (△6.13)	39,348 (43.87)	126,289 (220.96)	164,401 (30.18)	170,032 (3.43)
正味損害率	(%)	64.65	65.32	63.69	63.20	64.37
正味事業費率	(%)	31.40	31.54	31.59	31.98	32.30
利息及び配当金収入 (対前期増減率)	(百万円) (%)	78,110 (△1.75)	92,963 (19.02)	109,938 (18.26)	114,898 (4.51)	106,234 (△7.54)
運用資産利回り (インカム利回り)	(%)	2.20	2.08	2.13	2.20	1.87
資産運用利回り (実現利回り)	(%)	4.04	3.67	2.94	3.28	2.38
資本金 (発行済株式総数)	(百万円) (千株)	70,000 (984,055)	70,000 (984,055)	70,000 (984,055)	70,000 (984,055)	70,000 (984,055)
純資産額	(百万円)	782,538	1,592,653	1,324,881	1,455,276	1,574,596
総資産額	(百万円)	4,838,707	7,326,234	7,036,222	7,568,779	7,688,176
1株当たり純資産額	(円)	795.21	1,618.45	1,346.34	1,478.85	1,600.10
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額)	(円)	15.70 (—)	48.67 (—)	154.26 (—)	87.37 (—)	108.12 (—)
1株当たり当期純利益	(円)	27.79	39.98	128.33	167.06	172.78
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	(円)	—	—	—	—	—
自己資本比率	(%)	16.17	21.74	18.83	19.23	20.48
自己資本利益率	(%)	3.68	3.31	8.66	11.83	11.22
株価収益率	(倍)	—	—	—	—	—
配当性向	(%)	56.50	121.74	120.21	52.30	62.58
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	(人)	17,084 (4,934)	27,144 (3,319)	26,380 (3,036)	25,822 (2,357)	26,189 (2,806)

(注) 1 正味損害率＝(正味支払保険金＋損害調査費)÷正味収入保険料

2 正味事業費率＝(諸手数料及び集金費＋保険引受に係る営業費及び一般管理費)÷正味収入保険料

3 運用資産利回り(インカム利回り)＝利息及び配当金収入÷平均運用額

4 資産運用利回り(実現利回り)＝資産運用損益÷平均運用額

5 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

6 株価収益率については、提出会社の株式が上場されていないため、記載しておりません。

2 【沿革】

(提出会社)

年月	概要
1887年7月	有限責任東京火災保険会社（以下「東京火災」）を設立した。
1893年9月	帝国海上保険株式会社（以下「帝国海上」）を設立した。
1908年8月	第一機関汽罐保険株式会社（後に「第一機罐保険株式会社」に商号変更、以下「第一機罐」）を設立した。
1941年11月	東京火災は、太平火災海上保険株式会社を合併した。
1943年2月	東京火災は、東洋火災保険株式会社を合併した。
	帝国海上は、第一火災海上保険株式会社を合併した。
1944年2月	東京火災、帝国海上、第一機罐の3社が合併し、安田火災海上保険株式会社（以下「安田火災」）を設立した。
1976年7月	本社を東京都千代田区から現在の東京都新宿区に移転した。
2002年4月	第一ライフ損害保険株式会社を合併した。
2002年7月	安田火災、日産火災海上保険株式会社の2社が合併し、商号を株式会社損害保険ジャパン（以下「損保ジャパン」）とした。
2002年12月	大成火災海上保険株式会社を合併した。
2005年7月	株式会社損害保険ジャパン・フィナンシャルギャランティーを合併した。
2014年9月	損保ジャパン、日本興亜損害保険株式会社（以下「日本興亜損保」）の2社が合併し、商号を損害保険ジャパン日本興亜株式会社とした。

(注) 1 2010年4月に、日本興亜損保と経営統合し、株式移転により共同持株会社NK S Jホールディングス株式会社を設立しております。

2 当社の親会社であるNK S Jホールディングス株式会社は、2014年9月に損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社に、2016年10月にS O M P Oホールディングス株式会社に商号変更しております。

(連結子会社)

年月	概要
1958年9月	Yasuda Seguros S. A. を設立した。
1962年8月	The Yasuda Fire & Marine Insurance Company of America (後に「Sompo America Insurance Company」に商号変更) を設立した。
1986年2月	安田火災投資顧問株式会社（後に「損保ジャパン・アセットマネジメント株式会社」に商号変更) を設立した。
1989年12月	Yasuda Fire & Marine Insurance Co (Asia) Pte Ltd (後に「Tenet Sompo Insurance Pte. Ltd.」に商号変更) を設立した。
1993年7月	Life Insurance Company of North Americaから、アイ・エヌ・エイ生命保険株式会社（後に「安田火災ひまわり生命保険株式会社」に商号変更) の株式を取得した。
1993年12月	The Yasuda Kasai Insurance Company of Europe Limited (後に「Sompo Japan Nipponkoa Insurance Company of Europe Limited」に商号変更) を設立した。
1999年5月	安田火災シグナ証券株式会社（後に「損保ジャパン・シグナ証券株式会社」に商号変更) を設立した。
2000年11月	安田火災フィナンシャルギャランティー損害保険株式会社（後に「株式会社損害保険ジャパン・フィナンシャルギャランティー」に商号変更) を設立した。
2001年12月	安田火災ひまわり生命保険株式会社（後に「損保ジャパンひまわり生命保険株式会社」に商号変更) の全株式を取得した。
2003年4月	セゾン自動車火災保険株式会社の株式を取得した。
2003年9月	損保ジャパン・シグナ証券株式会社（後に「損保ジャパン日本興亜DC証券株式会社」に商号変更) の全株式を取得した。
2005年6月	Sompo Japan Insurance (China) Co., Ltd. (後に「Sompo Insurance China Co., Ltd.」に商号変更) を設立した。
2005年10月	株式会社ヘルスケア・フロンティア・ジャパンを設立した。

年月	概要
2008年9月	Sompo Japan Asia Holdings Pte. Ltd. (後に「Sompo Holdings (Asia) Pte. Ltd.」に商号変更)を設立し、同社を連結子会社とした。
2009年1月	株式会社全国訪問健康指導協会の全株式を取得した。
2009年4月	株式会社ヘルスケア・フロンティア・ジャパン(存続会社)と株式会社全国訪問健康指導協会(消滅会社)とが合併した新会社(合併会社名は「株式会社全国訪問健康指導協会」)を連結子会社とした。
2009年7月	セゾン自動車火災保険株式会社の株式を追加取得し、同社を連結子会社とした。
2010年1月	Sompo Japan Insurance (Hong Kong) Company Limited (後に「Sompo Insurance (Hong Kong) Company Limited」に商号変更)を連結子会社とした。
2010年5月	Tenet Insurance Company Limited (後に「Tenet Capital Ltd.」に商号変更)の全株式を取得し、同社を連結子会社とした。
2010年10月	当社の連結子会社である損保ジャパン・アセットマネジメント株式会社が、日本興亜損保の子会社であるゼスト・アセットマネジメント株式会社と合併し、商号を損保ジャパン日本興亜アセットマネジメント株式会社とした。
2010年11月	Fiba Sigorta Anonim Sirketi (後に「Sompo Japan Sigorta Anonim Sirketi」に商号変更)の株式を取得し、同社を連結子会社とした。
2011年6月	当社の持分法適用関連会社であったBerjaya Sompo Insurance Berhadの株式を追加取得し、同社を連結子会社とした。
2011年10月	当社の連結子会社である損保ジャパンひまわり生命保険株式会社が、日本興亜損保の連結子会社である日本興亜生命保険株式会社と合併し、商号をNKS Jひまわり生命保険株式会社(後に「損保ジャパン日本興亜ひまわり生命保険株式会社」に商号変更)とした。
2012年4月	株式会社ジャパン保険サービス(後に「損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社」に商号変更)を連結子会社とした。
2013年1月	Sompo Japan Nipponkoa Holdings (Americas) Inc. (後に「Sompo America Holdings Inc.」に商号変更)を設立し、同社を連結子会社とした。
2013年6月	当社の持分法適用関連会社であったMaritima Seguros S.A.の株式を追加取得し、同社を連結子会社とした。またこれに伴い、Maritima Seguros S.A.の子会社であるMaritima Saude Seguros S.A.(後に「Sompo Saude Seguros S.A.」に商号変更)を連結子会社とした。
2013年7月	いずれも当社の連結子会社であるTenet Sompo Insurance Pte. Ltd.とTenet Capital Ltd.が合併し、商号をTenet Sompo Insurance Pte. Ltd.(後に「Sompo Insurance Singapore Pte. Ltd.」に商号変更)とした。
2014年9月	日本興亜損保の連結子会社であったそんぽ24損害保険株式会社を連結子会社とした。 当社の連結子会社である損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社と日本興亜損保の子会社であるエヌ・ケイ・プランニング株式会社が合併し、商号を損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社とした。
2014年10月	いずれも当社の連結子会社であるYasuda Seguros S.A.とMaritima Seguros S.A.が合併し、商号をYasuda Maritima Seguros S.A.(後に「Sompo Seguros S.A.」に商号変更)とした。
2017年3月	Sompo International Holdings Ltd.を設立し、同社を連結子会社とした。 Endurance Specialty Holdings Ltd.(後に同社に代わり「Sompo International Holdings Ltd.」が最上位持株会社となりEndurance Specialty Holdings Ltd.は清算)の全株式を取得し、同社および同社の子会社を連結子会社とした。
2017年4月	当社の子会社であったPT Sompo Insurance Indonesiaを連結子会社とした。
2017年12月	Sompo International Holdings (Europe) Limitedを設立し、同社を連結子会社とした。 いずれも当社の連結子会社であるEndurance U.S. Holdings Corp.とSompo America Holdings Inc.が合併し、商号をEndurance U.S. Holdings Corp.とした。
2018年1月	SI Insurance (Europe), SAを設立し、同社を連結子会社とした。

3 【事業の内容】

当社グループは、親会社であるSOMPOホールディングス株式会社の下、当社および関係会社（子会社83社および関連会社13社）によって構成されており、国内損害保険事業、海外保険事業、確定拠出年金事業等を営んでおります。

当社グループの事業の内容、各関係会社の位置付けおよびセグメントとの関連は事業系統図のとおりであります。

事業系統図

(2018年3月31日現在)



(注) 各記号の意味は次のとおりであります。

◎：連結子会社 ★：持分法適用関連会社

4 【関係会社の状況】

当社グループの関係会社の状況は以下のとおりであります。

(2018年3月31日現在)

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
(親会社) SOMPOホールディングス株式会社 (注) 2	東京都新宿区	100,045 百万円	保険持株会社	被所有 [100.0]	当社と経営管理契約を締結しております。当社は金銭貸付を行っております。 役員の兼任等 5名
(連結子会社) セゾン自動車火災保険株式会社 (注) 3	東京都豊島区	31,010 百万円	国内損害保険事業	99.8	当社は業務委託契約に基づき、その業務の代理・事務の代行を行っております。 役員の兼任等 1名
そんぼ24損害保険株式会社 (注) 3	東京都豊島区	19,000 百万円	国内損害保険事業	100.0	当社は業務委託契約に基づき、その業務の代理・事務の代行を行っております。 役員の兼任等 1名
損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社	東京都新宿区	1,845 百万円	国内損害保険事業	100.0	当社は業務委託契約に基づき、代理店業務等を委託しております。 役員の兼任等 2名
Sompo International Holdings Ltd. (注) 3	英国領バミューダ ペンブロック	0千 USD	海外保険事業	100.0	役員の兼任等はありません。
Endurance Specialty Insurance Ltd. (注) 3	英国領バミューダ ペンブロック	12,000千 USD	海外保険事業	100.0 (100.0)	当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等はありません。
Endurance U.S. Holdings Corp. (注) 3、5	アメリカ ニューヨーク州 パーチェス	140,000千 USD	海外保険事業	100.0 (100.0)	役員の兼任等はありません。
Sompo America Insurance Company	アメリカ ニューヨーク州 ニューヨーク	13,742千 USD	海外保険事業	100.0 (100.0)	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等はありません。
Endurance Worldwide Holdings Limited (注) 3	イギリス ロンドン	215,967千 GBP	海外保険事業	100.0 (100.0)	役員の兼任等はありません。
Endurance Worldwide Insurance Limited (注) 3	イギリス ロンドン	215,967千 GBP	海外保険事業	100.0 (100.0)	当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等はありません。
Sompo International Holdings (Europe) Limited (注) 7	イギリス ロンドン	0千 EUR	海外保険事業	100.0 (100.0)	役員の兼任等はありません。
SI Insurance (Europe), SA (注) 8	ルクセンブルク ルクセンブルク	30千 EUR	海外保険事業	100.0 (100.0)	役員の兼任等はありません。
Sompo Japan Nipponkoa Insurance Company of Europe Limited (注) 3	イギリス ロンドン	173,700千 GBP	海外保険事業	100.0	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 1名
Sompo Japan Sigorta Anonim Sirketi	トルコ イスタンブール	195,498千 TRY	海外保険事業	100.0	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 2名
Sompo Holdings (Asia) Pte. Ltd. (注) 3	シンガポール シンガポール	790,761千 SGD	海外保険事業	100.0	役員の兼任等 2名

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の所有 (又は被所有) 割合(%)	関係内容
Sompo Insurance Singapore Pte. Ltd. (注) 3	シンガポール シンガポール	318,327千 SGD	海外保険事業	100.0 (100.0)	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 1名
Berjaya Sompo Insurance Berhad	マレーシア クアラルンプール	118,000千 MYR	海外保険事業	70.0 (70.0)	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等はありません。
PT Sompo Insurance Indonesia (注)10	インドネシア ジャカルタ	194,940,000千 IDR	海外保険事業	80.0	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 1名
Sompo Insurance China Co., Ltd. (注) 3、11	中国 大連	600,000千 CNY	海外保険事業	100.0	当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 2名
Sompo Insurance (Hong Kong) Company Limited	中国 香港	270,000千 HKD	海外保険事業	97.8	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行および債務保証を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 2名
Sompo Seguros S.A. (注) 3	ブラジル サンパウロ	985,585千 BRL	海外保険事業	99.9 (0.0)	当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 2名
Sompo Saude Seguros S.A.	ブラジル サンパウロ	116,280千 BRL	海外保険事業	100.0 (100.0)	役員の兼任等 1名
損保ジャパン日本興亜 D C証券株式会社	東京都新宿区	3,000 百万円	その他 (確定拠出年金 事業)	100.0	当社は運営管理業務の一部を受託し、また委託しております。 役員の兼任等 1名
その他38社 (持分法適用関連会社)					
日立キャピタル損害保険 株式会社	東京都千代田区	6,200 百万円	国内損害保険 事業	20.6	当社は業務委託契約に基づく損害調査業務の代理・事務の代行を行っております。当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 1名
Universal Sompo General Insurance Company Limited	インド ムンバイ	3,681,818千 INR	海外保険事業	28.4	当社と再保険取引を行っております。 役員の兼任等 2名
その他2社					

(注) 1 連結子会社および持分法適用関連会社の「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。

2 SOMPOホールディングス株式会社は、有価証券報告書の提出義務がある会社であります。

3 セゾン自動車火災保険株式会社、そんぽ24損害保険株式会社、Sompo International Holdings Ltd.、Endurance Specialty Insurance Ltd.、Endurance U.S. Holdings Corp.、Endurance Worldwide Holdings Limited、Endurance Worldwide Insurance Limited、Sompo Japan Nipponkoa Insurance Company of Europe Limited、Sompo Holdings (Asia) Pte. Ltd.、Sompo Insurance Singapore Pte. Ltd.、Sompo Insurance China Co., Ltd.およびSompo Seguros S.A.は当社の特定子会社であります。

4 議決権の所有割合の()内には間接所有割合を内数で記載しております。

5 当社の連結子会社であったSompo America Holdings Inc.は、2017年12月31日にEndurance U.S. Holdings Corp.との合併により消滅し、同社は当社の連結子会社でなくなりました。

- 6 当社の連結子会社であったEndurance Specialty Holdings Ltd. は、2017年11月7日に清算し、同社は当社の連結子会社ではなくなりました。
- 7 当社は、当社の連結子会社であるSompo International Holdings Ltd.を通じて、2017年12月12日にSompo International Holdings (Europe) Limitedを新たに設立し、同社を連結子会社としております。
- 8 当社は、当社の連結子会社であるSompo International Holdings Ltd.を通じて、2018年1月12日にSI Insurance (Europe), SAを新たに設立し、同社を連結子会社としております。
- 9 当社の連結子会社であったSompo Canopius AGは2018年1月4日に商号をCanopius AGに、Sompo Japan Canopius Reinsurance AGは2018年3月5日に商号をCanopius Reinsurance AGに変更しました。また、当社は、2018年3月9日にCanopius AGの発行済株式総数の100.0%を譲渡しました。これに伴い、同社およびCanopius Managing Agents Limited、Canopius Reinsurance AG、Canopius US Insurance, Inc.等の傘下子会社は、当社の連結子会社ではなくなりました。
- 10 PT Sompo Insurance Indonesiaは、重要性が増したため、当社の連結子会社となりました。
- 11 Sompo Japan Nipponkoa Insurance (China) Co., Ltd. は、2017年7月1日に商号をSompo Insurance China Co., Ltd. に変更しました。

5 【従業員の状態】

(1) 連結会社の状況

(2018年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(人)
国内損害保険事業	27,890 (2,932)
海外保険事業	6,280 (76)
その他(確定拠出年金事業)	90 (8)
合計	34,260 (3,016)

- (注) 1 従業員数は、就業人員数(当社グループから当社グループ外への出向者を除き、当社グループ外から当社グループへの出向者を含みます。)であります。また、執行役員(執行役員兼務取締役を除きます。)を含んでおります。
- 2 従業員数の()内には、臨時従業員の年間の平均雇用人員数を外数で記載しております。
- 3 臨時従業員には、パートタイマーを含み、派遣社員を除いております。

(2) 提出会社の状況

(2018年3月31日現在)

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
26,189 (2,806)	42.3	13.2	6,278,483

- (注) 1 従業員数は、就業人員数(当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含みます。)であります。また、執行役員(執行役員兼務取締役を除きます。)および当社グループとの兼務者を含んでおります。
- 2 従業員数の()内には、臨時従業員の年間の平均雇用人員数を外数で記載しております。
- 3 臨時従業員には、パートタイマーを含み、派遣社員を除いております。
- 4 提出会社の従業員は、すべて国内損害保険事業のセグメントに属しております。
- 5 平均年間給与には、賞与および基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社グループの経営方針、経営環境、経営戦略および対処すべき課題は以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、本有価証券報告書提出日現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは、SOMPOホールディングス株式会社が定める以下のグループ経営理念、グループ行動指針、目指す企業グループ像およびグループ経営基本方針に沿った事業活動を行います。

(グループ経営理念)

SOMPOホールディングスグループは、お客さまの視点ですべての価値判断を行い、保険を基盤としてさらに幅広い事業活動を通じ、お客さまの安心・安全・健康に資する最高品質のサービスをご提供し、社会に貢献します。

(グループ行動指針)

お客さまに最高品質のサービスをご提供するために

1. 一人ひとりがグループの代表であるとの自覚のもと、お客さまの声に真摯に耳を傾け、行動することに努めます。
2. 自ら考え、学び、常に高い目標に向かってチャレンジします。
3. 「スピード」と「シンプルでわかりやすく」を重視します。
4. 誠実さと高い倫理観をもって行動します。

(目指す企業グループ像)

真のサービス産業として、「お客さま評価日本一」を原動力に、世界で伍していくグループを目指します。

(グループ経営基本方針)

1. サービス品質の追求

すべての業務プロセスにおいて品質の向上に取り組み、最高品質のサービスをご提供することにより、お客さまに最も高く評価されるグループになることを目指します。

2. 持続的な成長による企業価値の拡大

目指す企業グループ像の実現に向け、成長分野へ戦略的に経営資源を投入することにより、持続的成長を実現し、企業価値の拡大を目指します。

3. 事業効率の追求

あらゆる分野において、グループで連携し最大の力を発揮することにより、事業効率を高め、安定した事業基盤を築きます。

4. 透明性の高いガバナンス態勢

保険・金融事業等の社会的責任と公共的使命を認識し、透明性の高いガバナンス態勢の構築とリスク管理、コンプライアンスの実効性確保を事業展開の大前提とします。

5. 社会的責任の遂行

環境・健康・医療等の社会的課題に対して本業の強みを活かしつつ、ステークホルダーとの積極的な対話を通じて、企業としての社会的責任を果たし、持続可能な社会の実現に貢献します。

6. 活力ある風土の実現

グループ内の組織活性化を積極的に図り、自由闊達・オープンで活力溢れるグループを実現し、社員とともに成長します。

(2) 経営環境、経営戦略および対処すべき課題

今後の世界経済は、地政学的リスクの影響等について留意する必要があるものの、引き続き緩やかな回復が続くことが期待されます。わが国経済は、海外経済の回復が続く中、民間需要を中心とした緩やかな景気回復が続くものと見込まれます。

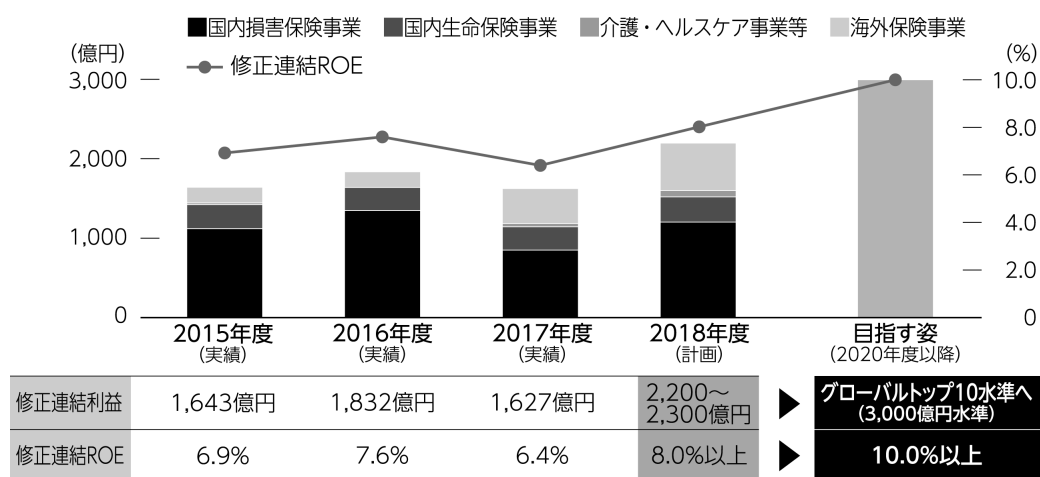
損害保険業界におきましては、国内の人口減少・急速な高齢化、大規模自然災害の常態化、従来にないスピードとインパクトで進行する技術革新とそれに伴うお客さまの行動変化など、当社を取り巻く環境は非連続かつ大きく変化していくことが予想されます。こうした環境変化の中においても、当社が持続的な成長を果たしていくためには、これらの変化をいち早く察知し、ビジネスモデルの変革に取り組むことが求められます。急速に進むテクノロジーの進化や先端科学技術による産業構造の変化を大きなビジネスチャンスとして捉え、新たな価値ある商品やサービスの提供により、社会に貢献し続けることを目指します。また、保険の枠組に捉われないことなく、「安心・安全・健康」の領域において、社会的課題の解決につながる新事業の創造にも取り組んでまいります。

当社は、引き続き、SOMPOホールディングスグループの中期経営計画で掲げている「安心・安全・健康のテーマパーク」の構築に向け、持続的な成長を図るとともに、グループ経営数値目標である「2018年度の修正連結利益2,200億円～2,300億円、修正連結ROE8.0%以上」の達成に向けて、グループをあげて取り組んでまいります。

(参考1) 損害保険ジャパン日本興亜株式会社(単体)の業績予想

	2017年度(実績)	2018年度(予想)
正味収入保険料	21,680億円	21,460億円
保険引受利益	948億円	1,280億円
経常利益	1,752億円	2,500億円
当期純利益	1,700億円	1,870億円
修正利益	878億円	1,206億円

(参考2) SOMPOホールディングスグループの経営数値目標



(注) 2018年度以降のSOMPOホールディングスグループの事業部門別修正利益、修正連結利益および修正連結ROEの計算方法は、以下のとおりであります。

		計算方法
事業部門別修正利益	国内損害保険事業 ※1	当期純利益 +異常危険準備金繰入額(税引後) +価格変動準備金繰入額(税引後) -有価証券の売却損益・評価損(税引後) -特殊要因(子会社配当など)
	国内生命保険事業	当期純利益 +危険準備金繰入額(税引後) +価格変動準備金繰入額(税引後) +責任準備金補正(税引後) +新契約費繰延(税引後) -新契約費償却(税引後)
	介護・ヘルスケア事業等 ※2	当期純利益
	海外保険事業	当期純利益(主な非連結子会社含む) なお、Sompo International ※3のみOperating Income ※4
修正連結利益		事業部門別修正利益の合計
修正連結純資産		連結純資産(除く国内生命保険事業純資産) +国内損害保険事業異常危険準備金(税引後) +国内損害保険事業価格変動準備金(税引後) +国内生命保険事業修正純資産 ※5
修正連結ROE		修正連結利益÷修正連結純資産(分母は期首・期末の平均残高)

※1 損害保険ジャパン日本興亜株式会社、セゾン自動車火災保険株式会社、そんぽ24損害保険株式会社、損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社、損保ジャパン日本興亜DC証券株式会社およびSOMPOリスクアマネジメント株式会社の合計。

※2 SOMPOケア株式会社、SOMPOケアネクスト株式会社、株式会社シダー、損保ジャパン日本興亜アセットマネジメント株式会社、株式会社プライムアシスタンス、SOMPOワランティ株式会社および株式会社フレッシュハウスの合計。

※3 Sompo Internationalは、Sompo International Holdings Ltd.およびその傘下のグループ会社の総称。

※4 Sompo Internationalの修正利益は一過性の変動要素を除いたOperating Income(=当期純利益-為替損益-有価証券売却・評価損益-減損損失など)で定義。

※5 国内生命保険事業修正純資産=国内生命保険事業純資産(日本会計基準)+危険準備金(税引後)+価格変動準備金(税引後)+責任準備金補正(税引後)+未償却新契約費(税引後)

2 【事業等のリスク】

当社グループの事業その他に関して、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、主として以下のものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、本有価証券報告書提出日現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 日本の経済環境悪化に伴うリスク

当社グループの業績は、わが国の経済環境や金融市場に大きく影響されます。当社グループは、主な事業基盤を日本国内に置くとともに、保有する主な運用資産が有価証券、貸付金等であり、国内株式、国内債券、国内融資および国内不動産等、わが国経済の変動に対するリスクが相対的に大きい資産ポートフォリオとなっております。このため、今後わが国の経済環境等が悪化した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 保険業界を取り巻く環境変化に伴うリスク

当社グループは、損害保険を中心とした事業展開を行っておりますが、自動車保有台数の減少、少子高齢化等を背景としたマーケット規模の縮小や、規制緩和による新規参入会社の出現、技術革新に伴う事故の減少による保険ニーズの減少、業界再編等による顧客・提携先との関係の変化、デジタル技術進展への対応不十分に起因する競争力・収益基盤の劣化・毀損等、わが国の保険業界を取り巻く環境は大きく変化しております。今後、保険業界を取り巻く環境が更に悪化した場合には、収益力が低下する等、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 海外保険事業に関するリスク

当社グループは、海外における保険事業の拡大に積極的に取り組んでおりますが、海外の保険市場には、わが国の保険市場にはない各国固有のリスクが存在しております。主なリスクは、現地における政治・社会・経済情勢の変化、為替変動、法律・規制の変更であり、さらに、進出している国や地域によっては、テロ・暴動等による政治的・社会的混乱も考えられます。また、M&Aによる買収企業において、投資金額に見合う収益が得られないリスクもあります。これら海外保険事業に関するリスクが発現した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 関連事業に関するリスク

当社グループは、保険事業以外に、確定拠出年金事業等の事業伸展も図っております。これらの事業を展開する市場は、それぞれ厳しい競争にさらされており、投資金額に見合う収益が得られない場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 規制の変更に伴うリスク

当社グループは、保険業法をはじめとして、会計制度・税制等、様々な規制に基づき、各種事業を運営しております。今後、これらの規制が新設または変更された場合には、保険商品等の販売やサービスによる収入の減少、準備金の一層の積み増しや租税負担の増加等により、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 保険商品に関する自然災害リスク

当社グループは、わが国および海外の地震・風水災・雪害等の自然災害による損害に対して巨額の保険金等を支払うことがあります。そのため、当社グループは、補償内容および料率を適切に設定するとともに、再保険の活用や異常危険準備金等の積み立てを行っておりますが、予想の範囲を上回る頻度や規模の自然災害が発生した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 予測を超える保険金等の支払リスク

当社グループの主要事業である保険事業は、売上原価が保険金等の支払いによって事後的に確定する性質を有しております。そのため、当社グループは、補償内容および料率を適切に設定するとともに、将来の保険金等の支払いに備えて、保険契約準備金の積み立てを行っておりますが、実際の保険事故の発生率等が当初の予測と乖離した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 再保険に関するリスク

当社グループでは、再保険を活用し、巨大損害や自然災害に対するリスク分散に努めておりますが、再保険市場の環境変化により、再保険料が高騰する、あるいは十分な再保険が手当てできないリスクがあります。また、再保険会社の破綻等により、再保険金が回収不能となる信用リスクも伴います。これら再保険に関するリスクが発現した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 株式等の価格変動リスク

当社グループは、お客さまとの中長期的な関係維持の観点等から、大量の株式を保有しているほか、安定的な資産運用収益を得るため、国内外の有価証券等に幅広く投資しております。株式相場の下落等により、これらの資産の価値が減少した場合には、売却損や評価損の発生、評価差額金の減少等により、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 金利変動リスク

当社グループは、債券や貸付金等の固定金利資産を保有しており、金利上昇により、資産の価値が減少するリスクがあります。一方、当社グループは、積立保険等の予定利率（契約時にお客さまにお約束する運用利回り）を設定した商品を販売しており、金利低下により、実際の運用利回りが予定利率を下回るリスクがあります。また、当社が発行している劣後債は、発行から一定期間経過以降の利払いが変動金利となるため、金利上昇により利払いが増加するリスクがあります。これら金利変動リスクが発現した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 為替変動リスク

当社グループは、米ドル、ユーロ等の外貨建て資産・負債を保有しております。為替変動の影響を受け、資産の価値が減少、あるいは負債の価値が増加した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(12) 信用リスク

当社グループは、株式、債券、貸付金等を保有し、また、信用・保証保険等を販売しております。株式・債券の発行者、貸付先、信用・保証保険契約の保証先の信用力低下や破綻等が発生した場合には、資産の価値の減少、貸倒損失や保険金支払の発生等により、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(13) 自然災害等の発生に伴う事業中断リスク

当社グループは、大規模地震等の自然災害や新型インフルエンザ等のパンデミック（世界的な大流行）の発生等の有事に備え、業務継続計画を策定する等、業務継続体制の構築・整備・検証に努めておりますが、こうした管理にもかかわらず、円滑な業務運営が阻害された場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(14) 情報漏えいに関するリスク

当社グループは、多数のお客さまの情報を取り扱っているほか、様々な経営情報等の内部情報を保有しております。これらの情報に関しては、当社グループ各社において、情報管理態勢を整備し、厳重な管理を行っておりますが、万一重大な情報漏えいが発生した場合には、当社グループの社会的信頼・信用が失墜する、あるいは対応費用の支払いが発生することにより、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(15) 風評リスク

当社グループに対する風評が、マスコミ報道やインターネット上の記事・投稿等により流布した場合に、お客さまや投資家の理解・認識に影響を及ぼすことにより、当社グループの社会的信頼・信用が毀損される可能性があります。当社グループでは、風評に適時適切に対応することで、影響の極小化を図るよう努めておりますが、悪質な風評が流布した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(16) 流動性リスク

財務内容の悪化等による新契約の減少に伴う保険料収入の減少、大量ないし大口解約に伴う解約返戻金支出の増加、地震等の巨大災害発生に伴う支払保険金の増加等により、資金を確保するために通常よりも著しく高いコストを必要としたり、市場の混乱等により保有資産に関して通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされた場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(17) システムリスク

情報技術の進展に伴い、当社グループの事業運営は、情報システムへの依存度を高めてきています。そのため、自然災害、事故、サイバー攻撃による不正アクセス等の外部要因、人為的ミスによる情報システムの不備等の内部要因により、情報システムの停止、誤作動、不正使用等が発生するシステムリスクが内在します。また、システム開発の遅延等により、お客さまへ提供するサービスにおいて他社に劣後する恐れがあります。当社グループでは、システムリスク管理態勢を整備し、継続的にシステムリスクの低減等を進めているものの、重大なシステム障害が発生した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(18) 繰延税金資産の減少に関するリスク

当社グループは、現行の会計基準に従い、将来の課税所得を合理的に見積もったうえで、回収可能性を判断し、繰延税金資産を計上しておりますが、将来の課税所得見積額の変更や税率変更等の税制の改正等により、繰延税金資産が減少し、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(19) 格付の低下に伴うリスク

当社および一部の保険子会社は、格付会社から格付を取得しております。格付会社は各社の財政状態をはじめ、事業環境等を含めた様々な要因により、格付を見直しております。仮に、格付が引き下げられた場合には、営業活動や資金調達コスト等に悪影響が生じ、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

(20) 人事・労務に関するリスク

当社グループは、事業領域の拡大や事業環境の複雑化に対応するため、マネジメント層を含め、「多様性」・「専門性」の実現に向けた優秀な人材の確保・育成に力を入れていますが、必要となる要員数の増加やスキルセットの高度化に伴い、人材不足や人事・労務問題が生じる場合があります。こうしたリスクが発現した場合には、当社グループの成長力と競争力に影響を及ぼす可能性があります。

(21) お客さま本位の適切な業務運営が行われないリスク

当社グループは、「お客さまの視点ですべての価値判断を行う」というグループ経営理念等に基づき、グループ全体で「お客さまの声」に真摯に耳を傾け、商品・サービス・業務運営の改善に活かすなど、お客さま本位の業務運営の実現に向けて取り組んでいます。しかしながら、変化が激しい時代において、お客さまの声を的確に捉えきれず、お客さま本位の業務運営が定着しない場合には、当社グループの競争力または業績や財政状況に影響を及ぼす可能性があります。

(22) その他のリスク

上記のほか、事務ミス、役職員等による不正行為、法令違反、外部からの犯罪行為、訴訟に伴う賠償金の支払い等の発現により、直接・間接のコストが発生する、業務の運営に支障が生じる、当局から行政処分を受ける、当社グループの社会的信頼・信用が失墜する等のリスクがあります。また、積極的に事業展開を進めていく中、新たな事業への進出やM&A等において、投資金額に見合う収益が得られないリスクもあります。こうしたリスクが発現した場合には、当社グループの業績や財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績およびキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」といいます。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態および経営成績の状況

■ 当社グループの経営成績の状況は、次のとおりであります。

経常収益は、保険引受収益が3兆1,013億円、資産運用収益が2,144億円、その他経常収益が170億円となった結果、前連結会計年度に比べて3,508億円増加して3兆3,328億円となりました。一方、経常費用は、保険引受費用が2兆6,302億円、資産運用費用が236億円、営業費及び一般管理費が5,226億円、その他経常費用が172億円となった結果、前連結会計年度に比べて4,539億円増加して3兆1,937億円となりました。

以上の結果、経常収益から経常費用を差し引いた当連結会計年度の経常損益は、前連結会計年度に比べて1,031億円減少して、1,390億円の経常利益となりました。経常利益に特別利益、特別損失、法人税等合計などを加減した親会社株主に帰属する当期純損益は、前連結会計年度に比べて302億円減少して1,405億円の純利益となりました。

■ 当社グループの財政状態の状況は、次のとおりであります。

資産の部合計は、前連結会計年度に比べて1,837億円減少し、8兆9,491億円となりました。負債の部合計は、前連結会計年度に比べて2,247億円減少し、7兆3,588億円となりました。純資産の部合計は、前連結会計年度に比べて409億円増加し、1兆5,903億円となりました。

■ 当社グループの報告セグメントごとの経営成績の状況は、次のとおりであります。

[国内損害保険事業]

正味収入保険料は、前連結会計年度に比べて61億円増加し、2兆2,184億円となりました。親会社株主に帰属する当期純損益は、前連結会計年度に比べて384億円減少し、1,193億円の純利益となりました。

ア. 保険引受業務

(ア) 元受正味保険料 (含む収入積立保険料)

区分	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)
火災	379,901	15.22	△6.84	401,178	15.99	5.60
海上	45,224	1.81	△11.45	46,983	1.87	3.89
傷害	287,846	11.53	3.61	276,557	11.02	△3.92
自動車	1,120,548	44.88	1.21	1,127,108	44.91	0.59
自動車損害賠償責任	318,407	12.75	0.73	297,410	11.85	△6.59
その他	344,665	13.81	4.44	360,403	14.36	4.57
合計	2,496,593	100.00	0.27	2,509,641	100.00	0.52
(うち収入積立保険料)	(131,617)	(5.27)	(9.40)	(120,380)	(4.80)	(△8.54)

(注) 1 諸数値はセグメント間の内部取引相殺前の金額であります。

2 「元受正味保険料 (含む収入積立保険料)」とは、元受保険料から元受解約返戻金および元受その他返戻金を控除したものであります。(積立型保険の積立保険料を含みます。)

(イ) 正味収入保険料

区分	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)
火災	286,008	12.93	△13.67	282,230	12.72	△1.32
海上	43,987	1.99	△14.09	47,386	2.14	7.73
傷害	184,328	8.33	△1.33	182,280	8.22	△1.11
自動車	1,119,205	50.59	1.17	1,124,201	50.68	0.45
自動車損害賠償責任	295,884	13.37	△3.69	292,021	13.16	△1.31
その他	282,816	12.78	2.16	290,288	13.09	2.64
合計	2,212,230	100.00	△2.10	2,218,407	100.00	0.28

(注) 諸数値はセグメント間の内部取引相殺前の金額であります。

(ウ) 正味支払保険金

区分	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)
火災	187,459	14.77	△14.37	201,779	15.50	7.64
海上	27,335	2.15	△16.48	29,084	2.23	6.40
傷害	96,509	7.60	△5.32	96,404	7.41	△0.11
自動車	589,162	46.42	0.28	608,645	46.76	3.31
自動車損害賠償責任	224,462	17.68	△1.03	215,441	16.55	△4.02
その他	144,393	11.38	1.60	150,278	11.55	4.08
合計	1,269,322	100.00	△3.11	1,301,632	100.00	2.55

(注) 諸数値はセグメント間の内部取引相殺前の金額であります。

イ. 資産運用業務

(ア) 運用資産

区分	前連結会計年度 (2017年3月31日)		当連結会計年度 (2018年3月31日)	
	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
預貯金	415,394	6.32	497,791	7.38
買現先勘定	54,999	0.84	74,998	1.11
買入金銭債権	7,624	0.12	6,301	0.09
金銭の信託	104,292	1.59	98,613	1.46
有価証券	4,472,268	68.07	4,484,493	66.50
貸付金	626,475	9.53	661,399	9.81
土地・建物	260,039	3.96	209,472	3.11
運用資産計	5,941,093	90.42	6,033,070	89.47
総資産	6,570,367	100.00	6,743,249	100.00

(注) 諸数値はセグメント間の内部取引相殺後の金額であります。

(イ) 有価証券

区分	前連結会計年度 (2017年3月31日)		当連結会計年度 (2018年3月31日)	
	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
国債	929,563	20.79	842,594	18.79
地方債	11,363	0.25	14,380	0.32
社債	572,012	12.79	571,645	12.75
株式	1,555,881	34.79	1,624,478	36.22
外国証券	1,352,727	30.25	1,366,275	30.47
その他の証券	50,720	1.13	65,119	1.45
合計	4,472,268	100.00	4,484,493	100.00

(注) 1 諸数値はセグメント間の内部取引相殺後の金額であります。

- 2 前連結会計年度の「その他の証券」の主なもの、投資信託受益証券37,716百万円であります。
当連結会計年度の「その他の証券」の主なもの、投資信託受益証券51,499百万円であります。

(ウ) 利回り

a. 運用資産利回り (インカム利回り)

区分	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	収入金額 (百万円)	平均運用額 (百万円)	年利回り (%)	収入金額 (百万円)	平均運用額 (百万円)	年利回り (%)
預貯金	21	463,923	0.00	96	458,442	0.02
コールローン	0	519	0.01	0	80	0.03
買現先勘定	4	113,354	0.00	3	72,887	0.00
買入金銭債権	192	8,416	2.29	150	6,375	2.36
金銭の信託	2,672	109,169	2.45	2,395	95,770	2.50
有価証券	101,548	3,370,886	3.01	92,744	3,211,237	2.89
貸付金	6,448	600,093	1.07	6,508	629,534	1.03
土地・建物	4,697	266,758	1.76	4,545	255,789	1.78
小計	115,585	4,933,122	2.34	106,444	4,730,119	2.25
その他	1,060	—	—	1,218	—	—
合計	116,646	—	—	107,663	—	—

- (注) 1 諸数値はセグメント間の内部取引相殺後の金額であります。
- 2 収入金額は、連結損益計算書における「利息及び配当金収入」に、「金銭の信託運用益」および「金銭の信託運用損」のうち利息及び配当金収入相当額を含めた金額であります。
- 3 平均運用額は原則として各月末残高（取得原価または償却原価）の平均に基づいて算出しております。ただし、コールローン、買現先勘定および買入金銭債権については日々の残高（取得原価または償却原価）の平均に基づいて算出しております。
- 4 連結貸借対照表における有価証券には持分法適用会社に係る株式を含めておりますが、平均運用額および年利回りの算定上は同株式を除外しております。

b. 資産運用利回り (実現利回り)

区分	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	資産運用 損益 (実現ベース) (百万円)	平均運用額 (取得原価 ベース) (百万円)	年利回り (%)	資産運用 損益 (実現ベース) (百万円)	平均運用額 (取得原価 ベース) (百万円)	年利回り (%)
預貯金	760	463,923	0.16	△1,578	458,442	△0.34
コールローン	0	519	0.01	0	80	0.03
買現先勘定	4	113,354	0.00	3	72,887	0.00
買入金銭債権	192	8,416	2.29	150	6,375	2.36
金銭の信託	2,318	109,169	2.12	5,307	95,770	5.54
有価証券	172,504	3,370,886	5.12	169,175	3,211,237	5.27
貸付金	7,662	600,093	1.28	4,565	629,534	0.73
土地・建物	4,697	266,758	1.76	4,545	255,789	1.78
金融派生商品	△16,218	—	—	△11,326	—	—
その他	1,315	—	—	△170	—	—
合計	173,237	4,933,122	3.51	170,670	4,730,119	3.61

- (注) 1 諸数値はセグメント間の内部取引相殺後の金額であります。
- 2 資産運用損益 (実現ベース) は、連結損益計算書における「資産運用収益」および「積立保険料等運用益」の合計額から「資産運用費用」を控除した金額であります。
- 3 平均運用額 (取得原価ベース) は原則として各月末残高 (取得原価または償却原価) の平均に基づいて算出しております。ただし、コールローン、買現先勘定および買入金銭債権については日々の残高 (取得原価または償却原価) の平均に基づいて算出しております。
- 4 連結貸借対照表における有価証券には持分法適用会社に係る株式を含めておりますが、平均運用額および年利回りの算定上は同株式を除外しております。

(エ) 海外投融資

区分	前連結会計年度 (2017年3月31日)		当連結会計年度 (2018年3月31日)	
	金額 (百万円)	構成比 (%)	金額 (百万円)	構成比 (%)
外貨建				
外国公社債	826,591	56.61	786,891	53.37
外国株式	132,399	9.07	120,587	8.18
その他	248,876	17.05	310,948	21.09
計	1,207,867	82.73	1,218,427	82.63
円貨建				
非居住者貸付	3,600	0.25	3,600	0.24
外国公社債	79,421	5.44	44,623	3.03
その他	169,193	11.59	207,848	14.10
計	252,214	17.27	256,071	17.37
合計	1,460,081	100.00	1,474,498	100.00
海外投融資利回り				
運用資産利回り (インカム利回り)		2.86%		2.37%
資産運用利回り (実現利回り)		2.47%		2.49%

- (注) 1 諸数値はセグメント間の内部取引相殺後の金額であります。
2 金銭の信託として運用しているものを含めて表示しております。
3 「海外投融資利回り」のうち「運用資産利回り (インカム利回り)」は、海外投融資に係る資産について、「(ウ) 利回り a. 運用資産利回り (インカム利回り)」と同様の方法により算出したものであります。
4 「海外投融資利回り」のうち「資産運用利回り (実現利回り)」は、海外投融資に係る資産について、「(ウ) 利回り b. 資産運用利回り (実現利回り)」と同様の方法により算出したものであります。
5 前連結会計年度の外貨建「その他」の主なものは投資信託受益証券202,278百万円であり、円貨建「その他」の主なものは投資信託受益証券123,107百万円であります。
当連結会計年度の外貨建「その他」の主なものは投資信託受益証券239,262百万円であり、円貨建「その他」の主なものは投資信託受益証券156,103百万円であります。

[海外保険事業]

正味収入保険料は、前連結会計年度に比べて2,982億円増加し、6,363億円となりました。親会社株主に帰属する当期純損益は、前連結会計年度に比べて80億円増加し、208億円の純利益となりました。

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)		当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	
	金額 (百万円)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	対前年増減 (△)率(%)
正味収入保険料	338,105	15.55	636,347	88.21

(注) 諸数値はセグメント間の内部取引相殺前の金額であります。

(参考) 提出会社の状況

ア. 保険引受利益

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	対前年増減(△)額 (百万円)
	金額(百万円)	金額(百万円)	
保険引受収益	2,405,516	2,424,702	19,186
保険引受費用	1,986,208	2,021,875	35,666
営業費及び一般管理費	306,724	307,876	1,152
その他収支	△108	△135	△26
保険引受利益	112,474	94,815	△17,659

(注) 1 営業費及び一般管理費は、損益計算書における営業費及び一般管理費のうち保険引受に係る金額であります。

2 その他収支は、自動車損害賠償責任保険等に係る法人税相当額などであります。

イ. 種目別保険料・保険金

(ア) 元受正味保険料(含む収入積立保険料)

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)
火災	378,310	15.45	△6.85	399,798	16.27	5.68
海上	45,224	1.85	△11.45	46,983	1.91	3.89
傷害	284,185	11.61	3.76	273,261	11.12	△3.84
自動車	1,078,816	44.06	0.75	1,081,151	43.99	0.22
自動車損害賠償責任	318,407	13.00	0.73	297,410	12.10	△6.59
その他	343,411	14.03	4.44	359,145	14.61	4.58
合計	2,448,355	100.00	0.06	2,457,751	100.00	0.38
(うち収入積立保険料)	(131,574)	(5.37)	(9.45)	(120,364)	(4.90)	(△8.52)

(イ) 正味収入保険料

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)	金額 (百万円)	構成比 (%)	対前年増減 (△)率(%)
火災	285,388	13.18	△13.68	281,742	13.00	△1.28
海上	43,985	2.03	△14.10	47,385	2.19	7.73
傷害	181,798	8.39	△1.32	179,939	8.30	△1.02
自動車	1,077,749	49.76	0.71	1,078,546	49.75	0.07
自動車損害賠償責任	295,208	13.63	△3.71	291,361	13.44	△1.30
その他	281,564	13.00	2.15	289,032	13.33	2.65
合計	2,165,694	100.00	△2.38	2,168,009	100.00	0.11

(ウ) 正味支払保険金

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	金額 (百万円)	対前年増減 (△)率(%)	正味損害率 (%)	金額 (百万円)	対前年増減 (△)率(%)	正味損害率 (%)
火災	187,049	△14.40	67.33	201,675	7.82	73.32
海上	27,345	△16.46	65.34	29,098	6.41	64.27
傷害	95,014	△5.47	56.53	94,919	△0.10	56.69
自動車	565,421	△0.40	60.05	581,583	2.86	61.46
自動車損害賠償責任	223,807	△1.03	82.57	214,806	△4.02	80.12
その他	144,205	1.61	54.73	150,046	4.05	55.48
合計	1,242,843	△3.47	63.20	1,272,130	2.36	64.37

(注) 正味損害率=(正味支払保険金+損害調査費)/正味収入保険料×100

ウ. 利回り

(ア) 運用資産利回り (インカム利回り)

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	収入金額 (百万円)	平均運用額 (百万円)	年利回り (%)	収入金額 (百万円)	平均運用額 (百万円)	年利回り (%)
預貯金	21	430,464	0.01	96	412,078	0.02
コールローン	0	519	0.01	0	80	0.03
買現先勘定	4	113,354	0.00	3	72,887	0.00
買入金銭債権	192	8,416	2.29	150	6,375	2.36
金銭の信託	2,672	109,169	2.45	2,395	95,770	2.50
有価証券	102,343	3,778,441	2.71	93,534	4,280,568	2.19
貸付金	6,448	600,092	1.07	6,508	629,534	1.03
土地・建物	4,825	266,553	1.81	4,719	255,504	1.85
小計	116,509	5,307,011	2.20	107,409	5,752,800	1.87
その他	1,061	—	—	1,220	—	—
合計	117,570	—	—	108,629	—	—

(注) 1 収入金額は、損益計算書における「利息及び配当金収入」に、「金銭の信託運用益」および「金銭の信託運用損」のうち利息及び配当金収入相当額を含めた金額であります。

2 平均運用額は原則として各月末残高(取得原価または償却原価)の平均に基づいて算出しております。ただし、コールローン、買現先勘定および買入金銭債権については日々の残高(取得原価または償却原価)の平均に基づいて算出しております。

(イ) 資産運用利回り (実現利回り)

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	資産運用 損益 (実現ベース) (百万円)	平均運用額 (取得原価 ベース) (百万円)	年利回り (%)	資産運用 損益 (実現ベース) (百万円)	平均運用額 (取得原価 ベース) (百万円)	年利回り (%)
預貯金	760	430,464	0.18	△1,578	412,078	△0.38
コールローン	0	519	0.01	0	80	0.03
買現先勘定	4	113,354	0.00	3	72,887	0.00
買入金銭債権	192	8,416	2.29	150	6,375	2.36
金銭の信託	2,318	109,169	2.12	5,307	95,770	5.54
有価証券	173,289	3,778,441	4.59	135,455	4,280,568	3.16
貸付金	7,662	600,092	1.28	4,565	629,534	0.73
土地・建物	4,825	266,553	1.81	4,719	255,504	1.85
金融派生商品	△16,218	—	—	△11,326	—	—
その他	1,320	—	—	△166	—	—
合計	174,155	5,307,011	3.28	137,129	5,752,800	2.38

(注) 1 資産運用損益 (実現ベース) は、損益計算書における「資産運用収益」および「積立保険料等運用益」の合計額から「資産運用費用」を控除した金額であります。

2 平均運用額 (取得原価ベース) は原則として各月末残高 (取得原価または償却原価) の平均に基づいて算出しております。ただし、コールローン、買現先勘定および買入金銭債権については日々の残高 (取得原価または償却原価) の平均に基づいて算出しております。

3 資産運用利回り (実現利回り) にその他有価証券の評価差額等を加味した時価ベースの利回り (時価総合利回り) は以下のとおりであります。

なお、資産運用損益等 (時価ベース) は、資産運用損益 (実現ベース) にその他有価証券、買入金銭債権 (その他有価証券に準じて処理をするものに限ります。) および金銭の信託 (その他有価証券に準じて処理をする運用目的・満期保有目的以外のものに限ります。) に係る評価差額 (税効果控除前の金額によります。) の当事業年度増減額ならびに繰延ヘッジ損益 (税効果控除前の金額によります。) の当事業年度増減額を加減算した金額であります。

また、平均運用額 (時価ベース) は、平均運用額 (取得原価ベース) にその他有価証券、買入金銭債権 (その他有価証券に準じて処理をするものに限ります。) および金銭の信託 (その他有価証券に準じて処理をする運用目的・満期保有目的以外のものに限ります。) に係る前事業年度末評価差額 (税効果控除前の金額によります。) ならびに運用目的の金銭の信託に係る前事業年度末評価損益を加減算した金額であります。

区分	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)			当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		
	資産運用 損益等 (時価ベース) (百万円)	平均運用額 (時価ベース) (百万円)	年利回り (%)	資産運用 損益等 (時価ベース) (百万円)	平均運用額 (時価ベース) (百万円)	年利回り (%)
預貯金	760	430,464	0.18	△1,578	412,078	△0.38
コールローン	0	519	0.01	0	80	0.03
買現先勘定	4	113,354	0.00	3	72,887	0.00
買入金銭債権	△155	9,370	△1.66	18	6,981	0.27
金銭の信託	6,636	107,657	6.16	3,322	98,519	3.37
有価証券	241,004	4,952,834	4.87	218,369	5,522,676	3.95
貸付金	7,662	600,092	1.28	4,565	629,534	0.73
土地・建物	4,825	266,553	1.81	4,719	255,504	1.85
金融派生商品	△19,709	—	—	△12,654	—	—
その他	1,320	—	—	△166	—	—
合計	242,348	6,480,847	3.74	216,599	6,998,263	3.10

■ 当社グループのソルベンシー・マージン比率の状況は、次のとおりであります。

[連結ソルベンシー・マージン比率]

当社は、保険業法施行規則第86条の2および第88条ならびに平成23年金融庁告示第23号の規定に基づき、連結ソルベンシー・マージン比率を算出しております。

損害保険会社グループは、保険事故発生の際の保険金支払や積立型保険の満期返戻金支払等に備えて準備金を積み立てておりますが、巨大災害の発生や、資産の大幅な価格下落等、通常の予測を超える危険が発生した場合でも、十分な支払能力を保持しておく必要があります。こうした「通常の予測を超える危険」（表の「(B)連結リスクの合計額」）に対して「損害保険会社グループが保有している資本金・準備金等の支払余力」（表の「(A)連結ソルベンシー・マージン総額」）の割合を示す指標として、保険業法等に基づき計算されたものが、「(C)連結ソルベンシー・マージン比率」であります。

連結ソルベンシー・マージン比率の計算対象となる範囲は、連結財務諸表の取扱いに合わせますが、保険業法上の子会社（議決権が50%超の子会社）については、原則として計算対象に含めております。

連結ソルベンシー・マージン比率は、行政当局が保険会社を監督する際に、経営の健全性を判断するために活用する客観的な指標のひとつであります。その数値が200%以上であれば「保険金等の支払能力の充実の状況が適当である」とされております。

当連結会計年度末の当社の連結ソルベンシー・マージン比率は、前連結会計年度末に比べ109.3ポイント上昇して773.7%となりました。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
(A) 連結ソルベンシー・マージン総額	2,508,547	2,891,980
(B) 連結リスクの合計額	755,018	747,553
(C) 連結ソルベンシー・マージン比率 [(A)/{(B)×1/2}]×100	664.4%	773.7%

[単体ソルベンシー・マージン比率]

当社は、保険業法施行規則第86条および第87条ならびに平成8年大蔵省告示第50号の規定に基づき、単体ソルベンシー・マージン比率を算出しております。

損害保険会社は、保険事故発生の際の保険金支払や積立型保険の満期返戻金支払等に備えて準備金を積み立てておりますが、巨大災害の発生や、損害保険会社が保有する資産の大幅な価格下落等、通常の予測を超える危険が発生した場合でも、十分な支払能力を保持しておく必要があります。こうした「通常の予測を超える危険」（表の「(B)単体リスクの合計額」）に対して、「損害保険会社が保有している資本金・準備金等の支払余力」（表の「(A)単体ソルベンシー・マージン総額」）の割合を示す指標として、保険業法等に基づき計算されたものが、「(C)単体ソルベンシー・マージン比率」であります。

単体ソルベンシー・マージン比率は、行政当局が保険会社を監督する際に、保険会社の経営の健全性を判断するために活用する客観的な指標のひとつであります。その数値が200%以上であれば「保険金等の支払能力の充実の状況が適当である」とされております。

損害保険ジャパン日本興亜株式会社については、前事業年度末に比べ58.1ポイント上昇して735.1%となりました。

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
(A) 単体ソルベンシー・マージン総額	2,766,796	3,078,246
(B) 単体リスクの合計額	817,299	837,472
(C) 単体ソルベンシー・マージン比率 [(A)/{(B)×1/2}]×100	677.0%	735.1%

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における区分ごとのキャッシュ・フローの状況は以下のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、法人税等の支払額の増加などにより、前連結会計年度に比べて1,349億円減少し、428億円となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度における子会社株式の取得に伴う支出の反動などにより、前連結会計年度に比べて4,152億円増加し、1,281億円となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、債券貸借取引受入担保金の減少などにより、前連結会計年度に比べて3,473億円減少し、△553億円となりました。

以上の結果、当連結会計年度の現金及び現金同等物の期末残高は、前連結会計年度に比べて1,252億円増加し、8,014億円となりました。

③ 生産、受注及び販売の実績

「生産、受注及び販売の実績」は、損害保険業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。当社の連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況」に記載のとおりですが、特に以下の事項に関する会計方針および見積りが当社グループの連結財務諸表の作成に大きな影響を及ぼすと考えております。

ア. 金融商品の時価の算定方法

金融商品の時価は、原則として市場価格に基づいておりますが、一部の市場価格のない金融商品については、将来予想されるキャッシュ・フローの現在価値や、契約期間その他の契約を構成する要素を基礎として算定した価格等を時価としております。当該時価の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該時価が変動することもあります。

イ. 有価証券の減損

その他有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）については、原則として、期末日の時価が取得原価に比べて30%以上下落したものを減損の対象としております。今後、有価証券市場が変動した場合には、有価証券評価損の計上が必要となる可能性があります。

ウ. 固定資産の減損

固定資産については、資産または資産グループの回収可能価額が帳簿価額を下回った場合に、その差額を減損損失に計上しております。回収可能価額は、資産または資産グループの時価から処分費用見込額を控除した正味売却価額と割引後将来キャッシュ・フローとして算定される使用価値のいずれか大きい方としていることから、固定資産の使用方法を変更した場合もしくは不動産取引相場や賃料相場、その他経営環境が変動した場合またはのれんが認識された取引において取得した事業の状況に変動が生じた場合には、減損損失の計上が必要となる可能性があります。

エ. 繰延税金資産

当連結会計年度における繰延税金資産および繰延税金負債の内訳は、「第5 経理の状況」の「注記事項（税効果会計関係）」に記載したとおりであります。繰延税金資産の計上に際しては、将来の課税所得の見積りに基づき、回収可能性の見込めない部分を評価性引当額として、繰延税金資産から控除しております。将来、経営環境の変化等により課税所得の見積りが大きく変動した場合や、税制改正により税率の変更等が生じた場合には、繰延税金資産の計上額が変動する可能性があります。

オ. 貸倒引当金

貸倒引当金の計上基準は、「第5 経理の状況」の「注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）」に記載したとおりであります。将来、貸付先等の財政状態が変化した場合には、貸倒引当金の計上額が変動する可能性があります。

カ. 支払備金

支払備金は、支払義務が発生した保険金等のうち、まだ支払っていない金額の見積額を計上しております。このうち、既発生未報告の支払備金については、主として統計的な見積方法により算出しております。将来、インフレや為替の影響、さらには裁判の判例の動向などにより支払備金の必要額が変動する可能性があります。

キ. 責任準備金等

保険契約に基づく将来の債務の履行に備え、責任準備金等を積み立てております。また、一部の長期の保険契約について標準責任準備金を積み立てております。当初想定した環境・条件等が大きく変動し予期せぬ損害の発生が見込まれる場合には、責任準備金等の必要額が変動する可能性があります。

ク. 退職給付債務等

退職給付費用および退職給付債務の計算の基礎は、「第5 経理の状況」の「注記事項（退職給付関係）」に記載したとおりであります。これらの計算の基礎と実績値が異なる場合、または計算の基礎が変更された場合には、将来の退職給付費用および退職給付債務が変動する可能性があります。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識および分析・検討内容

■ 当社グループの経営成績の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。

当連結会計年度の世界経済は、米国での着実な景気回復や中国を中心とする新興国の持ち直しの動きもあり、全体として緩やかな回復が続きました。わが国経済は、生産・設備投資が緩やかに増加し、企業収益や雇用情勢が改善する中、輸出や個人消費も持ち直し、緩やかな回復基調が続きました。

このような経営環境のもと、当連結会計年度における当社グループの業績は次のとおりとなりました。

経常収益は、保険引受収益が3兆1,013億円、資産運用収益が2,144億円、その他経常収益が170億円となった結果、前連結会計年度に比べて3,508億円増加して3兆3,328億円となりました。一方、経常費用は、保険引受費用が2兆6,302億円、資産運用費用が236億円、営業費及び一般管理費が5,226億円、その他経常費用が172億円となった結果、前連結会計年度に比べて4,539億円増加して3兆1,937億円となりました。

以上の結果、経常収益から経常費用を差し引いた当連結会計年度の経常損益は、前連結会計年度に比べて1,031億円減少して、1,390億円の経常利益となりました。経常利益に特別利益、特別損失、法人税等合計などを加減した親会社株主に帰属する当期純損益は、前連結会計年度に比べて302億円減少して1,405億円の純利益となりました。

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因として、当連結会計年度は、海外連結子会社の組織再編に伴う子会社清算益を特別利益に計上したことや組織再編に伴う税金費用の減少などもありましたが、北米ハリケーン等の海外自然災害により正味発生保険金が増加したことや固定資産処分損の増加により特別損失が増加したことなどもあり、減益となりました。

当社グループの資本の財源および資金の流動性については、負債特性や流動性などを踏まえて、引き続き債券を中心とした安定的なポートフォリオを構築しております。また、グループ中期経営計画を遂行するうえで必要な財務健全性の強化を図るため、当社は、第3回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約付）を発行するほか、シンジケートローンによる借入を実行いたしました。

■ 当社グループの財政状態の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。

[資産の部]

当連結会計年度の資産の部合計は、国内外における保険営業の伸展などにより増加した一方で、Canopus AGの株式譲渡などによる減少により、前連結会計年度に比べて1,837億円減少し、8兆9,491億円となりました。

[負債の部]

当連結会計年度の負債の部合計は、社債の新規発行や借入の新規実行などにより増加した一方で、Canopus AGの株式譲渡などによる減少により、前連結会計年度に比べて2,247億円減少し、7兆3,588億円となりました。

[純資産の部]

当連結会計年度の純資産の部合計は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上による利益剰余金の増加や株価上昇によるその他有価証券評価差額金の増加などにより、前連結会計年度に比べて409億円増加し、1兆5,903億円となりました。

- 報告セグメントごとの経営成績の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。

[国内損害保険事業]

正味収入保険料は、自動車損害賠償責任保険においては保険料率の引き下げなどにより減収し、火災保険においては受再保険料が減収したことなどにより減収しました。一方、自動車保険においては商品改定を主因とした契約件数の増加などにより増収し、海上保険においては外航貨物保険の増収により増収しました。これらの結果、全種目合計の正味収入保険料は、前連結会計年度に比べて61億円増加し、2兆2,184億円となりました。親会社株主に帰属する当期純損益は、保険金支払が増加したことなどによる保険引受利益の減少や、固定資産処分損の増加による特別損失の増加などにより、前連結会計年度に比べて384億円減少し、1,193億円の純利益となりました。

[海外保険事業]

正味収入保険料は、2017年3月にEndurance Specialty Holdings Ltd.の株式を取得して同社およびその傘下会社を連結子会社としたことなどの影響により、前連結会計年度に比べて2,982億円増加し、6,363億円となりました。親会社株主に帰属する当期純損益は、北米ハリケーン等の海外自然災害により正味発生保険金が増加したものの、連結子会社の組織再編に伴う子会社清算益を特別利益に計上したことや組織再編に伴う税金費用の減少などもあり、前連結会計年度に比べて80億円増加し、208億円の純利益となりました。

- 当社グループのソルベンシー・マージン比率の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

[連結ソルベンシー・マージン比率]

連結ソルベンシー・マージン総額は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上、国内株式相場の上昇に伴うその他有価証券評価差額金の増加等により、3,834億円増加し、28,919億円となりました。

連結リスクの合計額は、Canopus AGの株式譲渡などにより、74億円減少し、7,475億円となりました。

結果、連結ソルベンシー・マージン比率は前連結会計年度末に比べて109.3ポイント上昇して773.7%となり、「保険金等の支払能力の充実の状況が適当である」とされる200%を上回る水準となっております。

[単体ソルベンシー・マージン比率]

損害保険ジャパン日本興亜株式会社については、単体ソルベンシー・マージン総額は、当期純利益の計上、国内株式相場上昇に伴うその他有価証券評価差額金の増加等により、3,114億円増加し、30,782億円となりました。

単体リスクの合計額は、国内株式相場の上昇等により資産運用リスクが125億円増加したこと等により、201億円増加し、8,374億円になりました。

結果、単体ソルベンシー・マージン比率は前事業年度末に比べて58.1ポイント上昇して735.1%となり、「保険金等の支払能力の充実の状況が適当である」とされる200%を上回る水準となっております。

4 【経営上の重要な契約等】

(1) Canopus AGの株式譲渡

当社は、2017年9月1日付で、当社の連結子会社であるCanopus AG（2018年1月4日にSompo Canopus AGから商号変更）の普通株式100.0%を譲渡する株式譲渡契約を、Centerbridge Partners, L.P.の関連会社が運営するファンドが出資する英国王室属領ジャージー島法人であるFortuna Holdings Limitedと締結しました。

また、本株式譲渡契約に基づき、2018年3月9日に同社の株式を譲渡いたしました。対象会社の概要、株式譲渡の理由は、以下のとおりであります。

① 対象会社の概要

商号：Canopus AG（以下「Canopus社」といいます。）

所在地：スイス

事業内容：保険持株会社

資本金：100,000スイスフラン

設立年月日：2003年10月24日

② 株式譲渡の理由

2017年3月のEndurance Specialty Holdings Ltd. グループの買収により、同社と同じロイズビジネスを有するCanopus社の経営体制を維持することは、当社グループとして戦略的一貫性、効率性、ブランドの統一感を欠くことになるほか、性急かつ無理に統合することはCanopus社の企業価値を毀損することとなります。

これらを総合的に勘案した結果、Canopus社にかかる事業を譲渡することが当社の資本効率を高め株主価値を最大化するとともに、同社にとっても最適な選択肢であるという判断によるものです。

(2) セゾン自動車火災保険株式会社とそんぼ24損害保険株式会社の合併

いずれも当社の連結子会社であるセゾン自動車火災保険株式会社（以下「セゾン自動車火災」といいます。）とそんぼ24損害保険株式会社（以下「そんぼ24」といいます。）は、2018年2月22日開催のセゾン自動車火災の取締役会と2018年2月23日開催のそんぼ24の取締役会において、両社における株主総会での承認、関係当局の認可等を前提に両社が合併することを決定しました。

なお、合併契約書の締結は2019年1月に、合併の期日は2019年7月を目処としております。合併の目的、合併の方法等は、以下のとおりであります。

① 合併の目的

当社、セゾン自動車火災およびそんぼ24は、損害保険業界を取り巻く経営環境の変化を踏まえ、国内損害保険事業の効率性と収益性の向上を目指した検討・協議を重ねてまいりました。

その結果、通販型自動車保険マーケットにおいて高い競争力を有するセゾン自動車火災を存続会社として当社グループ内の通販損害保険会社2社を合併するものであります。

② 合併の方法

セゾン自動車火災を存続会社とし、そんぼ24を消滅会社とする吸収合併を予定しております。

③ 引継資産・負債の状況

セゾン自動車火災は、合併の期日において、そんぼ24の資産、負債およびその他一切の権利義務を継承する予定であります。

④ 存続会社および消滅会社の概要

	存続会社	消滅会社
商号	セゾン自動車火災保険株式会社	そんぼ24損害保険株式会社
資本金	31,010百万円	19,000百万円
主要な事業の内容	国内損害保険事業	国内損害保険事業

⑤ 合併後の新会社の概要

商号	セゾン自動車火災保険株式会社
資本金	31,010百万円（予定）
主要な事業の内容	国内損害保険事業

(3) 立川ビルの売却

当社は、2018年3月2日開催の取締役会において、当社のシステム開発部門等が入居する立川ビル（東京都立川市）を売却することを決定し、2018年3月16日付で売買契約を締結しております。

また、本売買契約に基づき、同日付で立川ビルを売却いたしました。なお、同ビル売却後、10年間の賃貸借契約を締結し、同ビルを賃借しております。

対象物件の概要および売却の理由は、以下のとおりであります。

① 対象物件の概要

所在地	東京都立川市曙町二丁目302番地
土地	7,188.33平方メートル
建物	46,313.75平方メートル
売却時帳簿価額	44,609百万円（土地・建物の合計）
建築年月日	1994年12月15日

② 売却の理由

当社のシステム開発部門の拠点として、大規模開発用サーバーの設置等をしておりましたが、この開発用サーバーを移設するとともに、今後のシステム開発部門の拠点整理や不動産市況等を勘案した結果によるものであります。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資の総額は22,962百万円であります。営業店舗網の整備、顧客サービスの拡充、高度情報化への対応強化等を目的として実施しており、主なものは以下のとおりであります。

(1) 国内損害保険事業

当連結会計年度において、19,553百万円の設備投資を実施しております。このうち主なものは、営業用建物の取得（11,546百万円）等であります。

なお、当社のシステム開発部門の拠点として、以下の主要な設備に大規模開発用サーバーの設置等をしておりましたが、この開発用サーバーを移設するとともに、今後のシステム開発部門の拠点整理や不動産市況等を勘案した結果、同設備を売却しております。その内容は以下のとおりであります。

会社名	所在地	設備の内容	売却時期	売却時帳簿価額 (百万円)
提出会社	東京都立川市	営業用設備 (システム開発部門等)	2018年3月16日	44,609

(2) 海外保険事業

当連結会計年度において、3,404百万円の設備投資を実施しております。

なお、重要な設備の除却または売却はありません。

(3) その他（確定拠出年金事業）

当連結会計年度において、4百万円の設備投資を実施しております。

なお、重要な設備の除却または売却はありません。

2 【主要な設備の状況】

当社グループ（当社および連結子会社）における主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

(2018年3月31日現在)

店名 (所在地)	セグメントの 名称	帳簿価額（百万円）				従業員数 (人)	年間賃借料 (百万円)
		土地 (面積㎡) [面積㎡]	建物	動産	リース資産		
本店 東京本部を含む (東京都新宿区) 他東京地区6支店	国内損害保険事業	31,518 (395,799.17) [14,506.86]	41,600	19,507	532	7,771	3,979
神奈川本部 (横浜市中区) 他本部管下3支店	国内損害保険事業	518 (2,992.43)	2,232	313	103	977	368
埼玉本部 (さいたま市大宮区) 他本部管下3支店	国内損害保険事業	4,401 (4,330.76)	1,767	193	89	884	203
千葉本部 (千葉市中央区) 他本部管下2支店	国内損害保険事業	1,308 (3,421.56)	806	236	86	788	425
北海道本部 (札幌市中央区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	1,587 (10,488.46)	3,580	396	140	990	158
東北本部 (仙台市宮城野区) 他本部管下6支店	国内損害保険事業	3,162 (11,061.94)	2,349	571	156	1,434	542
関東本部 (東京都新宿区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	2,558 (9,155.27)	2,683	420	145	1,284	427
静岡本部 (静岡市葵区) 他本部管下2支店	国内損害保険事業	601 (2,138.50)	905	246	61	730	289
中部本部 (名古屋市中区) 他本部管下5支店	国内損害保険事業	4,484 (11,669.07) [196.74]	4,137	532	212	1,930	443
甲信越本部 (東京都新宿区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	1,878 (6,626.22) [306.53]	1,742	359	108	935	299
北陸本部 (石川県金沢市) 他本部管下3支店	国内損害保険事業	1,256 (2,678.08)	1,371	265	70	650	87
関西第一本部 (大阪市西区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	9,570 (23,308.80)	9,576	675	249	2,294	1,110
関西第二本部 (大阪市西区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	4,255 (2,748.80)	1,578	322	100	920	343
中国本部 (広島市中区) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	2,505 (6,384.53)	4,439	485	149	1,309	440
四国本部 (香川県高松市) 他本部管下4支店	国内損害保険事業	2,278 (4,961.48)	1,860	265	73	761	187
九州本部 (福岡市博多区) 他本部管下11支店	国内損害保険事業	3,647 (12,649.36) [7.83]	4,514	797	282	2,532	511

(2) 国内子会社

(2018年3月31日現在)

会社名	店名 (所在地)	セグメントの 名称	帳簿価額(百万円)				従業員数 (人)	年間賃借料 (百万円)
			土地 (面積㎡) [面積㎡]	建物	動産	リース資産		
セゾン自動車火災保険株式会社	本店 (東京都豊島区)	国内損害保険事業	—	87	38	185	500	458
そんぼ24損害保険株式会社	本店 (東京都豊島区)	国内損害保険事業	—	16	171	—	180	179
損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社	本店 (東京都新宿区)	国内損害保険事業	—	189	68	12	1,021	709
損保ジャパン日本興亜DC証券株式会社	本店 (東京都新宿区)	その他 (確定拠出年金事業)	—	0	34	—	90	121

(3) 在外子会社

(2018年3月31日現在)

会社名	店名 (所在地)	セグメントの 名称	帳簿価額(百万円)				従業員数 (人)	年間賃借料 (百万円)
			土地 (面積㎡) [面積㎡]	建物	動産	リース資産		
Sompo International Holdings Ltd. 他グループ43社	本店 (英国領バミューダ ペンブロック)	海外保険事業	299 (12,491.00)	4,020	2,719	—	1,713	4,043
Sompo Japan Nipponkoa Insurance Company of Europe Limited	本店 (イギリス ロンドン)	海外保険事業	—	—	64	—	139	120
Sompo Japan Sigorta Anonim Sirketi	本店 (トルコ イスタンブール)	海外保険事業	—	—	429	—	531	149
Sompo Holdings (Asia) Pte. Ltd.	本店 (シンガポール シンガポール)	海外保険事業	—	21	8	—	41	38
Sompo Insurance Singapore Pte. Ltd.	本店 (シンガポール シンガポール)	海外保険事業	—	4	67	—	287	313
Berjaya Sompo Insurance Berhad	本店 (マレーシア クアラルンプール)	海外保険事業	—	2,346	460	—	670	—
PT Sompo Insurance Indonesia	本店 (インドネシア ジャカルタ)	海外保険事業	—	—	336	3	562	193
Sompo Insurance China Co., Ltd. 他グループ1社	本店 (中国 大連)	海外保険事業	—	—	113	—	294	243
Sompo Insurance (Hong Kong) Company Limited	本店 (中国 香港)	海外保険事業	—	—	39	—	96	104
Sompo Seguros S. A. 他グループ2社	本店 (ブラジル サンパウロ)	海外保険事業	281 (3,287.00)	1,785	501	—	1,947	224

- (注) 1 上記はすべて営業用設備であります。
2 現在休止中の主要な設備はありません。
3 海外駐在員事務所の各数値は、提出会社の本店に含めて記載しております。
4 土地を賃借している場合には、[]内に賃借面積を外書きで記載しております。
5 年間賃借料には、土地または建物を賃借している場合の賃借料を記載しております。
6 年間賃借料には、グループ会社間の取引相殺前の金額を記載しております。
7 在外子会社の帳簿価額および年間賃借料は、2017年12月31日現在の数値であります。
8 上記のほか、主要な賃貸用設備として以下のものがあります。

会社名	設備名	帳簿価額(百万円)	
		土地 (面積㎡)	建物 (面積㎡)
提出会社	本社ビル (東京都新宿区)	251 (790.35)	1,175 (10,577.30)
	銀座ビル (東京都中央区)	47 (1,172.40)	1,592 (9,387.80)
	肥後橋ビル (大阪市西区)	766 (909.76)	889 (7,687.30)
	姫路ビル (兵庫県姫路市)	432 (749.22)	321 (5,048.14)
	名古屋ビル (名古屋市中区)	280 (596.53)	695 (4,993.47)

9 上記のほか、主要な社宅用、厚生用設備として以下のものがあります。

会社名	設備名	帳簿価額(百万円)	
		土地 (面積㎡)	建物 (面積㎡)
提出会社	百合ヶ丘寮 (川崎市麻生区)	88 (5,135.00)	466 (7,703.00)
	武蔵境寮 (東京都西東京市)	1,050 (11,714.30)	476 (5,704.29)
	西宮寮 (兵庫県西宮市)	15 (6,888.16)	442 (5,574.53)
	浦和白幡寮 (さいたま市南区)	756 (1,511.60)	499 (4,916.48)
	小石川寮 (東京都文京区)	1 (2,350.00)	427 (3,264.00)

3 【設備の新設、除却等の計画】

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	2,000,000,000
計	2,000,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2018年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2018年6月28日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	984,055,299	984,055,299	—	単元株制度を採用しておりません。
計	984,055,299	984,055,299	—	—

(注) 当社の株式を譲渡により取得するには、株主または取得者は取締役会の承認を得なければならない旨を定款に定めております。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2014年9月1日(注)	—	984,055	—	70,000	45,770	70,000

(注) 資本準備金の増加は、2014年9月1日付の日本興亜損害保険株式会社との合併において、同社の資本金および資本準備金を当社の資本準備金に組み入れたことによるものであります。

なお、本合併に際し、株式その他金銭等の交付は行っておりません。

(5) 【所有者別状況】

(2018年3月31日現在)

区分	株式の状況							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	—	—	1	—	—	—	1	—
所有株式数(千株)	—	—	—	984,055	—	—	—	984,055	—
所有株式数の割合(%)	—	—	—	100.00	—	—	—	100.00	—

(注) 当社は単元株制度を採用しておりません。

(6) 【大株主の状況】

(2018年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
SOMPOホールディングス株式会社	東京都新宿区西新宿一丁目26番1号	984,055	100.00
計	—	984,055	100.00

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(2018年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	—	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 984,055,299	984,055,299	—
単元未満株式	—	—	—
発行済株式総数	984,055,299	—	—
総株主の議決権	—	984,055,299	—

② 【自己株式等】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 該当事項はありません。

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

3 【配当政策】

当社は、完全親会社であるSOMPOホールディングス株式会社の資本政策に沿って、剰余金の配当を行うこととしており、法令に別段の定めがある場合を除き、会社法第459条第1項各号に掲げる事項を取締役会決議により定めることができる旨、定款に定めております。

内部留保資金につきましては、事業展開のための経営基盤強化に活用するほか、保険金等の支払に備えて安全確実に運用してまいります。

当事業年度に係る剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年11月2日 (取締役会決議)	5,000	5.08	—	2017年11月2日
2018年3月27日 (取締役会決議)	101,400	103.04	—	2018年3月31日

4 【株価の推移】

当社株式は非上場でありますので、該当事項はありません。

5 【役員状況】

男性 17名 女性 2名 (役員のうち女性の比率 10.5%)

(2018年6月28日現在)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役 会長	—	二宮 雅也	1952年 2月25日生	1974年4月 日本火災海上保険株式会社入社 2003年6月 日本興亜損害保険株式会社執行役員社長室長兼社長室IR室長 2004年4月 同社執行役員社長室長兼CR企画部長 2004年6月 同社常務執行役員 2005年6月 同社取締役常務執行役員 2009年6月 同社代表取締役専務執行役員 2011年6月 同社代表取締役社長社長執行役員 NKS Jホールディングス株式会社取締役 2012年4月 NKS Jホールディングス株式会社代表取締役会長 長執行役員 2014年9月 当社代表取締役社長社長執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社代表 取締役会長会長執行役員 2015年4月 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社代表 取締役会長 2015年6月 同社取締役会長 2016年4月 当社代表取締役会長 2018年4月 当社取締役会長(現職) 2018年6月 リコーリース株式会社取締役(現職)	(注)3	—
代表取締役 社長	—	西澤 敬二	1958年 2月11日生	1980年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2008年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員営業企画部長 2010年4月 同社常務執行役員 2010年6月 同社取締役常務執行役員 2012年6月 NKS Jホールディングス株式会社取締役執行役員 2013年4月 株式会社損害保険ジャパン取締役専務執行役員 日本興亜損害保険株式会社専務執行役員 株式会社損害保険ジャパン代表取締役専務執行役員 2014年4月 当社代表取締役専務執行役員 2014年9月 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社取締 役執行役員 2015年4月 当社代表取締役副社長執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社取締 役副社長執行役員 2016年4月 当社代表取締役社長社長執行役員(現職) 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社取締 役 2016年10月 SOMP Oホールディングス株式会社取締役 2017年4月 同社国内損害保険事業オーナー取締役(現職)	(注)3	—
代表取締役 副社長	—	佐藤 史朗	1957年 12月21日生	1981年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2010年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員札幌支店長 2011年4月 同社執行役員 2012年4月 同社常務執行役員 2013年4月 日本興亜損害保険株式会社常務執行役員 2014年9月 当社常務執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社執行 役員南アジア部長 2015年4月 当社取締役専務執行役員 2016年4月 当社代表取締役専務執行役員 2018年4月 当社代表取締役副社長執行役員(現職)	(注)3	—
取締役	—	和田 敏裕	1957年 7月5日生	1981年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2014年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員静岡本部長 日本興亜損害保険株式会社執行役員静岡本部長 2014年9月 当社執行役員静岡本部長 2016年4月 当社取締役常務執行役員 2017年4月 当社取締役専務執行役員(現職)	(注)3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役	—	伊 東 正 仁	1960年 1月20日生	1984年4月 日本火災海上保険株式会社入社 2013年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員千葉支店特命部長 2013年10月 日本興亜損害保険株式会社執行役員千葉支店長 2014年9月 株式会社損害保険ジャパン執行役員千葉支店長 2015年4月 当社執行役員千葉支店長 2015年4月 当社取締役常務執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社常務執行役員 2015年6月 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社取締役常務執行役員 2016年10月 S O M P Oホールディングス株式会社取締役常務執行役員 2018年4月 当社取締役専務執行役員(現職)	(注) 3	—
取締役	—	飯 豊 聡	1962年 3月2日生	1984年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2013年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員IT企画部長 2014年7月 日本興亜損害保険株式会社執行役員IT企画部長 2014年9月 N K S Jひまわり生命保険株式会社取締役常務執行役員 2014年9月 損保ジャパン日本興亜ひまわり生命保険株式会社取締役常務執行役員 2015年4月 当社常務執行役員四国本部長 2017年4月 当社取締役常務執行役員 2018年4月 当社取締役専務執行役員(現職)	(注) 3	—
取締役	—	小 嶋 信 弘	1960年 4月20日生	1985年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2014年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員経営企画部特命部長 日本興亜損害保険株式会社執行役員経営企画部特命部長 N K S Jホールディングス株式会社執行役員経営企画部長 2014年9月 当社執行役員経営企画部特命部長 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社執行役員経営企画部長 2015年4月 当社執行役員南アジア部長 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社執行役員南アジア部長 2016年4月 当社常務執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社常務執行役員 2016年10月 S O M P Oホールディングス株式会社常務執行役員 2017年4月 当社取締役常務執行役員 2018年4月 当社取締役専務執行役員(現職)	(注) 3	—
取締役	—	浦 川 伸 一	1961年 4月28日生	1984年4月 日本アイ・ビー・エム株式会社入社 2013年12月 株式会社損害保険ジャパン執行役員 日本興亜損害保険株式会社執行役員 N K S Jシステムズ株式会社取締役副社長執行役員 2014年9月 当社執行役員 損保ジャパン日本興亜システムズ株式会社代表取締役社長社長執行役員 2015年10月 S O M P Oシステムイノベーションズ株式会社代表取締役社長社長執行役員 2016年4月 当社取締役常務執行役員(現職) 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社常務執行役員 2016年10月 S O M P Oホールディングス株式会社常務執行役員 S O M P Oシステムズ株式会社代表取締役社長社長執行役員(現職) 2017年4月 S O M P Oホールディングス株式会社グループC I O常務執行役員 <主要な兼職> S O M P Oシステムズ株式会社代表取締役社長社長執行役員	(注) 3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役	—	細井 壽人	1959年 8月10日生	1983年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2014年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員リスク管理部長 日本興亜損害保険株式会社執行役員リスク管理部長 NKS Jホールディングス株式会社執行役員リスク管理部長 2014年9月 当社執行役員リスク管理部長 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社執行役員リスク管理部長 2016年4月 当社取締役常務執行役員(現職)	(注)3	—
取締役	—	手島 俊裕	1960年 10月24日生	1992年9月 安田火災海上保険株式会社入社 2017年4月 当社執行役員法務部長 SOMPPOホールディングス株式会社執行役員法務部長 2018年4月 当社取締役常務執行役員(現職)	(注)3	—
取締役	—	櫻田 謙悟	1956年 2月11日生	1978年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2005年7月 株式会社損害保険ジャパン執行役員金融法人部長 2007年4月 同社常務執行役員 2007年6月 同社取締役常務執行役員 2010年4月 NKS Jホールディングス株式会社取締役常務執行役員 2010年7月 株式会社損害保険ジャパン代表取締役社長社長執行役員 NKS Jホールディングス株式会社取締役執行役員 2011年6月 NKS Jホールディングス株式会社取締役 2012年4月 同社代表取締役社長社長執行役員 2014年9月 当社代表取締役会長社長執行役員 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社代表取締役社長社長執行役員 2015年4月 当社代表取締役会長 2015年7月 当社取締役会長 損保ジャパン日本興亜ホールディングス株式会社(現SOMPPOホールディングス株式会社)グループCEO代表取締役社長社長執行役員(現職) 2016年4月 当社取締役(現職) <主要な兼職> SOMPPOホールディングス株式会社グループCEO代表取締役社長社長執行役員	(注)3	—
取締役 (社外取締役)	—	石黒 不二代	1958年 2月1日生	1981年1月 ブラザー工業株式会社入社 1988年1月 株式会社スワロフスキー・ジャパン入社 1994年9月 Alphametric, Inc. 社長 1999年1月 Netyear Group, Inc. 社長兼最高執行責任者 1999年7月 ネットイヤーグループ株式会社取締役 2000年5月 同社代表取締役社長(現職) 2013年6月 株式会社損害保険ジャパン監査役 2014年3月 株式会社ホットリンク取締役(現職) 2014年6月 日本興亜損害保険株式会社監査役 マネックスグループ株式会社取締役(現職) 2014年9月 当社監査役 2015年6月 当社取締役(現職) <主要な兼職> ネットイヤーグループ株式会社代表取締役社長	(注)3	—
取締役 (社外取締役)	—	内田 和成	1951年 10月31日生	1985年1月 株式会社ボストン・コンサルティング・グループ入社 2000年6月 同社日本代表 2005年1月 同社シニアヴァイスプレジデント 2006年3月 サントリー株式会社監査役 2006年4月 早稲田大学商学大学院教授(現職) 2012年2月 キューピー株式会社監査役 2012年6月 三井倉庫株式会社取締役 ライフネット生命株式会社取締役 2012年8月 日本ERI株式会社取締役 2013年12月 ERIホールディングス株式会社取締役 2014年10月 三井倉庫ホールディングス株式会社取締役 2015年2月 キューピー株式会社取締役(現職) 2016年3月 ライオン株式会社取締役(現職) 2017年6月 当社取締役(現職)	(注)3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役 (社外取締役)	—	吉田正子	1954年 8月3日生	1981年3月 株式会社タカキペーカリー入社 2006年4月 株式会社アンデルセン代表取締役社長 2013年4月 株式会社アンデルセン・パン生活文化研究所代表取締役社長 2015年4月 株式会社アンデルセン・パン生活文化研究所コーポレートアドバイザー 2015年6月 株式会社広島銀行監査役(現職) 2018年6月 当社取締役(現職)	(注)3	—
常勤監査役	—	荒井啓隆	1955年 2月8日生	1978年4月 日産火災海上保険株式会社入社 2007年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員長野支店長 2009年6月 同社取締役常務執行役員 2011年6月 同社取締役常務執行役員関東本部長 2012年4月 同社取締役専務執行役員関東本部長 2012年6月 同社代表取締役専務執行役員関東本部長 2013年4月 同社代表取締役専務執行役員東京本部長 日本興亜損害保険株式会社専務執行役員東京本部長 2014年4月 株式会社損害保険ジャパン代表取締役専務執行役員 日本興亜損害保険株式会社専務執行役員 2014年6月 株式会社損害保険ジャパン監査役 2014年9月 当社監査役(現職)	(注)4	—
常勤監査役	—	福島晃	1957年 10月6日生	1980年4月 安田火災海上保険株式会社入社 2010年4月 株式会社損害保険ジャパン執行役員新潟支店長 2011年4月 同社常務執行役員埼玉本部長兼千葉本部長 2013年4月 同社常務執行役員埼玉本部長兼千葉本部副本部長 日本興亜損害保険株式会社常務執行役員埼玉本部長兼千葉本部副本部長 2014年4月 株式会社損害保険ジャパン常務執行役員東京本部長 日本興亜損害保険株式会社常務執行役員東京本部長 2014年9月 当社常務執行役員東京本部長 2015年4月 当社専務執行役員東京本部長 2017年4月 当社専務執行役員 2017年6月 当社監査役(現職)	(注)5	—
監査役 (社外監査役)	—	沖原隆宗	1951年 7月11日生	1974年4月 株式会社三和銀行入行 2001年3月 同行執行役員法人統括部長 2002年1月 株式会社UFJ銀行執行役員法人カンパニー長補佐 2003年5月 同行常務執行役員 2004年5月 同行代表取締役頭取 2004年6月 株式会社UFJホールディングス取締役 2005年10月 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ常務執行役員 2006年1月 株式会社三菱東京UFJ銀行代表取締役副頭取 2008年4月 同行代表取締役副会長 2010年6月 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ代表取締役会長 2014年5月 株式会社三菱東京UFJ銀行(現株式会社三菱UFJ銀行)特別顧問(現職) 2014年6月 株式会社損害保険ジャパン監査役 日本興亜損害保険株式会社監査役 関西電力株式会社取締役(現職) 2014年9月 当社監査役(現職) 2016年6月 株式会社オービックビジネスコンサルタント取締役(現職)	(注)4	—
監査役 (社外監査役)	—	橋本副孝	1954年 7月6日生	1979年4月 弁護士登録 新家猛法律事務所入所 2000年4月 第二東京弁護士会副会長 2006年4月 日本弁護士連合会常務理事 2008年1月 東京八丁堀法律事務所所長・代表パートナー(現職) 2012年4月 第二東京弁護士会会長 日本弁護士連合会副会長 2014年3月 キリンホールディングス株式会社監査役 2015年6月 当社監査役(現職)	(注)6	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役 (社外監査役)	—	中野 武夫	1956年 6月28日生	1980年4月 2007年4月 2009年4月 2010年4月 2010年6月 2012年4月 2013年4月 2017年4月 2018年6月	株式会社富士銀行入行 株式会社みずほ銀行執行役員小舟町支店長 株式会社みずほフィナンシャルグループ常務執行役員 株式会社みずほフィナンシャルストラテジー取締役社長 株式会社みずほフィナンシャルグループ常務取締役 同社取締役 株式会社みずほ銀行取締役副頭取 みずほ信託銀行株式会社取締役社長 同行取締役会長(現職) 当社監査役(現職)	(注)4	—
計							—

- (注) 1 取締役石黒不二代氏、内田和成氏および吉田正子氏は、社外取締役であります。
- 2 監査役沖原隆宗氏、橋本副孝氏および中野武夫氏は、社外監査役であります。
- 3 取締役の任期は、2018年3月期に係る定時株主総会終結の時から2019年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 監査役の任期は、2018年3月期に係る定時株主総会終結の時から2022年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 5 監査役の任期は、2017年3月期に係る定時株主総会終結の時から2021年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 6 監査役の任期は、2015年3月期に係る定時株主総会終結の時から2019年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 7 当社では、意思決定の迅速化および責任体制の明確化を図るために、執行役員制度を導入しております。なお、執行役員の総数は取締役との兼任者を含めて47名であります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① コーポレート・ガバナンス体制の概要等

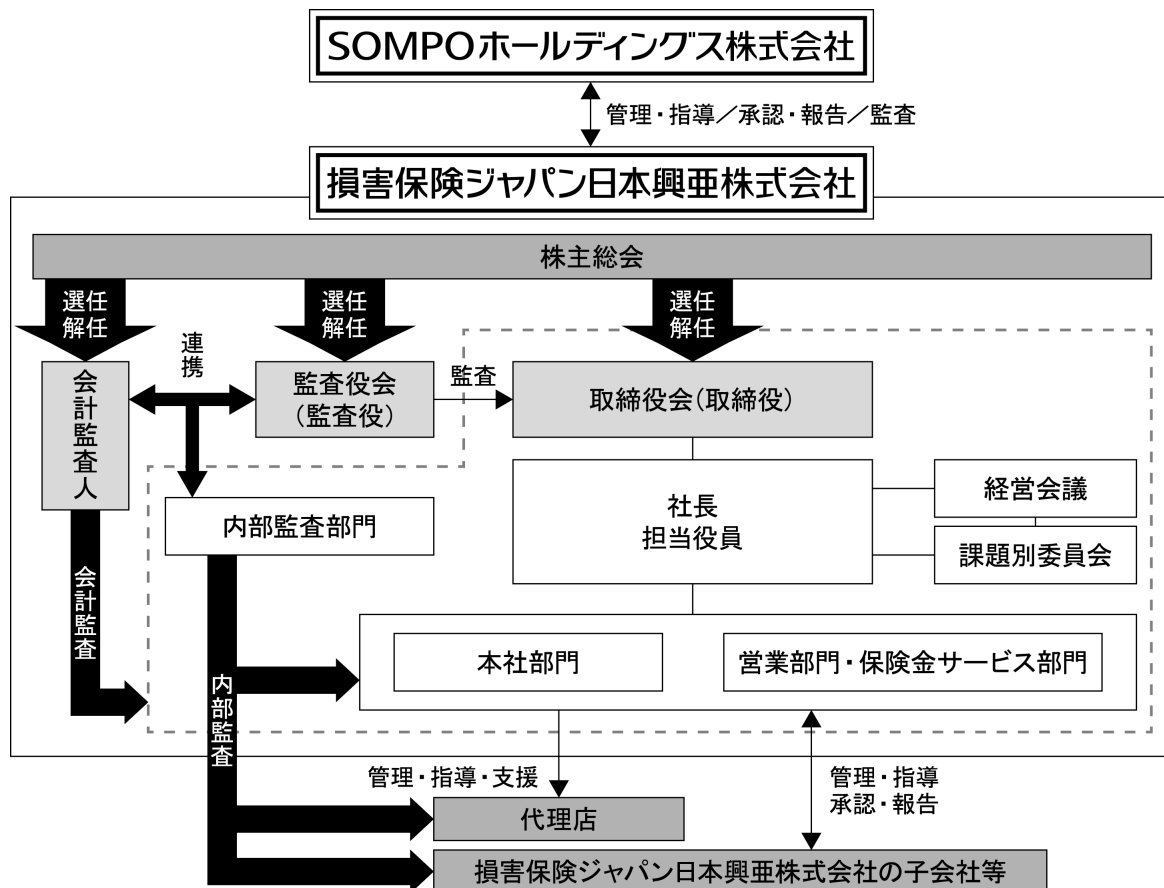
a) コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

SOMPOホールディングスグループは、お客さまの視点ですべての価値判断を行い、保険を基盤としてさらに幅広い事業活動を通じ、お客さまの安心・安全・健康に資する最高品質のサービスをご提供し、社会に貢献することをグループ経営理念として定めております。

グループ経営理念のもと、ステークホルダーへの価値創造に配慮した経営を行うとともに、国内外を問わず、グループ従業員の行動基準として、グループ行動指針を定め、実践することで、企業の持続的な成長による企業価値の向上を目指した事業活動を行い、真のサービス産業として、「お客さま評価日本一」を原動力に、世界で伍していくグループを目指しております。

そのためには、コーポレート・ガバナンスの透明性と公正性の向上を継続して図り、企業の社会的責任を果たすことで、すべてのステークホルダーとの信頼関係を強化することが重要と考え、統治組織の全体像および統治の仕組みの構築に係る基本方針を明確化し、最良のコーポレート・ガバナンスを追求し、その充実に継続的に取り組みます。

b) コーポレート・ガバナンスの体制の概要



(統治組織の全体像およびその採用理由)

当社における企業統治システムは、重要な経営判断と業務執行の監督を担う取締役会と、取締役会から独立した監査役および監査役会により、監督・牽制機能の実効性の維持・向上に努めるべく、監査役会設置会社を選択しております。また、事業オーナー制および執行役員制度を採用し、迅速な意思決定と権限・責任の明確化を図っております。

取締役会は、グループ経営の基本方針およびその根幹となる内部統制基本方針を策定し、これにより、当社およびグループ会社の透明性の高い統治体制を構築しております。

(取締役および取締役会)

取締役会は、法令で定められた責務を履行するほか、経営に関する重要項目を決定するとともに、業務執行の状況に対して、監督機能を発揮しております。

取締役会は、原則毎月開催し、適正人数で迅速に意思決定を行うよう運営しております。また、取締役会の開催にあたっては、その都度、社外役員合同の事前説明会を開催し、重要議題を中心に議案の説明を行っております。事前説明会で出された社外役員の意見・質疑内容等を、取締役会開催前に出席役員全員で共有し、取締役会と事前説明会を一体的に運営することによって、取締役会における建設的で充実した議論および取締役会運営の実効性の確保を図っております。なお、社外取締役相互および執行の最高責任者と自由な意見交換を行うため、社外取締役と社長の会合等を開催しております。

取締役14名のうち3名を社外取締役としており、男性12名・女性2名の構成となっております。

取締役は、これらの重要課題に関する知識の研鑽および経験の蓄積を通じて、経営管理を的確、公正かつ効率的に遂行していきます。

取締役の任期は、その各事業年度の経営に対する責任を明らかにするために、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までとしております。

(監査役および監査役会)

監査役は、当社グループの内部統制システムの構築・運用状況の監査等を通じて、取締役の職務遂行状況を監査するほか、当社グループの持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に資するよう、経営陣に適切な助言および提言を行うように努めております。

監査役会は、上述の監査が実効性をもって実施されるよう監査基準、監査方針および監査計画を策定し、組織的に監査を実施しております。

また、監査役会は予め年間のスケジュールを定めて確実な出席機会の確保に努めるとともに、資料を事前に配付するなど、十分な検討・審議が行える態勢を整備しております。

監査役5名のうち3名を社外監査役としており、男性5名の構成となっております。

監査役監査の実効性の向上を図るため、監査役室を設け、監査役の求めに応じ、必要な知識・経験を有する専属の者を、監査役スタッフ（監査役の職務を補助すべき使用人）として配置しております。

監査役の任期は、会社法が定めるとおり、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までとしております。

(経営会議)

取締役会の効率性および実効性を向上させるべく、当社グループの重要な業務執行に関する事項について協議しております。

(課題別委員会)

経営会議の諮問機関として以下の課題別委員会を設置し、専門性または技術性の高い課題等について協議しております。

- ・内部管理委員会
- ・ERM委員会
- ・未来革新プロジェクト推進委員会

c) 内部統制システムの整備状況等

当社は、「内部統制基本方針」を取締役会決議により定めて、業務の適正を確保するための体制を整備しております。また、「内部統制基本方針」に基づく統制状況について、取締役会が定期的に確認し、体制の充実に努めております。

「内部統制基本方針」は、次のとおりです。

内部統制基本方針

当社は、当社およびグループ会社における業務の適正を確保し、企業統治の強化および質の向上に資するため、関連諸法令およびSOMPOホールディングス株式会社の定めるグループ経営理念等を踏まえ、この基本方針を取締役会において決議します。

なお、当社はこの基本方針に基づく統制状況を適切に把握および検証し、以下に定める体制を整備し、その充実に努めます。

1. 当社ならびにその親会社および子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制

当社は、当社ならびにその親会社およびグループ会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制を次のとおり整備します。

- (1) グループ経営理念、グループ行動指針、目指す企業グループ像、グループ経営基本方針、グループ人事ビジョン、グループCSRビジョンを当社およびグループ会社に示します。
- (2) 当社の親会社であるSOMPOホールディングス株式会社との間で締結する経営管理契約に従い、同社に対して適切に承認を求めるとともに、報告を行います。
- (3) 「SOMPOホールディングスグループ グループ会社経営管理基本方針」に従い、グループ会社の経営管理を適切に行うため、グループ会社の運営・管理に関する規程を定め、グループ会社の業務運営の管理およびその育成等を所管する部門を明確にして適切に経営管理を行うとともに、適切に株主権を行使します。
- (4) グループ会社の事業戦略等、グループの経営に影響を与える重要事項に関する承認・報告制度を整備します。
- (5) SOMPOホールディングス株式会社または当社が定める各種グループ基本方針をグループ会社に周知するとともに、遵守を求めます。また、グループ会社に、事業実態に応じて規程を策定させるなど、体制を整備させます。
- (6) 経営判断に必要な情報収集・調査・検討等を行う体制を整備するとともに、取締役への的確な情報提供等を通じて経営論議の活性化を図ります。また、グループ会社の経営管理などに関する重要事項の経営判断の適正性を確保します。
- (7) 「SOMPOホールディングスグループ グループ内取引管理基本方針」に従い、グループ内における取引等を適切に把握および審査し、当該取引等の公正性および健全性を確保します。

2. 職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

当社は、当社およびグループ会社の取締役、執行役員および使用人（以下「役職員」といいます。）の職務の執行が法令、定款等に適合することを確保するために必要な体制を次のとおり整備します。

- (1) 当社およびグループ会社において、取締役会における取締役の職務執行の状況報告等を通じて役職員の職務の執行が法令等に適合していることを確認します。
- (2) 「SOMPOホールディングスグループ コンプライアンス基本方針」に従い、コンプライアンス体制の整備を図るとともに、役職員が「SOMPOホールディングスグループ コンプライアンス行動規範」を遵守して行動するよう当社およびグループ会社の役職員の行動基準となるコンプライアンスに関するマニュアルを整備し、これらの周知徹底を図り、これらに基づく教育および研修を継続して実施します。
- (3) コンプライアンスに関する統括部署を設置し、コンプライアンス上の課題への対応計画等を定めるコンプライアンス・プログラムの進捗を管理します。
- (4) 当社およびグループ会社において、不祥事件等に係る社内報告、調査、内部通報等の各種制度を整備し、不祥事件等の是正、届出、再発防止等の対応を的確に行います。
- (5) 「SOMPOホールディングスグループ お客さまの声対応基本方針」に従い、お客さまの声を積極的に分析し業務品質の向上に活用するなど、実効性のあるお客さまの声対応体制を構築します。
- (6) 「SOMPOホールディングスグループ お客さまサービス適正管理基本方針」に従い、お客さまに提供する商品サービスの品質・維持・向上に努めるなど、お客さまサービスの適正を確保する体制を構築します。
- (7) 「SOMPOホールディングスグループ 顧客情報管理基本方針」に従い、お客さまの情報を適正に取得・利用するなど、お客さまの情報の管理を適切に行います。

- (8) 「SOMPOホールディングスグループ セキュリティポリシー」に従い、情報資産のセキュリティを確保するために講じるべき基本的な事項を明らかにするなど、情報資産に関する適切な管理体制を整備します。
- (9) 「SOMPOホールディングスグループ 利益相反取引管理基本方針」に従い、お客さまの利益が不当に害されるおそれが典型的に認められる取引を管理するなど、お客さまの利益を不当に害する利益相反取引を防止する体制を整備します。
- (10) 「SOMPOホールディングスグループ 反社会的勢力対応基本方針」に従い、反社会的勢力からの不当要求の拒絶および関係遮断に向けて、外部の専門機関とも連携し、組織として毅然と対応するなど、反社会的勢力への対応体制を整備します。

3. 戦略的リスク経営に関する体制

当社は、「SOMPOホールディングスグループ ERM基本方針」に従い、不測の損失を極小化するとともに、資本を有効活用し、適切なリスクコントロールのもと収益を向上させ、当社およびグループ会社の企業価値の最大化を図ることを目的としたERM「戦略的リスク経営」を実践します。

- (1) 戦略的リスク経営の実効性を確保するため、リスクテイク計画およびリスク許容度を設定するなどの体制を整備します。また、当社およびグループ会社が抱える各種リスクの特性の概要およびグループ体制特有のリスクを的確に把握し、各種リスクを統合して適切に管理します。
- (2) グループ会社に、それぞれの業務内容、規模、特性に応じた戦略的リスク経営に関する体制を整備させるとともに、リスクの把握および評価を含む適切なリスク管理を実施させます。

4. 職務の執行が効率的かつ的確に行われることを確保するための体制

当社は、当社およびグループ会社の役職員の職務執行が、効率的かつ的確に行われる体制を確保するため、次のとおり、職務執行に関する権限、決裁事項および報告事項の整備、指揮命令系統の確立、ならびに経営資源の有効活用を行います。

- (1) SOMPOホールディングス株式会社が定めるグループの経営計画に基づき自社の経営計画を策定するとともに、これらを当社およびグループ会社で共有します。
- (2) 当社およびグループ会社の重要な業務執行に関する事項について経営会議で協議し、取締役会の審議の効率化および実効性の向上を図ります。
- (3) 当社およびグループ会社において、取締役会の決議事項および報告事項を整備することで取締役会の関与すべき事項を明らかにするとともに、これに整合するよう執行役員等の決裁権限を定めます。
- (4) 当社およびグループ会社において、規程を整備し、社内組織の目的および責任範囲を明らかにするとともに、組織単位ごとの職務分掌、執行責任者、職務権限の範囲等を定めます。
- (5) 「SOMPOホールディングスグループ IT戦略基本方針」に従い、IT戦略を策定し、ITガバナンスを整備するなど、信頼性・利便性・効率性の高い業務運営を実現するための的確かつ正確なシステムを構築します。
- (6) 「SOMPOホールディングスグループ 外部委託管理基本方針」に従い、外部委託開始から委託解除までのプロセスに応じて外部委託に関する管理を行うなど、当社およびグループ会社における外部委託に伴う業務の適正を確保します。
- (7) 「SOMPOホールディングスグループ 資産運用基本方針」に従い、当社およびグループ会社の運用資金の性格を勘案し安全性・流動性・収益性を踏まえるなど、リスク管理に十分に留意した資産運用を行います。
- (8) 「SOMPOホールディングスグループ 業務継続体制構築基本方針」に従い、大規模自然災害等の危機発生時における当社およびグループ会社の主要業務の継続および早期復旧の実現を図る体制を整備するなど、有事における経営基盤の安定と健全性の確保を図ります。
- (9) 課題別に専門的・技術的な観点から審議を行うために経営会議の諮問機関として課題別委員会を設置します。

5. 財務の健全性および財務報告の適正性を確保するための体制

- (1) 当社は、「SOMPOホールディングスグループ 財務の健全性・保険計理の管理基本方針」に従い、財務の健全性を確保するための管理体制を整備します。
- (2) 当社は、「SOMPOホールディングスグループ 財務報告に係る内部統制基本方針」に従い、当社グループの連結ベースでの財務報告の適正性および信頼性を確保するために、財務報告に係る内部統制の整備・運用および評価に関する枠組みを定め、必要な体制を整備します。

6. 情報開示の適切性を確保するための体制

当社は、「SOMPOホールディングスグループ ディスクロージャー基本方針」に従い、法令等に基づく開示の統括部署を設置し、企業活動に関する情報を適時・適切に開示するための体制を整備します。

7. 取締役および執行役員の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

当社は、当社およびグループ会社の取締役および執行役員の職務の執行に係る情報を適切に保存および管理するため、当社およびグループ会社において、取締役会等の重要会議の議事録および関連資料その他取締役および執行役員の職務執行に係る情報を保存および管理する方法を規程に定め、これに必要な体制を整備します。

8. 内部監査の実効性を確保するための体制

当社は、当社およびグループ会社の内部監査の実効性を確保するため、「SOMPOホールディングスグループ 内部監査基本方針」に従い、内部監査に関する独立性の確保、規程の制定、計画の策定等の事項を明確にし、効率的かつ実効性のある内部監査体制を整備します。

9. 監査役の監査に関する体制

当社は、監査役の監査の実効性の向上を図るため、以下の体制を整備します。

9-1. 監査役の職務を補助すべき使用人に関する事項

監査役室を設け、監査役の求めに応じ、必要な知識・経験を有する専属の者を監査役スタッフ（監査役の職務を補助すべき使用人）として配置します。また、「監査役スタッフに関する規程」を定め、次のとおり監査役スタッフの執行からの独立性および監査役の監査役スタッフに対する指示の実効性を確保します。

- (1) 監査役スタッフの選任・解任・処遇の決定、人事上の評価は常勤監査役の同意を求めるとします。
- (2) 監査役スタッフは、その職務に関して監査役の指揮命令のみに服し、取締役および執行役員等から指揮命令を受けないこととします。
- (3) 監査役スタッフは、監査役の命を受けた業務に関して必要な情報の収集権限を有することとします。

9-2. 監査役への報告に関する体制

- (1) 当社は、監査役会の同意のもと、役職員が監査役に報告すべき事項（職務の執行に関して法令・定款に違反する重大な事実もしくは不正行為の事実または会社に著しい損害を及ぼす可能性のある事実を含みます。）および時期を定めることとし、役職員は、この定めに基づく報告、その他監査役の要請する報告を確実にを行います。
- (2) 当社は、役職員が監査役に報告を行ったことを理由として、役職員に対して不利益な取扱いをしないこととします。なお、グループ会社の役職員についても同様とします。
- (3) 監査役が取締役または執行役員の職務の執行に関して意見を表明し、またはその改善を勧告したときは、当該取締役または執行役員は、指摘事項への対応の進捗状況を監査役に報告します。

9-3. その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- (1) 監査役は、取締役会に出席するほか、経営会議その他重要な会議に出席し、意見を述べるができるものとします。
- (2) 監査役が、取締役、執行役員、内部監査部門、会計監査人およびその他監査役の職務を適切に遂行するうえで必要な者との十分な意見交換を行う機会を確保します。また、役職員は監査役の求めに応じて、業務執行に関する事項の報告を行います。
- (3) 重要な会議の議事録その他の重要書類等（電磁的記録を含みます。）の閲覧について、監査役の求めに応じて対応します。
- (4) 監査役の求めに応じて、監査役とグループ会社の監査役との連携およびグループ会社の役職員からの情報収集の機会を確保します。
- (5) 内部監査部門は、監査役からの求めに応じて、監査役の監査に協力します。
- (6) 監査役が、その職務の執行について生ずる費用の請求をした場合は、監査役の求めに応じて適切に処理します。
- (7) 監査役が本社各部門および部店・課支社に立ち入って監査を行う場合、その他監査役が協力を求める場合（SOMPOホールディングス株式会社の監査役が協力を求める場合を含みます。）は、可能な限り他の業務に優先して監査役に協力します。

以 上

業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要については、次のとおりです。

(ア) 内部統制システム全般

- ・当社は、内部統制システムの整備・運用状況を点検し、改善を図るために、取締役会において定期的に議論をしています。取締役会は、内部統制の有効性を問われる可能性のあるグループ内外の事象に基づいてグループの内部統制システムの機能発揮状況を点検するとともに、内部統制システムの充実・強化に向けた取組みの状況を管理し、必要に応じてその改善を指示する活動を行っています。

(イ) グループ会社管理体制

- ・当社は、事業オーナー制を踏まえた承認・報告制度に基づき、グループ会社の経営計画等の重要事項を承認するとともに、計画の進捗状況やリスク事象の発生等の報告をグループ各社から受け、適宜対策を講じるなど、グループ全体の企業価値の向上を図るべく、グループ会社の経営管理を行っています。
- ・当社は、グループの各種基本方針に基づくグループ各社の体制整備状況・運用状況を確認し、必要に応じてグループ各社を指導するなど、グループ会社の業務の適正の確保に努めています。

(ウ) コンプライアンス体制

- ・当社およびグループ各社は、SOMPOホールディングス株式会社の作成する年度のグループのコンプライアンス推進方針に基づいて、コンプライアンス・プログラムを策定し、計画的にコンプライアンスの推進に取り組んでいます。
- ・当社およびグループ各社は、内部通報・内部監査等の制度を整備して法令違反その他の不適切事象の早期発見に取り組んでいます。
- ・内部通報においては、グループ全体の内部通報窓口として「コンプライアンスホットライン」を第三者機関に設けており、内部通報窓口とともに内部通報者の不利益取扱いの禁止を含む内部通報制度の利用ルールを周知し、その実効性の向上を図っています。
- ・当社およびグループ各社は、不適切事象を把握したときは、当該事象が発生した会社において適切に対応するとともに、当社は必要に応じて支援・指導を行っています。
- ・当社は、「内部管理委員会」を定期的に開催し、コンプライアンス課題への対応状況等、コンプライアンスの推進状況について審議を行い、その取組みの妥当性の検証を行っています。

(エ) 戦略的リスク経営（ERM）に関する体制

- ・当社は、SOMPOホールディングス株式会社が定めるグループ経営戦略やグループERM基本方針を踏まえて、「リスク管理規程」を整備するなど、戦略的リスク経営に関する体制を整備しています。
- ・当社は、「グループリスク選好」を踏まえて事業計画を策定するとともに、SOMPOホールディングス株式会社から配賦された資本をリスク許容度として事業運営を行い、事業計画における利益目標の達成を目指しています。また、経営環境の変化や計画の進捗状況等を定期的に確認し、必要に応じて事業計画の見直しを行うPDCAサイクルに基づいて戦略的リスク経営を実践しています。
- ・当社は、リスクアセスメントを起点として、あらゆる源泉から生じる重大なリスクを特定し、分析、評価、コントロールするリスクコントロールのプロセスを構築し、運営しています。特に重大なリスクについては、リスクオーナー（役員クラス）を定め、対応策の実施、進捗状況に対する責任を明確にし、その実効性の向上を図っています。
- ・当社は、リスク管理に関する重要な事項の審議を目的として「ERM委員会」を設置しており、リスクの状況を把握したうえで、適切な意思決定を行っています。

(オ) 取締役職務執行体制

- ・当社は、SOMPOホールディングス株式会社が定めるグループの中期経営計画および年度計画を当社およびグループ会社で共有し、当社およびグループ各社においてグループベースの計画と整合する中期経営計画および年度計画を策定することを通して、グループとしての一体性を確保しています。
- ・中期経営計画や、M&A方針の決定等、グループの経営に重大な影響を与える事項については、課題別委員会、経営会議で十分に協議し、取締役会での審議の効率性・実効性の向上を図っています。

(カ) 監査役の監査体制

- ・当社は、監査役監査の実効性を確保するため、取締役等の指揮命令から独立した監査役室を設置し、専任スタッフを配置しています。
- ・当社は、監査役への報告に関する規程を策定し、役職員から職務の執行状況等に関して定期的に報告を行っているほか、監査役から要請を受けた事項について、随時速やかに報告を行っています。
- ・当社は、監査役が経営会議その他自らが必要と認めた重要会議に出席して意見陳述を行う機会を確保しています。
- ・当社は、監査役が会計監査人および内部監査部門と監査結果等の情報交換を行う機会を確保しており、監査役は実効的かつ効率的に監査を実施しています。
- ・当社は、監査役と代表取締役との定期的な会合を設けており、両者は、グループの課題認識等について意見交換を実施しています。

d) リスク管理体制の整備状況

当社は、「SOMPOホールディングスグループ ERM基本方針」に基づき、戦略的リスク経営の枠組みや体制などを整備するとともに、必要な組織体制、業務遂行に関する重要な事項について、「リスク管理規程」等で定めております。

取締役会は、「リスク管理規程」を制定するほか、「グループ リスク選好」と統合的な事業計画およびリスクテイク計画を策定しております。

社長は、経営会議の協議を経て、リスク許容度に関する対応方針・対応策を決定しております。また、経営会議の諮問機関として、ERM委員会を設置しております。

ERM委員会では、リスク管理に関する重要な事項の審議を目的とし、経営陣が当社およびグループ会社のリスク状況を把握したうえで、適切な意思決定を行っております。

当社は、リスク管理態勢を整備・推進する役割を担います。さらに、各リスク管理部門は、経営に重大な影響を及ぼし得る保険引受リスク、資産運用リスク、オペレーショナル・リスクおよび流動性リスクについて、リスクを定性・定量の両面から評価し、適切にコントロールしております。

e) 役員報酬等の内容

当事業年度における当社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額および対象となる役員の員数は以下のとおりであります。

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬		業績連動型 株式報酬	
		月例報酬	業績連動報酬		
取締役 (社外取締役を除く。)	788	670		117	15
		452	218		
監査役 (社外監査役を除く。)	59	59		—	3
		59	—		
社外役員	63	63		—	7
		63	—		

- (注) 1 業績連動報酬は前事業年度の業績に基づく報酬であります。
 2 業績連動型株式報酬は当事業年度分として計上した株式給付引当金の繰入額であります。
 3 取締役の報酬等の総額には、執行役員兼務取締役の執行役員としての報酬588百万円（種類別内訳：月例報酬：338百万円、業績連動報酬163百万円、業績連動型株式報酬：86百万円）を含んでおります。なお、執行役員報酬の支給員数は14名であります。

f) 責任限定契約の締結

当社は、社外取締役および社外監査役との間で、会社法第427条第1項の規定に基づき、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約（責任限定契約）を締結しております。当該契約に基づく責任の限度額は、会社法425条第1項に規定する最低責任限度額としております。

② 監査役監査および内部監査に関する事項

a) 組織、人員および手続

(監査役監査)

当社の監査役会は、その役割・責務を十分に果たすため、5名（定款で定める員数：6名以内）の監査役で構成されており、うち3名の社外監査役によって経営陣からの独立性を強化しております。また、本独立性と常勤監査役による情報収集力を有機的に組み合わせ、さらには、構成員の多様性を確保することで監査の実効性を高めております。

(内部監査)

当社は、「SOMPOホールディングスグループ 内部監査基本方針」に基づき内部監査態勢を整備しており、内部監査部門として、内部監査部に監査要員を86名配置しております。毎年度「損保ジャパン日本興亜グループ 内部監査方針」および同方針に基づく内部監査計画を策定し、取締役会の承認を得るとともに、SOMPOホールディングス株式会社に報告しております。

この内部監査計画に基づき、当社各部署等の実地監査やモニタリングを実施し、結果を取締役会およびSOMPOホールディングス株式会社に報告しております。

b) 監査役監査、内部監査および会計監査の相互連携ならびにこれらの監査と内部統制部門との関係

(監査役と内部監査部門との連携状況)

監査役は、監査計画の策定や監査の実施にあたり、内部監査部門との緊密な連携を保ち、原則、月1回、意見・情報交換を行うことで効率的な監査を実施するよう努めております。また、内部監査部門による監査結果はすべて監査役および監査役会に報告され、必要に応じて調査を求めるなど、監査役監査に実効的に活用しております。

(監査役と会計監査人との連携状況)

監査役および監査役会は、定期的に会計監査人と会合を持ち、リスク認識や監査計画を含む監査内容の理解を相互に深め、監査の実施状況について説明を受けて意見交換を行っております。また、会計監査人の監査品質を確保するため、十分な監査時間が確保できることを確認したうえで会計監査人の監査報酬額の決定に同意を与えております。さらに、内部監査部門を交えた三様監査会議を定期的に開催し、監査計画や監査結果等について三者で意見・情報交換することで、会計監査人の監査環境の整備にも配慮しております。

なお、監査役会は、会計監査人を適切に評価するための基準を策定し、会計監査人に求められる独立性と専門性を含む品質管理体制と、当社におけるコーポレート・ガバナンスの担い手としての機能発揮状況を評価しております。

(内部監査部門と会計監査人との連携状況)

内部監査部門は、会計監査人と緊密な連携を保ち定期的に意見交換を行っております。

(監査役、内部監査部門および会計監査人と内部統制部門との関係)

監査役、内部監査部門および会計監査人は、各々の監査手続等において、経営管理部門、経理部門等の内部統制部門と適宜意見・情報交換を行っております。内部統制部門は、意見・情報交換の結果や監査結果を踏まえ、内部統制の強化に取り組んでおります。

③ 社外取締役および社外監査役との人的関係、資金的関係または取引関係その他の利害関係

社外取締役および社外監査役の兼職先には当社および当社子会社の取引先が含まれておりますが、当社の親会社であるSOMPOホールディングス株式会社が定める社外役員に関する独立性の基準を準用し、社外取締役および社外監査役本人あるいはその出身会社と当社あるいは当社子会社との間に重要な利害関係はないと判断しております。

④ 会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士、所属する監査法人名は以下のとおりであります。また、会計監査業務に係る補助者は、公認会計士13名、その他35名であります。なお、業務を執行した公認会計士の継続監査年数は、いずれも7年以下であります。

公認会計士の氏名		所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員	小澤 裕治	新日本有限責任監査法人
指定有限責任社員 業務執行社員	鴨下 裕嗣	新日本有限責任監査法人
指定有限責任社員 業務執行社員	窪寺 信	新日本有限責任監査法人

⑤ 取締役の定数および選任の決議要件

当社の取締役は20名以内とする旨を定款に定めております。取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は累積投票によらない旨を定款に定めております。

⑥ 株主総会決議事項を取締役会で決議することができることとした事項

a) 剰余金の配当等の決定機関

当社は、親会社であるSOMPOホールディングス株式会社の資本政策に従って、機動的な配当等を行うため、会社法第459条第1項に定める事項については、法令に特段の定めがある場合を除き、取締役会決議によって定めることができる旨を定款に定めております。

b) 取締役および監査役の責任免除

当社は、経営において取締役および監査役がその役割を十分に発揮するための仕組みを一層強化するため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）および監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の定める限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款に定めております。

⑦ 株主総会の特別決議要件の変更

当社は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う旨を定款に定めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬
提出会社	204	7	212	10
連結子会社	39	0	39	0
計	243	7	252	10

② 【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度

当社および当社の連結子会社は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているErnst & Youngに対して、監査証明業務および非監査業務に基づく報酬として599百万円を支払っております。

当連結会計年度

当社および当社の連結子会社は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているErnst & Youngに対して、監査証明業務および非監査業務に基づく報酬として1,134百万円を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、IFRSへの移行に係る助言業務などです。

当連結会計年度

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、IFRSへの移行に係る助言業務などです。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はありませんが、当社の規模・特性・監査日数等を勘案し、監査役会の同意を得たうえで決定しております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表および財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）ならびに同規則第46条および第68条の規定に基づき「保険業法施行規則」（平成8年大蔵省令第5号）に準拠して作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）第2条の規定に基づき、同規則および「保険業法施行規則」（平成8年大蔵省令第5号）に準拠して作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）の連結財務諸表および事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）の財務諸表について、新日本有限責任監査法人による監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するために、会計基準等の内容を適切に把握することまたは会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制の整備を目的として、公益財団法人財務会計基準機構に加入し、同法人の行うセミナー等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
資産の部		
現金及び預貯金	※5 716,628	※5 764,615
買現先勘定	54,999	74,998
買入金銭債権	※5 11,718	6,727
金銭の信託	104,422	98,743
有価証券	※3, ※5, ※6 5,861,575	※3, ※5, ※6 5,671,237
貸付金	※4, ※8 628,048	※4, ※8 661,400
有形固定資産	※1, ※2, ※5 304,503	※1, ※2, ※5 259,656
土地	143,904	103,929
建物	124,696	115,277
リース資産	3,287	2,764
建設仮勘定	2,771	6,926
その他の有形固定資産	29,843	30,758
無形固定資産	415,758	353,562
ソフトウェア	11,343	18,760
のれん	226,544	176,552
その他の無形固定資産	177,870	158,250
その他資産	1,034,187	1,057,804
退職給付に係る資産	190	218
繰延税金資産	7,331	6,337
貸倒引当金	△6,411	△6,111
資産の部合計	9,132,953	8,949,190
負債の部		
保険契約準備金	5,917,793	5,672,320
支払備金	1,633,406	1,521,845
責任準備金等	4,284,386	4,150,474
社債	424,991	512,045
その他負債	※5 941,907	※5 898,262
退職給付に係る負債	129,612	97,585
役員退職慰労引当金	23	28
賞与引当金	31,786	28,225
役員賞与引当金	171	129
特別法上の準備金	68,788	79,257
価格変動準備金	68,788	79,257
繰延税金負債	68,472	70,950
負債の部合計	7,583,548	7,358,805

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	70,000	70,000
資本剰余金	42,939	42,932
利益剰余金	460,048	497,462
株主資本合計	572,987	610,394
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	912,550	972,649
繰延ヘッジ損益	8,003	7,050
為替換算調整勘定	20,602	△24,378
退職給付に係る調整累計額	△29,722	△2,983
その他の包括利益累計額合計	911,433	952,338
非支配株主持分	64,984	27,652
純資産の部合計	1,549,405	1,590,385
負債及び純資産の部合計	9,132,953	8,949,190

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年 4月 1日 至 2017年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)
経常収益	2,982,076	3,332,883
保険引受収益	2,773,083	3,101,384
正味収入保険料	2,550,336	2,854,755
収入積立保険料	131,617	120,380
積立保険料等運用益	41,823	39,333
生命保険料	6,549	4,999
責任準備金等戻入額	41,405	76,441
その他保険引受収益	1,350	5,473
資産運用収益	192,807	214,406
利息及び配当金収入	132,724	147,553
金銭の信託運用益	2,516	5,476
売買目的有価証券運用益	5,574	11,461
有価証券売却益	84,863	87,981
有価証券償還益	45	1,025
その他運用収益	8,907	241
積立保険料等運用益振替	△41,823	△39,333
その他経常収益	16,184	17,092
持分法による投資利益	398	592
その他の経常収益	15,786	16,499
経常費用	2,739,837	3,193,794
保険引受費用	2,271,673	2,630,286
正味支払保険金	1,427,726	1,698,210
損害調査費	※1 136,735	※1 138,554
諸手数料及び集金費	※1 443,178	※1 481,060
満期返戻金	226,431	231,367
契約者配当金	87	186
生命保険金等	3,896	2,884
支払備金繰入額	27,403	74,515
その他保険引受費用	6,213	3,505
資産運用費用	36,908	23,682
金銭の信託運用損	198	168
有価証券売却損	13,162	6,563
有価証券評価損	1,700	3,010
有価証券償還損	315	97
金融派生商品費用	16,893	9,881
その他運用費用	4,637	3,961
営業費及び一般管理費	※1 417,494	※1 522,602
その他経常費用	13,761	17,223
支払利息	6,510	11,532
貸倒引当金繰入額	107	—
貸倒損失	116	60
その他の経常費用	7,027	5,629
経常利益	242,238	139,088

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
特別利益	9,311	30,641
固定資産処分益	9,311	4,714
その他特別利益	—	※3 25,927
特別損失	17,706	57,043
固定資産処分損	6,955	35,442
減損損失	209	※2 11,132
特別法上の準備金繰入額	10,542	10,469
価格変動準備金繰入額	10,542	10,469
税金等調整前当期純利益	233,843	112,686
法人税及び住民税等	50,999	6,394
法人税等調整額	11,638	△31,070
法人税等合計	62,638	△24,675
当期純利益	171,204	137,362
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失 (△)	414	△3,188
親会社株主に帰属する当期純利益	170,790	140,550

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
当期純利益	171,204	137,362
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	54,003	60,325
繰延ヘッジ損益	△2,507	△952
為替換算調整勘定	30,176	△43,504
退職給付に係る調整額	△4,877	26,725
持分法適用会社に対する持分相当額	30	△81
その他の包括利益合計	※1 76,826	※1 42,512
包括利益	248,030	179,874
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	248,020	182,501
非支配株主に係る包括利益	10	△2,626

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	70,000	66,826	351,357	488,184
当期変動額				
剰余金の配当		△23,878	△62,100	△85,978
親会社株主に帰属する 当期純利益			170,790	170,790
非支配株主との取引に 係る親会社の持分変動		△9		△9
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)				
当期変動額合計	—	△23,887	108,690	84,803
当期末残高	70,000	42,939	460,048	572,987

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算 調整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	858,563	10,510	△10,026	△24,844	834,203	6,056	1,328,444
当期変動額							
剰余金の配当							△85,978
親会社株主に帰属する 当期純利益							170,790
非支配株主との取引に 係る親会社の持分変動							△9
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	53,987	△2,507	30,629	△4,878	77,230	58,927	136,158
当期変動額合計	53,987	△2,507	30,629	△4,878	77,230	58,927	220,961
当期末残高	912,550	8,003	20,602	△29,722	911,433	64,984	1,549,405

当連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	70,000	42,939	460,048	572,987
当期変動額				
剰余金の配当			△106,400	△106,400
親会社株主に帰属する 当期純利益			140,550	140,550
連結範囲の変動			2,332	2,332
非支配株主との取引に 係る親会社の持分変動		△7		△7
その他			931	931
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)				
当期変動額合計	－	△7	37,414	37,406
当期末残高	70,000	42,932	497,462	610,394

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算 調整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	912,550	8,003	20,602	△29,722	911,433	64,984	1,549,405
当期変動額							
剰余金の配当							△106,400
親会社株主に帰属する 当期純利益							140,550
連結範囲の変動							2,332
非支配株主との取引に 係る親会社の持分変動							△7
その他							931
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	60,099	△952	△44,981	26,738	40,904	△37,331	3,572
当期変動額合計	60,099	△952	△44,981	26,738	40,904	△37,331	40,979
当期末残高	972,649	7,050	△24,378	△2,983	952,338	27,652	1,590,385

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年 4月 1日 至 2017年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	233,843	112,686
減価償却費	19,711	67,611
減損損失	209	11,132
のれん償却額	3,491	20,314
支払備金の増減額 (△は減少)	17,602	90,727
責任準備金等の増減額 (△は減少)	△41,910	△75,537
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	92	△260
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	2,844	4,787
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△32	4
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△153	△1,586
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	83	△42
価格変動準備金の増減額 (△は減少)	10,542	10,469
利息及び配当金収入	△132,724	△147,553
有価証券関係損益 (△は益)	△69,729	△79,321
支払利息	6,510	11,532
為替差損益 (△は益)	△8,611	△1,331
有形固定資産関係損益 (△は益)	△7,474	28,445
持分法による投資損益 (△は益)	△398	△592
その他資産 (除く投資活動関連、財務活動関連)の増減額 (△は増加)	△19,730	△63,842
その他負債 (除く投資活動関連、財務活動関連)の増減額 (△は減少)	15,887	8,045
その他	30,741	△19,565
小計	60,796	△23,875
利息及び配当金の受取額	132,400	147,743
利息の支払額	△5,104	△10,890
法人税等の支払額	△10,215	△70,091
営業活動によるキャッシュ・フロー	177,875	42,885

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
預貯金の純増減額 (△は増加)	△35,381	△22,596
買入金銭債権の取得による支出	—	△415
買入金銭債権の売却・償還による収入	3,410	5,173
金銭の信託の増加による支出	△16,737	△96
金銭の信託の減少による収入	33,185	8,531
有価証券の取得による支出	△984,093	△1,199,653
有価証券の売却・償還による収入	1,205,315	1,363,882
貸付けによる支出	△230,186	△221,783
貸付金の回収による収入	276,097	178,648
その他	41,957	△3,360
資産運用活動計	293,568	108,329
営業活動及び資産運用活動計	471,444	151,215
有形固定資産の取得による支出	△14,483	△22,628
有形固定資産の売却による収入	11,945	24,276
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	△549,226	—
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	—	※2 67,991
その他	△28,970	△49,837
投資活動によるキャッシュ・フロー	△287,167	128,131
財務活動によるキャッシュ・フロー		
借入れによる収入	50	152,150
借入金の返済による支出	△4,804	△15,330
社債の発行による収入	200,000	100,000
社債の償還による支出	—	△11,300
債券貸借取引受入担保金の純増減額 (△は減少)	250,063	△154,345
配当金の支払額	△149,500	△90,901
非支配株主への配当金の支払額	△1	△7,205
非支配株主への払戻による支出	—	△25,990
その他	△3,758	△2,397
財務活動によるキャッシュ・フロー	292,047	△55,320
現金及び現金同等物に係る換算差額	△5,689	3,363
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	177,066	119,060
現金及び現金同等物の期首残高	499,118	676,184
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	—	6,224
現金及び現金同等物の期末残高	※1 676,184	※1 801,469

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社数 60社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

Sompo America Holdings Inc. は、2017年12月31日付でEndurance U.S. Holdings Corp. と合併し消滅しております。

Endurance Specialty Holdings Ltd. は、2017年11月7日付で清算したため、当連結会計年度から連結の範囲より除外しております。

Sompo International Holdings (Europe) LimitedおよびSI Insurance (Europe), SAは、新たに子会社となったため、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

Sompo Canopus AG (2018年1月4日付でCanopus AGに社名変更) およびその傘下会社は、株式の譲渡により子会社でなくなったため、当連結会計年度から連結の範囲より除外しております。なお、連結損益計算書及び連結包括利益計算書には、当連結会計年度末までの損益が含まれております。

PT Sompo Insurance Indonesiaは、重要性が増したため、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

なお、Sompo Insurance China Co., Ltd. は、Sompo Japan Nipponkoa Insurance (China) Co., Ltd. が2017年7月1日付で、社名変更したものであります。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な会社名

- ・ Sompo Insurance (Thailand) Public Company Limited
- ・ Sompo Japan Nipponkoa Reinsurance Company Limited

非連結子会社は、総資産、経常収益、当期純損益（持分に見合う額）および利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、いずれも企業集団の財政状態および経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 4社

主要な会社名

- ・ 日立キャピタル損害保険株式会社
- ・ Universal Sompo General Insurance Company Limited

(2) 持分法を適用していない非連結子会社および関連会社 (Sompo Insurance (Thailand) Public Company Limited、Sompo Japan Nipponkoa Reinsurance Company Limited他) は、当期純損益（持分に見合う額）および利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

(3) 当社は、日本地震再保険株式会社の議決権の26.6%を所有しておりますが、同社事業の公共性を踏まえ、同社の財務および営業または事業の方針の決定に対して重要な影響を与えることができないと判断されることから、関連会社から除いております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

在外連結子会社の決算日はいずれも12月31日ではありますが、決算日の差異が3か月を超えていないため、本連結財務諸表の作成にあたっては、連結子会社の決算日現在の財務諸表を使用しております。

なお、連結決算日との差異期間における重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計方針に関する事項

(1) 有価証券の評価基準および評価方法

- ① 売買目的有価証券の評価は、時価法によっております。
なお、売却原価の算定は移動平均法によっております。
- ② 満期保有目的の債券の評価は、移動平均法に基づく償却原価法によっております。
- ③ 持分法を適用していない非連結子会社株式および関連会社株式の評価は、移動平均法に基づく原価法によっております。
- ④ その他有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）の評価は、期末日の市場価格等に基づく時価法によっております。
なお、評価差額は全部純資産直入法により処理し、また、売却原価の算定は移動平均法によっております。
- ⑤ その他有価証券のうち時価を把握することが極めて困難と認められるものの評価は、移動平均法に基づく原価法によっております。
- ⑥ 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法によっております。
- ⑦ 運用目的および満期保有目的のいずれにも該当しない有価証券の保有を目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、その他有価証券と同じ方法によっております。

(2) デリバティブ取引の評価基準および評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法によっております。

(3) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却は、定額法によっております。

（会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更）

当社および国内連結子会社は、有形固定資産の減価償却方法について、従来、定率法（ただし、1998年4月1日以降に取得した建物ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備および構築物については定額法）を採用しておりましたが、当連結会計年度より定額法に変更しております。

当社および国内連結子会社の属するSOMPOホールディングスグループにおける近年の海外保険事業の拡大により定額法を採用する会社の割合が高まったことに加えて、国内損害保険事業では、合併に伴う拠点統廃合・システム統合の完了などにより、今後、有形固定資産が耐用年数にわたり安定的に使用されることが見込まれます。これらを契機として、SOMPOホールディングスグループの減価償却方法の統一の検討を行ったところ、当社および国内連結子会社においても、定額法により均等に費用配分することが実態をより適正に表す合理的な方法であると判断いたしました。これにより定額法を採用している在外連結子会社との会計処理が統一され、より有用な財務情報を提供できることとなります。

この変更により、従来の方々と比べて、当連結会計年度の経常利益および税金等調整前当期純利益はそれぞれ2,869百万円増加しております。

② 無形固定資産（リース資産を除く）

無形固定資産（リース資産を除く）の減価償却は、定額法によっております。

海外子会社の買収により取得した無形固定資産については、その効果が及ぶと見積られる期間にわたり、効果の発現する態様にしたがって償却しております。

自社利用ソフトウェアの減価償却は、利用可能期間に基づく定額法によっております。

(4) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

当社および国内保険連結子会社は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準および償却・引当基準に基づき、次のとおり計上しております。

破産、特別清算、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者に対する債権および実質的に経営破綻に陥っている債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額等を控除し、その残額を引き当てております。

今後、経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断して必要と認められる額を引き当てております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率等を債権額に乗じた額を引き当てております。

また、すべての債権は資産の自己査定基準に基づき、各所管部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署等が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

その他の連結子会社は、主に個別の債権について回収可能性を検討し、貸倒見積額を計上しております。

② 役員退職慰労引当金

国内連結子会社は、役員退職慰労金（年金を含む）の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

③ 賞与引当金

従業員賞与に充てるため、期末における支給見込額を基準に計上しております。

④ 役員賞与引当金

役員賞与に充てるため、期末における支給見込額を基準に計上しております。

⑤ 価格変動準備金

当社および国内保険連結子会社は、株式等の価格変動による損失に備えるため、保険業法第115条の規定に基づき計上しております。

(5) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、主として給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異および過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、主として、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10～11年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

また、過去勤務費用は、主として、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により費用処理しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

金利変動に伴う貸付金および債券のキャッシュ・フロー変動リスクをヘッジする目的で実施する金利スワップ取引で、特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を適用しております。

「保険業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第26号）に基づく長期の保険契約等に係る金利変動リスクをヘッジする目的で実施する金利スワップ取引については、繰延ヘッジを適用しております。ヘッジ対象となる保険負債とヘッジ手段である金利スワップ取引を一定の残存期間ごとにグルーピングのうえヘッジ指定を行っており、ヘッジに高い有効性があるため、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

また、保有する株式に係る将来の株価変動リスクをヘッジする目的で行う株式スワップ取引については時価ヘッジを適用しております。

また、為替変動に伴う外貨建資産等の為替変動リスクをヘッジする目的で実施する為替予約取引、通貨オプション取引および通貨スワップ取引については原則として時価ヘッジを、振当処理の要件を満たしている場合には振当処理を適用しております。外貨建予定取引の円貨建キャッシュ・フローを固定する目的で実施している為替予約取引の一部については、繰延ヘッジを適用しております。当社が発行する外貨建社債および外貨建借入金に係る為替変動リスクをヘッジする目的で実施する通貨スワップ取引については振当処理を適用しております。

なお、ヘッジ有効性については、原則としてヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計とを定期的に比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。

ただし、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件が同一でありヘッジに高い有効性があることが明らかなの、金利スワップの特例処理の適用要件を満たすものおよび振当処理の適用要件を満たすものについては、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

(7) のれんの償却方法および償却期間

のれんについては、発生年度以後10～20年間で均等償却しております。

ただし、少額のものについては一括償却しております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から満期日または償還日までの期間が3か月以内の定期預金等の短期投資からなっております。

(9) 消費税等の会計処理

当社および国内連結子会社の消費税等の会計処理は、主として税抜方式によっております。

ただし、当社および国内保険連結子会社の損害調査費、営業費及び一般管理費等の費用は税込方式によっております。

なお、資産に係る控除対象外消費税等はその他資産に計上し、5年間で均等償却しております。

(表示方法の変更)

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めておりました「借入れによる収入」および「借入金の返済による支出」は、重要性が増したため、当連結会計年度から独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた△8,513百万円は、「借入れによる収入」50百万円、「借入金の返済による支出」△4,804百万円、「その他」△3,758百万円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の減価償却累計額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
395,145	356,176

※2 有形固定資産の圧縮記帳額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
18,835	16,882

※3 非連結子会社および関連会社の株式等は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
有価証券(株式)	22,302	19,622
有価証券(出資金)	2,444	2,688

※4 貸付金のうち破綻先債権等の金額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
破綻先債権額	48	—
延滞債権額	419	285
3カ月以上延滞債権額	13	18
貸付条件緩和債権額	—	—
合計	480	303

(注) 破綻先債権とは、元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本または利息の取立てまたは弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸付金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸付金」という。)のうち、「法人税法施行令」(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまで(貸倒引当金勘定への繰入限度額)に掲げる事由または同項第4号に規定する事由が生じている貸付金であります。

延滞債権とは、未収利息不計上貸付金であって、破綻先債権および債務者の経営再建または支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸付金以外の貸付金であります。

3カ月以上延滞債権とは、元本または利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸付金で破綻先債権および延滞債権に該当しないものであります。

貸付条件緩和債権とは、債務者の経営再建または支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、破綻先債権、延滞債権および3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

※5 担保に供している資産および担保付債務は次のとおりであります。

担保に供している資産

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
預貯金	77,562	42,363
買入金銭債権	1,723	-
有価証券	733,801	505,820
有形固定資産	2,601	2,544
合計	815,689	550,728

(注) 上記は、借入等の担保のほか、海外営業のための供託資産として差し入れている有価証券等であります。

担保付債務

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
その他負債（債券貸借取引受入担保金）	250,063	95,718
その他負債（借入金）	444	396
合計	250,508	96,114

なお、上記有価証券には、現金担保付有価証券貸借取引により差し入れた有価証券が含まれており、その金額は次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
	237,232	88,152

※6 有価証券のうち消費貸借契約により貸し付けているものの金額は次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
	303,227	186,174

7 デリバティブ取引に係る担保として受け入れている有価証券のうち、売却または再担保という方法で自由に処分できる権利を有するものは次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
処分せずに自己保有している有価証券	22,320	-

※8 貸出コミットメント契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
	11,555	11,863

9 連結会社以外の会社の保険引受に関する債務に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
Canopus Reinsurance AG	-	25,102

(連結損益計算書関係)

※1 事業費の主な内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
	代理店手数料等 給与	445,519 199,610

(注) 事業費は連結損益計算書における損害調査費、営業費及び一般管理費ならびに諸手数料及び集金費の合計であります。

※2 減損損失の内訳は次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

用途	種類	場所等	減損損失			
			土地	建物	のれん	合計
賃貸不動産等	土地および建物	京都府に保有する 土地および建物	1,395	64	—	1,459
遊休不動産等	土地および建物	愛知県に保有する 土地および建物等 3物件	965	313	—	1,279
—	のれん	—	—	—	8,393	8,393
合計			2,360	378	8,393	11,132

当社および国内保険連結子会社は、保険事業等の用に供している不動産等については保険事業等全体で1つの資産グループとし、賃貸不動産等、遊休不動産等および処分予定不動産等については個別の物件ごとにグルーピングしており、のれんについては連結子会社単位にグルーピングをしております。その他の連結子会社は、事業の用に供している不動産等について、各社ごとに1つの資産グループとしております。

賃貸不動産等、遊休不動産等については、地価の下落等により、収益性が著しく低下した物件の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。のれんについては、Canopus AGの全株式を譲渡する株式譲渡契約締結に伴い、のれんの未償却残高を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、賃貸不動産等、遊休不動産等の回収可能価額は正味売却価額により測定しており、不動産鑑定士による鑑定評価額等により算定しております。のれんの回収可能価額は正味売却価額により測定しており、売却予定価額に基づき算定しております。

※3 その他特別利益は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
	子会社清算益	—

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額および税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	155,490	174,918
組替調整額	△84,437	△90,569
税効果調整前	71,052	84,349
税効果額	△17,048	△24,023
その他有価証券評価差額金	54,003	60,325
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	14,186	1,999
組替調整額	△4,213	1,560
資産の取得原価調整額	△13,463	△4,887
税効果調整前	△3,490	△1,327
税効果額	982	375
繰延ヘッジ損益	△2,507	△952
為替換算調整勘定		
当期発生額	30,176	△10,927
組替調整額	—	△32,577
為替換算調整勘定	30,176	△43,504
退職給付に係る調整額		
当期発生額	△9,518	32,854
組替調整額	2,750	4,214
税効果調整前	△6,768	37,069
税効果額	1,891	△10,344
退職給付に係る調整額	△4,877	26,725
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	123	△24
組替調整額	△92	△56
持分法適用会社に対する持分相当額	30	△81
その他の包括利益合計	76,826	42,512

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

1 発行済株式の種類および総数ならびに自己株式の種類および株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式 普通株式	984,055	—	—	984,055
合計	984,055	—	—	984,055

(注) 自己株式については、該当事項はありません。

2 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年3月28日 取締役会	普通株式	85,901	87.29	—	2017年3月31日

(決議)	株式の種類	配当財産の種類 および帳簿価額(百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日	
2016年3月4日 取締役会	普通株式	損保ジャパン日本興亜 リスクマネジメント株 式会社 普通株式	76	0.07	—	2016年4月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの
該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 発行済株式の種類および総数ならびに自己株式の種類および株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式 普通株式	984,055	—	—	984,055
合計	984,055	—	—	984,055

(注) 自己株式については、該当事項はありません。

2 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年11月2日 取締役会	普通株式	5,000	5.08	—	2017年11月2日
2018年3月27日 取締役会	普通株式	101,400	103.04	—	2018年3月31日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの
該当事項はありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
現金及び預貯金	716,628	764,615
買現先勘定	54,999	74,998
有価証券	5,861,575	5,671,237
預入期間が3か月を超える預貯金	△117,215	△114,019
現金同等物以外の有価証券	△5,839,802	△5,595,362
現金及び現金同等物	676,184	801,469

※2 株式の売却により連結子会社でなくなった会社の資産および負債の主な内訳

当連結会計年度にCanopus AGが連結子会社でなくなったことに伴う売却時の資産および負債の主な内訳ならびに同社株式の売却価額と売却による収入（純額）との関係は次のとおりであります。

(単位：百万円)

資産	348,418
（うち有価証券）	(213,492)
のれん	20,412
負債	△283,116
（うち保険契約準備金）	(△234,835)
為替換算調整勘定	△1,666
有価証券売却損	△1,332
上記子会社株式の売却価額	82,715
上記子会社の現金及び現金同等物	△14,724
差引：上記子会社売却による収入	67,991

3 重要な非資金取引の内容

該当事項はありません。

4 投資活動によるキャッシュ・フローには、保険事業に係る資産運用業務から生じるキャッシュ・フローを含んでおります。

(リース取引関係)

オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(借主側)

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
1年内	3,913	5,350
1年超	11,654	24,048
合計	15,568	29,398

(貸主側)

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
1年内	515	530
1年超	1,744	1,301
合計	2,260	1,831

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は「純資産価値の拡大を図るために、適切なリスク管理を講じながら、資産運用を行う」ことを基本方針として、保険会社の運用資金の性格をふまえ、安全性・流動性・収益性を総合的に検討しながら、リスク管理に十分留意した資産運用を行っております。株式・債券等への投資や融資などの伝統的な手法に加え、オルタナティブ投資など、国内外でリスクの分散と運用手法の多様化を図りつつ、中長期的な収益確保を目指しております。また、積立保険のような長期の保険負債にかかわる資産運用を適切に行うため、ALM（資産・負債の総合管理）に基づく運用手法により、将来の満期返戻金などの支払いに向けた安定的な収益確保を図っております。連結子会社では、運用する資産の規模・性格をふまえた上で、中長期的な収益獲得を目指す一方、資産の健全性を損なうことのないよう十分留意した上で、適切に資産運用を行っております。なお、当社は、財務基盤を更に強固なものとする観点から、主要格付機関から一定の資本性が認められる劣後債（ハイブリッド・ファイナンス）の発行により、実質的な自己資本の増強を図っております。

(2) 金融商品の内容およびそのリスク

当社は、主に保険取引先企業との中長期的な友好関係の維持の観点などから、株式を多く保有しておりますが、株式は一般的に価格の変動性が高く、今後の株価の下落によっては、売却損・評価損計上による利益減少や、評価差額金の減少により純資産が減少するなど、価格変動リスクにさらされております。

資産運用リスクの分散を図るため、海外の債券や株式等への投資を行っており、各々の現地通貨における資産価値の変動リスクに加えて、為替レートの変動によっては、これらの資産の価値および投資収益に重要な影響を及ぼす可能性があり、為替変動リスクにさらされております。

債券、貸付金等の固定金利資産を保有していることから、金利が上昇した場合には資産価値が減少する可能性があり、金利変動リスクにさらされております。

債券、株式等の有価証券を保有していることから、市場の混乱等により市場において取引ができなかったり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされるリスク（流動性リスク）にさらされております。

また、当社が保有している有価証券・貸付金等は、発行体・貸付先の信用力の低下や破綻等により、価値が減少する、あるいは利息や元本の回収が不能になるなど、信用リスクにさらされております。

連結子会社では、主に預金や国債等の債券を保有しており、信用リスクや金利変動リスクにさらされております。また、一部の連結子会社では株式や外貨建債券等を保有しており、今後の株価の下落や為替レートの変動によっては、売却損・評価損計上による利益減少や、評価差額金の減少により純資産が減少するなど、価格変動リスクまたは為替変動リスクにさらされております。

当社が発行している劣後債については、発行から一定期間経過以降の利払いが変動金利となるため、金利変動リスクにさらされております。

当社および一部の連結子会社では、主として資産運用リスクをヘッジする目的で、デリバティブ取引を利用しており、また、ヘッジ目的以外にも、一定の取扱高の範囲内で運用収益を獲得する等の目的で、デリバティブ取引を利用しております。

当社グループでは主に以下のデリバティブ取引を行っております。

- ・通貨関連：為替予約取引、通貨スワップ取引、通貨オプション取引
- ・金利関連：金利スワップ取引、金利先物取引、金利オプション取引
- ・株式関連：株式スワップ取引、株価指数先物取引、株価指数オプション取引
- ・債券関連：債券先物取引、債券先物オプション取引、債券先渡取引
- ・その他：クレジットデリバティブ取引、天候デリバティブ取引、地震デリバティブ取引、パンデミックデリバティブ取引、インダストリー・ロス・ワランティ取引、ロス・ディベロップメント・カバー取引等

これらは主に為替相場の変動によるリスク、市場金利の変動によるリスク、株価の変動によるリスク、債券価格の変動によるリスク、取引対象物の信用リスク等を有しておりますが、保有現物資産等に係る当該市場リスクを効果的に減殺しております。

なお、ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引については、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4 会計方針に関する事項 (6) 重要なヘッジ会計の方法」に記載しております。

当社および連結子会社は、取引対象物の価格変動に対する当該取引の時価の変動率が大きい取引（レバレッジ取引）を利用しておりません。

また、当社および一部の連結子会社は市場取引以外のデリバティブ取引を利用しておりますが、これらは取引相手先の倒産等による契約不履行に係るリスク（信用リスク）を有しております。しかしながら、取引の相手先はいずれも国際的に優良な金融機関であり、当社は信用リスクを限定的であると認識しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当社は、グループの企業価値の最大化を目的とする戦略的リスク経営（ERM）の観点から、リスクを適切に把握、評価、コントロールし、リスク発現の際に的確に対応できる態勢を次のとおり整備しております。

親会社であるSOMPPOホールディングス株式会社が定める「グループERM基本方針」をふまえた規程を制定しているほか、経営陣がリスクの状況を把握したうえで、適切な意思決定を行うために、ERM委員会等を設置しております。また、経営に重大な影響を及ぼしうる各種リスクについてリスクを定性・定量の両面から評価し、適切にコントロールするリスク管理部門を定め、リスク管理態勢を整備・推進するための部署としてリスク管理部を設置しております。

当社は、資産運用リスクモデルにより、市場リスク、信用リスクおよび不動産投資リスクに加えて、積立保険などの保険負債について、資産運用利回りが予定利率を下回るリスクも含めて一元的に管理し、資産情報を日次で把握し、資産運用リスク量を計測しております。また、過去に発生した最大規模の市況下落やデフォルト率などを想定し、その影響度を測定するストレス・テストを行い、リスク管理に活用しております。

信用供与先の管理としては、個別取引ごとに厳正な与信審査を実施するとともに、特定与信先へのリスク集積回避のため、与信先ごとのリミット管理を行っております。

流動性リスクについては、日々の資金繰り管理のほかに、巨大災害発生など、流動性リスク・シナリオ発現に伴う保険金支払いなどの資金流出額を予想し、それに対応できる流動性資産が十分に確保されるように管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。また、「デリバティブ取引関係」注記における「契約額等」は、デリバティブ取引における契約額または想定元本であり、当該金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスク量や信用リスク量を表すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表に含まれておりません（(注)2参照）。

前連結会計年度（2017年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預貯金	716,628	716,628	—
(2) 買現先勘定	54,999	54,999	—
(3) 買入金銭債権	11,718	11,718	—
(4) 金銭の信託	104,422	104,422	—
(5) 有価証券			
売買目的有価証券	608,479	608,479	—
満期保有目的の債券	2,070	2,044	△26
その他有価証券	5,180,809	5,180,809	—
(6) 貸付金	628,048		
貸倒引当金（※1）	△94		
	627,953	646,650	18,697
資産計	7,307,081	7,325,753	18,671
(1) 社債	424,991	435,911	10,919
(2) 債券貸借取引受入担保金	250,063	250,063	—
(3) 借入金	495	495	—
負債計	675,550	686,470	10,919
デリバティブ取引（※2）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	9,553	9,553	—
ヘッジ会計が適用されているもの	15,684	15,684	—
デリバティブ取引計	25,238	25,238	—

（※1）貸付金に対応する一般貸倒引当金および個別貸倒引当金を控除しております。

（※2）その他資産およびその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預貯金	764,615	764,615	—
(2) 買現先勘定	74,998	74,998	—
(3) 買入金銭債権	6,727	6,727	—
(4) 金銭の信託	98,743	98,743	—
(5) 有価証券			
売買目的有価証券	190,776	190,776	—
満期保有目的の債券	4,015	4,066	50
その他有価証券	5,407,108	5,407,108	—
(6) 貸付金	661,400		
貸倒引当金（※1）	△34		
	661,366	680,016	18,650
資産計	7,208,352	7,227,053	18,700
(1) 社債	512,045	530,392	18,347
(2) 債券貸借取引受入担保金	95,718	95,718	—
(3) 借入金	137,314	137,186	△128
負債計	745,078	763,297	18,218
デリバティブ取引（※2）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	14,741	14,741	—
ヘッジ会計が適用されているもの	23,043	23,043	—
デリバティブ取引計	37,785	37,785	—

（※1）貸付金に対応する一般貸倒引当金および個別貸倒引当金を控除しております。

（※2）その他資産およびその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。
デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

（注）1 金融商品の時価の算定方法

資産

- (1) 現金及び預貯金
短期であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。
- (2) 買現先勘定
短期であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。
- (3) 買入金銭債権
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- (4) 金銭の信託
信託財産として運用されている預金等については、短期であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。公社債は取引所の価格、日本証券業協会の公表する価格および取引先金融機関等から提示された価格等によっており、株式は取引所の価格によっております。また、外国証券は取引所の価格等によっております。
- (5) 有価証券
公社債は取引所の価格、日本証券業協会の公表する価格および取引先金融機関等から提示された価格等によっており、株式は取引所の価格によっております。また、外国証券は取引所の価格および取引先金融機関等から提示された価格によっております。
- (6) 貸付金
貸付金の案件ごとに将来の回収予定キャッシュ・フローを、期間に対応したリスクフリーレートに信用リスクプレミアムと流動性プレミアムを付加した割引率により割り引いた金額を時価としております。また、破綻先、実質破綻先および破綻懸念先の債権等については、担保および保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算出しているため、時価は期末日における連結貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似していることから当該価額をもって時価とする方法によっております。

負債

- (1) 社債
取引所の価格および日本証券業協会の公表する価格等によっております。
- (2) 債券貸借取引受入担保金
短期であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。
- (3) 借入金
借入金の案件ごとに将来の返済予定キャッシュ・フローを、期間に対応したリスクフリーレートに信用リスクプレミアムと流動性プレミアムを付加した割引率により割り引いた金額を時価としております。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記を参照ください。

- 2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、「(5) 有価証券」には含めておりません。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
株式	35,763	36,253
外国証券	23,174	21,143
その他の証券	10,404	11,065
合計	69,342	68,462

- (※) 株式は非上場株式であり市場価格がないため、時価開示の対象としておりません。
外国証券は非上場株式および非上場株式等を主な投資対象とするものであり市場価格がないため、時価開示の対象としておりません。
その他の証券は非上場株式等を主な投資対象とするものであり市場価格がないため、時価開示の対象としておりません。

- 3 金銭債権および満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (2017年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
預貯金	706,381	9,185	—	—
買現先勘定	54,999	—	—	—
買入金銭債権	2,845	—	—	7,018
有価証券				
満期保有目的の債券				
外国証券	674	983	412	—
その他の有価証券のうち満期があるもの				
国債	57,759	104,028	214,011	431,876
地方債	500	2,080	3,100	4,600
社債	44,520	144,269	32,140	268,561
外国証券	114,659	480,703	646,522	453,483
その他の証券	2,707	12,272	5,120	373
貸付金 (※)	150,433	301,210	105,243	60,577
合計	1,135,480	1,054,733	1,006,551	1,226,490

- (※) 貸付金のうち、破綻先、実質破綻先および破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない392百万円、期間の定めのないもの10,000百万円は含めておりません。

当連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
預貯金	756,600	7,995	—	—
買現先勘定	74,998	—	—	—
買入金銭債権	415	—	—	5,826
有価証券				
満期保有目的の債券				
外国証券	1,407	1,995	571	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
国債	22,190	157,093	175,845	366,526
地方債	1,080	1,000	6,600	4,600
社債	40,542	116,610	28,700	280,891
外国証券	112,431	613,049	619,817	535,799
その他の証券	193	24,122	7,266	1,280
貸付金（※）	156,243	331,228	101,510	62,008
合計	1,166,104	1,253,094	940,311	1,256,932

（※）貸付金のうち、破綻先、実質破綻先および破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない266百万円、期間の定めのないもの10,000百万円は含めておりません。

4 社債、長期借入金、リース債務およびその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2017年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
社債	—	—	—	—	—	419,180
長期借入金	43	36	35	33	29	266
リース債務	1,046	918	688	169	57	0
債券貸借取引受入担保金	250,063	—	—	—	—	—
合計	251,153	955	723	203	86	419,446

当連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
社債	—	—	—	—	33,900	471,415
長期借入金	30,456	30,452	30,450	30,448	15,232	224
リース債務	1,375	1,130	611	489	396	169
債券貸借取引受入担保金	95,718	—	—	—	—	—
合計	127,549	31,582	31,061	30,938	49,529	471,808

(有価証券関係)

1 売買目的有価証券

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額	1,457	△214

2 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2017年3月31日)

(単位：百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	時価	差額
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	外国証券	153	161	7
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	外国証券	1,916	1,883	△33
合計		2,070	2,044	△26

当連結会計年度 (2018年3月31日)

(単位：百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	時価	差額
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	外国証券	2,019	2,087	67
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	外国証券	1,996	1,979	△17
合計		4,015	4,066	50

3 その他有価証券

前連結会計年度（2017年3月31日）

（単位：百万円）

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	公社債	1,350,754	1,218,867	131,886
	株式	1,503,908	492,316	1,011,592
	外国証券	1,106,699	992,915	113,784
	その他	42,583	37,282	5,301
	小計	4,003,947	2,741,382	1,262,565
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	公社債	162,184	168,151	△5,966
	株式	16,208	17,174	△966
	外国証券	1,001,610	1,013,589	△11,978
	その他	21,292	21,412	△120
	小計	1,201,296	1,220,328	△19,032
合計		5,205,243	3,961,710	1,243,533

(注) 1 時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券は、上表に含まれておりません。

2 連結貸借対照表において現金及び預貯金として処理している譲渡性預金ならびに買入金銭債権として処理している貸付債権信託受益権等を「その他」に含めて記載しております。

当連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	公社債	1,342,494	1,212,286	130,207
	株式	1,573,561	461,992	1,111,568
	外国証券	1,199,003	1,081,205	117,798
	その他	58,892	52,757	6,135
	小計	4,173,951	2,808,241	1,365,710
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	公社債	86,126	89,066	△2,940
	株式	14,663	16,021	△1,357
	外国証券	1,138,079	1,169,730	△31,651
	その他	8,638	8,683	△44
	小計	1,247,507	1,283,502	△35,994
合計		5,421,459	4,091,743	1,329,716

(注) 1 時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券は、上表に含まれておりません。

2 連結貸借対照表において現金及び預貯金として処理している譲渡性預金ならびに買入金銭債権として処理している貸付債権信託受益権等を「その他」に含めて記載しております。

4 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：百万円）

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
公社債	263,622	6,831	4,294
株式	109,096	74,982	58
外国証券	250,025	2,081	8,786
その他	4,033	965	22
合計	626,778	84,861	13,162

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
公社債	50,933	107	921
株式	112,071	77,887	227
外国証券	524,015	7,773	4,080
その他	7,300	1,615	2
合計	694,321	87,383	5,231

5 連結会計年度中に減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、その他有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）について745百万円（うち、株式527百万円、外国証券217百万円）、その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものについて351百万円（うち、株式9百万円、外国証券341百万円）減損処理を行っております。

当連結会計年度において、その他有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）について1,627百万円（すべて外国証券）、その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものについて1,316百万円（うち、株式1,075百万円、外国証券240百万円）減損処理を行っております。

なお、有価証券の減損にあたっては、原則として、期末日の時価が取得原価に比べて30%以上下落したものを対象としております。

(金銭の信託関係)

1 運用目的の金銭の信託

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額	△57	△110

2 満期保有目的の金銭の信託

該当事項はありません。

3 運用目的、満期保有目的以外の金銭の信託

前連結会計年度 (2017年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
金銭の信託	83,767	80,395	3,371

当連結会計年度 (2018年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
金銭の信託	78,083	76,696	1,386

4 減損処理を行った金銭の信託

前連結会計年度において、運用目的、満期保有目的以外の金銭の信託において、信託財産として運用されている有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）について217百万円減損処理を行っております。

当連結会計年度において、運用目的、満期保有目的以外の金銭の信託において、信託財産として運用されている有価証券について減損処理の対象となるものはありません。

なお、有価証券の減損にあたっては、原則として、期末日の時価が取得原価に比べて30%以上下落したものを対象としております。

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度 (2017年 3月31日)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引 以外の取引	為替予約取引				
	売建	52,079	—	△15	△15
	買建	39,853	—	△344	△344
	通貨オプション取引				
	売建	6,050	—	△0	89
	買建	5,600	—	73	△14
合計		—	—	△287	△285

(注) 時価の算定方法

- 1 為替予約取引
先物相場および取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 2 通貨オプション取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。

当連結会計年度 (2018年 3月31日)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引 以外の取引	為替予約取引				
	売建	36,744	—	681	681
	買建	4,689	—	△133	△133
	通貨オプション取引				
	売建	23,600	—	△0	184
	買建	61,900	—	95	△162
合計		—	—	643	570

(注) 時価の算定方法

- 1 為替予約取引
先物相場および取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 2 通貨オプション取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。

(2) 金利関連

前連結会計年度 (2017年 3月31日)

(単位: 百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	金利先物取引				
	売建	2,636	—	7	7
	買建	2,649	—	△2	△2
市場取引 以外の取引	金利オプション取引				
	売建	629	—	△3	0
	金利スワップ取引 受取変動・支払固定	12,592	943	33	33
合計		—	—	34	39

(注) 時価の算定方法

- 金利先物取引
主たる取引所における最終の価格によっております。
- 金利オプション取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 金利スワップ取引
将来予想されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算出した時価等によっております。

当連結会計年度 (2018年 3月31日)

(単位: 百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	金利先物取引				
	売建	1,412	—	6	6
	買建	25,244	—	△17	△17
市場取引 以外の取引	金利スワップ取引 受取変動・支払固定	2,415	2,415	△18	△18
合計		—	—	△28	△28

(注) 時価の算定方法

- 金利先物取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 金利スワップ取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。

(3) 株式関連

前連結会計年度（2017年3月31日）

（単位：百万円）

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	株価指数先物取引				
	売建	20,014	—	△11	△11
合計		—	—	△11	△11

（注）時価の算定方法

主たる取引所における最終の価格によっております。

当連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	株価指数先物取引				
	売建	5,016	—	△5	△5
合計		—	—	△5	△5

（注）時価の算定方法

主たる取引所における最終の価格によっております。

(4) 債券関連

前連結会計年度 (2017年 3月31日)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	債券先物取引				
	売建	10,725	—	10	10
	買建	8,067	—	△13	△13
	債券先物オプション取引				
	買建	1,434	—	0	△3
市場取引 以外の取引	債券先渡取引				
	売建	5,871	—	△5,906	△31
	買建	14,013	—	14,142	△53
合計		—	—	8,233	△90

(注) 時価の算定方法

- 1 債券先物取引
主たる取引所における最終の価格によっております。
- 2 債券先物オプション取引
主たる取引所における最終の価格によっております。
- 3 債券先渡取引
主に情報ベンダーが提供する価格によっております。

当連結会計年度 (2018年 3月31日)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引 以外の取引	債券先渡取引				
	売建	10,667	—	△10,922	△27
	買建	22,939	—	23,514	11
合計		—	—	12,591	△16

(注) 時価の算定方法

主に情報ベンダーが提供する価格によっております。

(5) その他

前連結会計年度（2017年3月31日）

（単位：百万円）

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	クレジットデリバティブ取引				
	売建	634	634	22	22
	天候デリバティブ取引				
	売建	314	—	△39	29
	買建	457	—	57	△43
市場取引 以外の取引	クレジットデリバティブ取引				
	売建	179	81	△2	△2
	買建	139	139	8	8
	天候デリバティブ取引				
	売建	20,872	2,058	△2,820	1,323
	買建	12,961	1,204	4,409	△898
	地震デリバティブ取引				
	売建	10,004	160	△13	263
	買建	8,793	4,464	194	△464
	インダストリー・ロス・ワランティ取引				
	売建	1,655	—	△21	151
	買建	2,329	—	117	△376
	ロス・ディベロップメント・カバー取引				
売建	2,848	2,848	△328	△328	
	合計	—	—	1,584	△315

(注) 時価の算定方法

- 1 クレジットデリバティブ取引
主に情報ベンダーが提供する価格によっております。
- 2 天候デリバティブ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 3 地震デリバティブ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 4 インダストリー・ロス・ワランティ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 5 ロス・ディベロップメント・カバー取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。

当連結会計年度（2018年3月31日）

（単位：百万円）

区分	種類	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	評価損益
市場取引	クレジットデリバティブ取引 売建	226	226	19	19
市場取引 以外の取引	クレジットデリバティブ取引 売建	79	79	1	1
	天候デリバティブ取引 売建	31,705	6,783	△4,378	1,377
	買建	16,858	3,628	6,241	△609
	地震デリバティブ取引 売建	12,493	1,310	△3	311
	買建	11,243	2,142	19	△256
	インダストリー・ロス・ワラ ンティ取引 買建	—	—	0	0
	ロス・ディベロップメント・ カバー取引 売建	2,735	2,735	△205	△205
	パンデミックデリバティブ取 引 売建	1,062	1,062	△170	66
	買建	743	—	15	△40
	合計	—	—	1,541	665

（注）時価の算定方法

- 1 クレジットデリバティブ取引
主に情報ベンダーが提供する価格によっております。
- 2 天候デリバティブ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 3 地震デリバティブ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 4 インダストリー・ロス・ワランティ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 5 ロス・ディベロップメント・カバー取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。
- 6 パンデミックデリバティブ取引
契約期間、その他当該取引に係る契約を構成する要素を基礎として算定しております。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度 (2017年 3月31日)

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
時価ヘッジ	為替予約取引 売建	その他有価証券	486,260	—	4,056
	通貨スワップ取引	その他有価証券	2,980	—	520
為替予約等の振当処理	通貨スワップ取引	外貨建社債 (負債)	133,560	133,560	(注2)
合計			—	—	4,577

(注) 1 時価の算定方法

- (1) 為替予約取引
先物相場を使用しております。
- (2) 通貨スワップ取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 2 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建社債 (負債) と一体として処理されているため、その時価は、「金融商品関係」の社債の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度 (2018年 3月31日)

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
時価ヘッジ	為替予約取引 売建	その他有価証券	486,647	—	13,260
	通貨オプション取引 売建 買建	その他有価証券	44,200	—	△0
			41,200	—	3
為替予約等の振当処理	通貨スワップ取引	外貨建社債 (負債) および外貨建借入金	216,426	216,426	(注2)
合計			—	—	13,263

(注) 1 時価の算定方法

- (1) 為替予約取引
先物相場を使用しております。
- (2) 通貨オプション取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- (3) 通貨スワップ取引
取引先金融機関から提示された価格によっております。
- 2 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建社債 (負債) および外貨建借入金と一体として処理されているため、その時価は、「金融商品関係」の社債および借入金の時価に含めて記載しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度 (2017年3月31日)

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
繰延ヘッジ	金利スワップ取引 受取固定・支払変動	保険負債	83,000	83,000	11,106
合計			—	—	11,106

(注) 時価の算定方法

将来予想されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算出した時価によっております。

当連結会計年度 (2018年3月31日)

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
繰延ヘッジ	金利スワップ取引 受取固定・支払変動	保険負債	83,000	78,000	9,779
合計			—	—	9,779

(注) 時価の算定方法

将来予想されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算出した時価によっております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定拠出年金制度のほか、確定給付型の制度として、退職一時金制度ならびに既年金受給者および受給待期者を対象とする規約型企業年金制度および自社運営の退職年金制度を設けております。また、退職給付信託の設定を行っております。

国内連結子会社では、確定拠出年金制度のほか、確定給付型の制度として非積立型の退職一時金制度を設けております。

一部の在外連結子会社は、確定拠出型および確定給付型の退職給付制度を設けております。

なお、一部の退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債および退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
退職給付債務の期首残高	213,566	222,128
勤務費用	10,818	11,874
利息費用	795	1,026
数理計算上の差異の発生額	10,786	△25,994
退職給付の支払額	△13,125	△13,278
連結範囲の変動	—	△1,464
その他	△712	187
退職給付債務の期末残高	222,128	194,479

(注) 簡便法により計算した退職給付費用を「勤務費用」に計上しております。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
年金資産の期首残高	94,288	93,186
期待運用収益	765	706
数理計算上の差異の発生額	795	6,921
事業主からの拠出額	295	457
退職給付の支払額	△2,269	△2,270
連結範囲の変動	—	△1,736
その他	△689	159
年金資産の期末残高	93,186	97,423

- (3) 退職給付債務および年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債および退職給付に係る資産の調整表

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	217,709	190,431
年金資産	△93,186	△97,423
	124,523	93,008
非積立型制度の退職給付債務	4,418	4,047
アセット・シーリングによる調整額	480	311
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	129,422	97,367
退職給付に係る負債	129,612	97,585
退職給付に係る資産	△190	△218
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	129,422	97,367

- (4) 退職給付費用およびその内訳項目の金額

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
勤務費用	10,818	11,874
利息費用	795	1,026
期待運用収益	△765	△706
数理計算上の差異の費用処理額	3,068	3,778
過去勤務費用の費用処理額	6	216
その他	62	59
確定給付制度に係る退職給付費用	13,985	16,250

(注) 簡便法により計算した退職給付費用を「勤務費用」に計上しております。

- (5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
過去勤務費用	△6	△216
数理計算上の差異	6,774	△36,852
合計	6,768	△37,069

- (6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
未認識過去勤務費用	650	433
未認識数理計算上の差異	40,503	3,644
合計	41,154	4,078

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は次のとおりであります。

	(単位：%)	
	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
債券	18	18
株式	62	65
共同運用資産	8	7
生命保険一般勘定	3	3
現金および預金	0	1
その他	9	6
合計	100	100

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎は次のとおりであります。

		(単位：%)	
		前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
割引率	当社	0.3	0.3
	在外連結子会社	1.2～11.7	2.5～10.3
長期期待運用収益率	当社	0.0～ 1.5	0.0～ 1.5
	在外連結子会社	2.6～11.7	10.3

3 確定拠出制度

当社および連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度4,927百万円、当連結会計年度6,807百万円です。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
繰延税金資産		
責任準備金等	163,013	161,026
税務上繰越欠損金	29,160	37,541
支払備金	34,594	34,514
財産評価損	33,223	33,109
税務上無形固定資産	28,402	28,250
退職給付に係る負債	36,192	27,245
その他	56,119	51,008
繰延税金資産小計	380,706	372,696
評価性引当額	△68,864	△59,868
繰延税金資産合計	311,841	312,827
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△335,272	△359,310
その他	△37,709	△18,130
繰延税金負債合計	△372,981	△377,441
繰延税金負債の純額	△61,140	△64,613

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

(単位：%)

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
国内の法定実効税率	28.2	28.2
(調整)		
受取配当金等の益金不算入額	△3.0	△130.2
特定外国子会社等合算所得	0.0	74.3
のれん償却額	0.4	5.1
その他	1.2	0.8
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.8	△21.9

(企業結合等関係)

事業分離

(1) 事業分離の概要

① 分離先企業の名称

Fortuna Holdings Limited

(Fortuna Holdings Limited は、Centerbridge Partners, L.P. の関連会社が運営するファンドが出資する英国王室属領ジャージー島法人であります。)

② 分離した事業の内容

保険事業などを行うCanopus AG (以下「Canopus社」) およびその子会社と関連会社

③ 事業分離を行った主な理由

2017年3月のEndurance Specialty Holdings Ltd. グループの買収後、同様のロイズビジネスを有するCanopus社の独立した経営体制を維持することは当社グループとしての戦略的一貫性、効率性、ならびにブランドの統一感を欠くこととなるほか、性急かつ無理な統合をすることはCanopus社の企業価値を毀損することとなります。これら総合的な判断の結果、Canopus社にかかる事業を譲渡することが、当社の資本効率を高め株主価値を最大化するとともに、Canopus社にとっても、最適な選択肢であるとの結論に至り、複数の候補先との交渉を経て、Canopus社株式を譲渡しました。

④ 事業分離日

2018年3月9日

⑤ 法的形式を含むその他取引の概要に関する事項

受取対価を現金等の財産のみとする株式譲渡

(2) 実施した会計処理の概要

① 移転損益の金額

有価証券売却損 1,332百万円

② 移転した事業に係る資産および負債の適正な帳簿価額ならびにその主な内訳

資産合計	3,083百万米ドル
(うち有価証券)	1,889百万米ドル)
負債合計	2,505百万米ドル
(うち保険契約準備金)	2,078百万米ドル)

③ 会計処理

Canopus社の連結上の帳簿価額と売却価額との差額を有価証券売却損として経常費用に計上しております。

(3) 分離した事業が含まれていた報告セグメント

海外保険事業

(4) 当連結会計年度の連結損益計算書に計上されている分離した事業に係る損益の概算額

正味収入保険料	129,755百万円
経常利益	△26,749百万円

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務諸表が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社ならびに子会社および関連会社は、親会社であるSOMP Oホールディングス株式会社が定めるグループ経営基本方針・経営戦略等のもと、それぞれの事業における戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社は、当社ならびに個々の子会社および関連会社を最小単位とした事業別のセグメントから構成されており、「国内損害保険事業」および「海外保険事業」の2つを報告セグメントとしております。なお、報告セグメントに含まれていない確定拠出年金事業は「その他」の区分としております。

「国内損害保険事業」は、主として日本国内の損害保険引受業務、資産運用業務およびそれらに関連する業務を、「海外保険事業」は、主として海外の保険引受業務および資産運用業務をそれぞれ行っております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益または損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。報告セグメントの利益または損失は親会社株主に帰属する当期純利益をベースとした数値であります。

セグメント間の内部収益は、第三者間取引価格等に基づいております。

(減価償却方法の変更)

「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4 会計方針に関する事項」に記載のとおり、当社および国内連結子会社は、有形固定資産の減価償却方法について、従来、定率法（ただし、1998年4月1日以降に取得した建物ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備および構築物については定額法）を採用していましたが、当連結会計年度より定額法に変更しております。

この変更により、従来の方法と比べて、当連結会計年度のセグメント利益は、「国内損害保険事業」セグメントで2,060百万円増加しております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益または損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注2)	合計	調整額 (注3)	連結財務 諸表計上額 (注4)
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計				
売上高（注1）							
外部顧客への売上高	2,212,230	344,655	2,556,886	1,700	2,558,586	423,489	2,982,076
セグメント間の内部 売上高または振替高	—	—	—	246	246	△246	—
計	2,212,230	344,655	2,556,886	1,946	2,558,832	423,243	2,982,076
セグメント利益	157,743	12,833	170,577	212	170,790	—	170,790
セグメント資産	6,570,367	2,559,745	9,130,113	2,839	9,132,953	—	9,132,953
その他の項目							
減価償却費	16,135	3,467	19,603	107	19,711	—	19,711
のれんの償却額	154	3,336	3,491	—	3,491	—	3,491
利息及び配当金収入	113,975	18,750	132,725	0	132,725	△1	132,724
支払利息	5,330	1,181	6,512	—	6,512	△1	6,510
持分法投資利益	177	220	398	—	398	—	398
特別利益（注5）	9,257	53	9,311	—	9,311	—	9,311
特別損失（注6）	17,546	148	17,695	11	17,706	—	17,706
（減損損失）	(197)	(—)	(197)	(11)	(209)	(—)	(209)
税金費用	57,922	4,655	62,578	60	62,638	—	62,638
持分法適用会社への 投資額	1,324	1,761	3,085	—	3,085	—	3,085
有形固定資産および 無形固定資産の増加額	47,389	132,315	179,705	214	179,919	—	179,919

- (注) 1 売上高は、国内損害保険事業にあつては正味収入保険料、海外保険事業にあつては正味収入保険料および生命保険料、「その他」および連結財務諸表計上額にあつては経常収益の金額を記載しております。
- 2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、確定拠出年金事業であります。
- 3 売上高の調整額は、正味収入保険料または生命保険料以外の国内損害保険事業および海外保険事業に係る経常収益423,489百万円、セグメント間取引消去△246百万円であります。
- 4 セグメント利益は、連結損益計算書の親会社株主に帰属する当期純利益と調整を行っております。
- 5 国内損害保険事業における特別利益は、固定資産処分益9,257百万円であります。
- 6 国内損害保険事業における特別損失の主なもの、価格変動準備金繰入額10,542百万円および固定資産処分損6,807百万円であります。

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注2)	合計	調整額 (注3)	連結財務 諸表計上額 (注4)
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計				
売上高（注1）							
外部顧客への売上高	2,218,407	641,347	2,859,755	1,880	2,861,635	471,247	3,332,883
セグメント間の内部 売上高または振替高	—	—	—	228	228	△228	—
計	2,218,407	641,347	2,859,755	2,109	2,861,864	471,018	3,332,883
セグメント利益	119,326	20,892	140,218	331	140,550	—	140,550
セグメント資産	6,743,249	2,202,600	8,945,850	3,340	8,949,190	—	8,949,190
その他の項目							
減価償却費	13,235	54,225	67,460	150	67,611	—	67,611
のれんの償却額	147	20,167	20,314	—	20,314	—	20,314
利息及び配当金収入	105,269	42,285	147,555	0	147,555	△1	147,553
支払利息	7,063	4,470	11,534	—	11,534	△1	11,532
持分法投資利益	33	559	592	—	592	—	592
特別利益（注5）	4,641	26,021	30,663	—	30,663	△21	30,641
特別損失（注6）	47,553	9,510	57,063	1	57,065	△21	57,043
（減損損失）	(2,738)	(8,393)	(11,132)	(—)	(11,132)	(—)	(11,132)
税金費用	45,056	△69,782	△24,726	50	△24,675	—	△24,675
持分法適用会社への 投資額	1,356	3,554	4,910	—	4,910	—	4,910
有形固定資産および 無形固定資産の増加額	67,367	7,634	75,002	329	75,332	—	75,332

- (注) 1 売上高は、国内損害保険事業にあつては正味収入保険料、海外保険事業にあつては正味収入保険料および生命保険料、「その他」および連結財務諸表計上額にあつては経常収益の金額を記載しております。
- 2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、確定拠出年金事業であります。
- 3 売上高の調整額は、正味収入保険料または生命保険料以外の国内損害保険事業および海外保険事業に係る経常収益471,247百万円、セグメント間取引消去△228百万円であります。
- 4 セグメント利益は、連結損益計算書の親会社株主に帰属する当期純利益と調整を行っております。
- 5 国内損害保険事業における特別利益の主なものは、固定資産処分益4,619百万円であります。また、海外保険事業における特別利益の主なものは、海外子会社の清算に伴う清算益25,927百万円であります。
- 6 国内損害保険事業における特別損失の主なものは、固定資産処分損34,323百万円および価格変動準備金繰入額10,490百万円であります。また、海外保険事業における特別損失の主なものは、減損損失8,393百万円であります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

1 製品およびサービスごとの情報

(単位：百万円)

	火災	海上	傷害	自動車	自動車損害賠償責任	その他	合計
正味収入保険料	373,558	79,335	194,152	1,245,666	295,884	361,739	2,550,336

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米国	その他	合計
2,123,685	74,313	358,887	2,556,886

(注) 1 売上高は正味収入保険料および生命保険料の合計を記載しております。

2 主に顧客の所在地を基礎とした社内管理区分により、国または地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

連結貸借対照表の有形固定資産の金額に占める本邦に所在している有形固定資産の金額の割合が90%を超えているため、地域ごとの情報の記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1 製品およびサービスごとの情報

(単位：百万円)

	火災	海上	傷害	自動車	自動車損害賠償責任	その他	合計
正味収入保険料	454,125	105,325	192,798	1,241,314	292,021	569,170	2,854,755

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米国	その他	合計
2,145,550	343,455	370,748	2,859,755

(注) 1 売上高は正味収入保険料および生命保険料の合計を記載しております。

2 主に顧客の所在地を基礎とした社内管理区分により、国または地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

連結貸借対照表の有形固定資産の金額に占める本邦に所在している有形固定資産の金額の割合が90%を超えているため、地域ごとの情報の記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計			
減損損失	197	—	197	11	—	209

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計			
減損損失	2,738	8,393	11,132	—	—	11,132

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計			
当期償却額	154	3,336	3,491	—	—	3,491
当期末残高	389	226,154	226,544	—	—	226,544

当連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	全社・消去	合計
	国内損害 保険事業	海外 保険事業	計			
当期償却額	147	20,167	20,314	—	—	20,314
当期末残高	241	176,310	176,552	—	—	176,552

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

- 1 関連当事者との取引
記載すべき重要なものではありません。

- 2 親会社または重要な関連会社に関する注記
 - (1) 親会社情報
SOMPOホールディングス株式会社（東京証券取引所に上場）
 - (2) 重要な関連会社の要約財務情報
該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
1株当たり純資産額	1,508円47銭	1,588円05銭
1株当たり当期純利益	173円55銭	142円82銭

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	170,790	140,550
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に 帰属する当期純利益(百万円)	170,790	140,550
普通株式の期中平均株式数 (千株)	984,055	984,055

- 3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年3月31日)	当連結会計年度 (2018年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	1,549,405	1,590,385
純資産の部の合計額から控除する 金額(百万円)	64,984	27,652
(うち非支配株主持分(百万円))	(64,984)	(27,652)
普通株式に係る期末の純資産額 (百万円)	1,484,421	1,562,732
1株当たり純資産額の算定に用いら れた期末の普通株式の数(千株)	984,055	984,055

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
当社	2073年満期米ドル建劣後特約付社債（利払繰延条項付）（注1）	2013年 3月28日	133,560 [1,400百万 米ドル]	133,560 [1,400百万 米ドル]	5.325 (注2)	なし	2073年 3月28日
当社	第1回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約付）	2016年 8月8日	100,000	100,000	0.840 (注3)	なし	2046年 8月8日
当社	第2回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約付）	2016年 8月8日	100,000	100,000	0.840 (注3)	なし	2076年 8月8日
当社	第3回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約付）	2017年 4月26日	—	100,000	1.060 (注4)	なし	2077年 4月26日
Sompo International Holdings Ltd.	米ドル建普通社債（注1）	2004年 7月15日	34,406 [295百万 米ドル]	33,193 [293百万 米ドル]	7.000	なし	2034年 7月15日
Sompo International Holdings Ltd.	米ドル建普通社債（注1）	2010年 3月23日	11,698 [100百万 米ドル]	11,285 [99百万 米ドル]	7.000	なし	2034年 7月15日
Sompo International Holdings Ltd.	米ドル建普通社債（注1）	2012年 10月2日	35,075 [301百万 米ドル]	34,005 [300百万 米ドル]	4.700	なし	2022年 10月15日
Sompo International Holdings Ltd.	米ドル建劣後特約付社債（注1、5）	2006年 1月6日	10,251 [88百万 米ドル]	—	(注6)	なし	2036年 3月30日
合計	—	—	424,991	512,045	—	—	—

- (注) 1 外国において発行したものであるため、[]内に外貨建による金額を付記しております。
 2 2023年3月28日以降は、変動金利（ステップアップあり）であります。
 3 2026年8月8日の翌日以降は、6か月ユーロ円LIBORに1.86%を加算した利率であります。
 4 2027年4月26日の翌日以降は、6か月ユーロ円LIBORに1.81%を加算した利率であります。
 5 2017年9月30日に全額期限前償還しております。
 6 3か月米ドルLIBORに3.80%を加算した利率であります。
 7 連結決算日後5年内における償還予定額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
—	—	—	—	33,900

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	50	50	0.74	—
1年以内に返済予定の長期借入金	43	30,456	0.15	—
1年以内に返済予定のリース債務	1,046	1,375	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く。)	401	106,808	0.15	2019年4月26日 ～2039年8月26日
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。)	1,833	2,797	—	2019年4月1日 ～2023年4月30日
その他有利子負債 債券貸借取引受入担保金 (1年以内返済予定)	250,063	95,718	—	—
合計	253,438	237,205	—	—

- (注) 1 本表記載の借入金等は連結貸借対照表の「その他負債」に含まれております。
 2 平均利率については、期末借入残高に対する加重平均利率を記載しております。
 なお、当社はリース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、リース債務については平均利率を記載しておりません。
 3 長期借入金およびリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金	30,452	30,450	30,448	15,232
リース債務	1,130	611	489	396

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
資産の部		
現金及び預貯金	369,971	445,878
現金	6	2
預貯金	369,964	445,875
買現先勘定	54,999	74,998
買入金銭債権	7,624	6,301
金銭の信託	104,292	98,613
有価証券	※4, ※5 5,519,966	※4, ※5 5,491,040
国債	913,716	834,110
地方債	6,868	6,839
社債	569,275	570,034
株式	※3 1,600,377	※3 1,661,445
外国証券	※3 2,379,894	※3 2,356,282
その他の証券	※3 49,834	※3 62,328
貸付金	※7, ※8 626,474	※7, ※8 661,399
保険約款貸付	8,647	7,643
一般貸付	617,827	653,756
有形固定資産	※1, ※4 289,844	※1, ※4 244,366
土地	143,299	103,348
建物	116,496	105,830
リース資産	3,106	2,563
建設仮勘定	2,751	6,920
その他の有形固定資産	24,189	25,703
無形固定資産	37,608	79,404
ソフトウェア	—	4,913
その他の無形固定資産	37,608	74,490
その他資産	568,415	596,552
未収保険料	2,465	2,868
代理店貸	171,724	173,280
外国代理店貸	44,512	38,056
共同保険貸	10,291	11,716
再保険貸	97,410	100,220
外国再保険貸	81,609	65,424
代理業務貸	688	708
未収金	32,137	66,125
未収収益	10,547	10,201
預託金	15,700	19,322
地震保険預託金	6,930	7,364
仮払金	70,466	69,189
先物取引差入証拠金	7,415	7,744
金融派生商品	16,512	24,328
その他の資産	1	0
前払年金費用	884	669
貸倒引当金	△3,493	△3,570
投資損失引当金	△7,808	△7,476
資産の部合計	7,568,779	7,688,176

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
負債の部		
保険契約準備金	4,861,584	4,766,933
支払備金	※10 912,762	※10 907,429
責任準備金	※11 3,948,822	※11 3,859,504
社債	333,560	433,560
その他負債	680,506	651,635
共同保険借	5,370	5,135
再保険借	93,204	81,782
外国再保険借	35,631	37,179
債券貸借取引受入担保金	※4 250,063	※4 95,718
借入金	※4 444	※4 137,263
未払法人税等	43,472	5,685
預り金	3,574	3,449
前受収益	376	361
未払金	144,356	173,446
仮受金	87,742	84,158
金融派生商品	663	739
金融商品等受入担保金	10,790	20,768
リース債務	2,693	3,968
資産除去債務	2,120	1,977
退職給付引当金	88,172	92,974
賞与引当金	18,375	18,435
役員賞与引当金	135	97
特別法上の準備金	68,706	79,193
価格変動準備金	68,706	79,193
繰延税金負債	62,461	70,750
負債の部合計	6,113,502	6,113,580
純資産の部		
株主資本		
資本金	70,000	70,000
資本剰余金		
資本準備金	70,000	70,000
資本剰余金合計	70,000	70,000
利益剰余金		
その他利益剰余金	395,486	459,119
圧縮記帳積立金	4,178	4,084
別途積立金	83,300	83,300
繰越利益剰余金	308,007	371,735
利益剰余金合計	395,486	459,119
株主資本合計	535,486	599,119
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	911,787	968,426
繰延ヘッジ損益	8,003	7,050
評価・換算差額等合計	919,790	975,477
純資産の部合計	1,455,276	1,574,596
負債及び純資産の部合計	7,568,779	7,688,176

② 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
経常収益	2,585,968	2,590,740
保険引受収益	2,405,516	2,424,702
正味収入保険料	※2 2,165,694	※2 2,168,009
収入積立保険料	131,574	120,364
積立保険料等運用益	41,780	39,287
支払備金戻入額	※5 213	※5 5,332
責任準備金戻入額	※6 64,905	※6 89,318
為替差益	—	835
その他保険引受収益	1,348	1,556
資産運用収益	168,291	155,053
利息及び配当金収入	※7 114,898	※7 106,234
金銭の信託運用益	※9 2,516	※9 5,476
有価証券売却益	84,070	81,469
有価証券償還益	45	1,025
為替差益	7,547	—
その他運用収益	993	136
積立保険料等運用益振替	△41,780	△39,287
その他経常収益	12,160	10,983
経常費用	2,355,493	2,415,519
保険引受費用	1,986,208	2,021,875
正味支払保険金	※3 1,242,843	※3 1,272,130
損害調査費	125,894	123,507
諸手数料及び集金費	※4 385,963	※4 392,329
満期返戻金	226,123	231,262
契約者配当金	87	186
為替差損	2,627	—
その他保険引受費用	2,668	2,458
資産運用費用	35,917	57,210
金銭の信託運用損	※9 198	※9 168
売買目的有価証券運用損	※8 1	—
有価証券売却損	12,984	14,110
有価証券評価損	1,607	26,703
有価証券償還損	315	97
金融派生商品費用	※10 16,218	※10 11,326
為替差損	—	1,406
その他運用費用	4,590	3,396
営業費及び一般管理費	322,505	325,104
その他経常費用	10,862	11,328
支払利息	6,496	7,058
貸倒引当金繰入額	151	171
貸倒損失	80	11
その他の経常費用	4,133	4,087
経常利益	230,474	175,220

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
特別利益	9,257	27,690
固定資産処分益	9,257	4,619
その他特別利益	—	※11 23,071
特別損失	17,538	47,541
固定資産処分損	6,803	34,316
減損損失	197	2,738
特別法上の準備金繰入額	10,536	10,486
価格変動準備金繰入額	10,536	10,486
税引前当期純利益	222,194	155,369
法人税及び住民税	45,842	831
法人税等調整額	11,949	△15,494
法人税等合計	57,792	△14,663
当期純利益	164,401	170,032

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						株主資本 合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	その他利益剰余金			
				圧縮記帳 積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	70,000	70,000	23,878	4,308	83,300	205,576	457,062
当期変動額							
圧縮記帳積立金の取崩				△129		129	—
剰余金の配当			△23,878			△62,100	△85,978
当期純利益						164,401	164,401
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)							
当期変動額合計	—	—	△23,878	△129	—	102,431	78,423
当期末残高	70,000	70,000	—	4,178	83,300	308,007	535,486

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	857,308	10,510	867,818	1,324,881
当期変動額				
圧縮記帳積立金の取崩				—
剰余金の配当				△85,978
当期純利益				164,401
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	54,479	△2,507	51,971	51,971
当期変動額合計	54,479	△2,507	51,971	130,395
当期末残高	911,787	8,003	919,790	1,455,276

当事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					株主資本 合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金			
		資本準備金	その他利益剰余金			
			圧縮記帳 積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	70,000	70,000	4,178	83,300	308,007	535,486
当期変動額						
圧縮記帳積立金の取崩			△94		94	—
剰余金の配当					△106,400	△106,400
当期純利益					170,032	170,032
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)						
当期変動額合計	—	—	△94	—	63,727	63,632
当期末残高	70,000	70,000	4,084	83,300	371,735	599,119

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	911,787	8,003	919,790	1,455,276
当期変動額				
圧縮記帳積立金の取崩				—
剰余金の配当				△106,400
当期純利益				170,032
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	56,638	△952	55,686	55,686
当期変動額合計	56,638	△952	55,686	119,319
当期末残高	968,426	7,050	975,477	1,574,596

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準および評価方法

- (1) 売買目的有価証券の評価は、時価法によっております。
なお、売却原価の算定は移動平均法によっております。
- (2) 満期保有目的の債券の評価は、移動平均法に基づく償却原価法によっております。
- (3) 子会社株式および関連会社株式の評価は、移動平均法に基づく原価法によっております。
- (4) その他有価証券（時価を把握することが極めて困難と認められるものを除く。）の評価は、期末日の市場価格等に基づく時価法によっております。
なお、評価差額は全部純資産直入法により処理し、また、売却原価の算定は移動平均法によっております。
- (5) その他有価証券のうち時価を把握することが極めて困難と認められるものの評価は、移動平均法に基づく原価法によっております。
- (6) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法によっております。
- (7) 運用目的および満期保有目的のいずれにも該当しない有価証券の保有を目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、その他有価証券と同じ方法によっております。

2 デリバティブ取引の評価基準および評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法によっております。

3 固定資産の減価償却の方法

- (1) 有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却は、定額法によっております。
（会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更）
当社は、有形固定資産の減価償却方法について、従来、定率法（ただし、1998年4月1日以降に取得した建物ならびに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備および構築物については定額法）を採用していましたが、当事業年度より定額法に変更しております。
当社の属するSOMPOホールディングスグループにおける近年の海外保険事業の拡大により定額法を採用する会社の割合が高まったことに加えて、国内損害保険事業では、合併に伴う拠点統廃合・システム統合の完了などにより、今後、有形固定資産が耐用年数にわたり安定的に使用されることが見込まれます。これらを契機として、SOMPOホールディングスグループの減価償却方法の統一の検討を行ったところ、当社においても、定額法により均等に費用配分することが実態をより適正に表す合理的な方法であると判断いたしました。これにより定額法を採用している在外連結子会社との会計処理が統一され、より有用な財務情報を提供できることとなります。この変更により、従来の方と比べて、当事業年度の経常利益および税引前当期純利益はそれぞれ2,847百万円増加しております。
- (2) 無形固定資産（リース資産を除く）の減価償却は、定額法によっております。
なお、自社利用のソフトウェアの減価償却は、利用可能期間に基づく定額法によっております。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準および償却・引当基準に基づき、次のとおり計上しております。

破産、特別清算、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者に対する債権および実質的に経営破綻に陥っている債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額等を控除し、その残額を引き当てております。

今後、経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断して必要と認められる額を引き当てております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率等を債権額に乗じた額を引き当てております。

また、すべての債権は資産の自己査定基準に基づき、各所管部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署等が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

(2) 投資損失引当金

有価証券等について将来発生する可能性のある損失に備えるため、資産の自己査定基準および償却・引当基準に基づき、期末における損失見込額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異および過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10～11年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

また、過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により費用処理しております。

(4) 賞与引当金

従業員賞与に充てるため、期末における支給見込額を基準に計上しております。

(5) 役員賞与引当金

役員賞与に充てるため、期末における支給見込額を基準に計上しております。

(6) 価格変動準備金

株式等の価格変動による損失に備えるため、保険業法第115条の規定に基づき計上しております。

5 ヘッジ会計の方法

金利変動に伴う貸付金および債券のキャッシュ・フロー変動リスクをヘッジする目的で実施する金利スワップ取引で、特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を適用しております。

「保険業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第26号）に基づく長期の保険契約等に係る金利変動リスクをヘッジする目的で実施する金利スワップ取引については、繰延ヘッジを適用しております。ヘッジ対象となる保険負債とヘッジ手段である金利スワップ取引を一定の残存期間ごとにグルーピングのうえヘッジ指定を行っており、ヘッジに高い有効性があるため、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

また、保有する株式に係る将来の株価変動リスクをヘッジする目的で行う株式スワップ取引については時価ヘッジを適用しております。

また、為替変動に伴う外貨建資産等の為替変動リスクをヘッジする目的で実施する為替予約取引、通貨オプション取引および通貨スワップ取引については原則として時価ヘッジを、振当処理の要件を満たしている場合には振当処理を適用しております。外貨建予定取引の円貨建キャッシュ・フローを固定する目的で実施している為替予約取引の一部については、繰延ヘッジを適用しております。当社が発行する外貨建社債および外貨建借入金に係る為替変動リスクをヘッジする目的で実施する通貨スワップ取引については、振当処理を適用しております。

なお、ヘッジ有効性については、原則としてヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計とを定期的に比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。

ただし、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件が同一でありヘッジに高い有効性があることが明らかなもの、金利スワップの特例処理の適用要件を満たすものおよび振当処理の適用要件を満たすものについては、ヘッジ有効性の評価を省略しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異および未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税抜方式によっております。

ただし、損害調査費、営業費及び一般管理費等の費用は税込方式によっております。

なお、資産に係る控除対象外消費税等は仮払金に計上し、5年間で均等償却しております。

(貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の圧縮記帳額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
18,835	16,882

2 関係会社に対する金銭債権債務の総額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
金銭債権の総額	81,083	74,271
金銭債務の総額	82,421	91,420

(注) 1 金銭債権の内容は、貸付金、外国代理店貸等であります。

2 金銭債務の内容は、未払金、再保険借等であります。

※3 関係会社の株式等の総額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
株式	1,070,755	1,021,786
出資金	15,347	15,598

※4 担保に供している資産および担保付債務は次のとおりであります。

担保に供している資産

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
有価証券	322,500	157,192
有形固定資産	2,601	2,544
合計	325,101	159,737

担保付債務

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
債券貸借取引受入担保金	250,063	95,718
借入金	444	396
合計	250,508	96,114

なお、上記有価証券には、現金担保付有価証券貸借取引により差し入れた有価証券が含まれており、その金額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
237,232	88,152

※5 有価証券のうち消費貸借契約により貸し付けているものの金額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
303,227	186,174

- 6 デリバティブ取引に係る担保として受け入れている有価証券のうち、売却または再担保という方法で自由に処分できる権利を有するものは次のとおりであります。

(単位：百万円)		
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
処分せずに自己保有している有価証券	22,320	—

- ※7 貸付金のうち破綻先債権等の金額は次のとおりであります。

(単位：百万円)		
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
破綻先債権額	48	—
延滞債権額	419	285
3カ月以上延滞債権額	13	18
貸付条件緩和債権額	—	—
合計	480	303

(注) 破綻先債権とは、元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本または利息の取立てまたは弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸付金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸付金」という。）のうち、「法人税法施行令」（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまで（貸倒引当金勘定への繰入限度額）に掲げる事由または同項第4号に規定する事由が生じている貸付金であります。

延滞債権とは、未収利息不計上貸付金であって、破綻先債権および債務者の経営再建または支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸付金以外の貸付金であります。

3カ月以上延滞債権とは、元本または利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸付金で破綻先債権および延滞債権に該当しないものであります。

貸付条件緩和債権とは、債務者の経営再建または支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、破綻先債権、延滞債権および3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

- ※8 貸出コミットメント契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

(単位：百万円)		
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
	9,225	9,603

- 9 保険引受に関する債務に対して、次のとおり債務保証を行っております。

(単位：百万円)		
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
Canopus Reinsurance AG	20,522	25,102

- ※10 支払備金の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)		
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
支払備金（出再支払備金控除前、 （ロ）に掲げる保険を除く）	895,274	914,397
同上に係る出再支払備金	67,277	87,344
差引（イ）	827,996	827,053
地震保険および自動車損害賠償責任保険に係る 支払備金（ロ）	84,765	80,376
計（イ+ロ）	912,762	907,429

※11 責任準備金の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (2017年3月31日)	(単位：百万円) 当事業年度 (2018年3月31日)
普通責任準備金（出再責任準備金控除前）	1,565,456	1,570,294
同上に係る出再責任準備金	61,756	64,907
差引（イ）	1,503,699	1,505,386
その他の責任準備金（ロ）	2,445,123	2,354,117
計（イ＋ロ）	3,948,822	3,859,504

(損益計算書関係)

- 1 関係会社との取引による収益費用の総額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
収益の総額	45,269	43,462
費用の総額	113,738	127,072

(注) 1 収益の内容は、収入保険料、受取配当金等であります。

2 費用の内容は、業務委託料、支払保険金等であります。

- ※2 正味収入保険料の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
収入保険料	2,639,155	2,634,213
支払再保険料	473,461	466,204
差引	2,165,694	2,168,009

- ※3 正味支払保険金の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
支払保険金	1,666,873	1,583,640
回収再保険金	424,029	311,510
差引	1,242,843	1,272,130

- ※4 諸手数料及び集金費の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
支払諸手数料及び集金費	415,603	423,471
出再保険手数料	29,640	31,141
差引	385,963	392,329

- ※5 支払備金繰入額（△は支払備金戻入額）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2016年4月1日 至 2017年3月31日)	当事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)
支払備金繰入額（出再支払備金控除前、 （ロ）に掲げる保険を除く）	2,893	19,123
同上に係る出再支払備金繰入額	△1,167	20,066
差引（イ）	4,061	△942
地震保険および自動車損害賠償責任保険に係る 支払備金繰入額（ロ）	△4,275	△4,389
計（イ+ロ）	△213	△5,332

※6 責任準備金繰入額（△は責任準備金戻入額）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
普通責任準備金繰入額（出再責任準備金控除前）		△11,904		4,838
同上に係る出再責任準備金繰入額		996		3,150
差引（イ）		△12,901		1,687
その他の責任準備金繰入額（ロ）		△52,003		△91,006
計（イ+ロ）		△64,905		△89,318

※7 利息及び配当金収入の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
預貯金利息		21		96
コールローン利息		0		0
買現先勘定利息		4		3
買入金銭債権利息		192		150
有価証券利息・配当金		102,343		93,534
貸付金利息		6,448		6,508
不動産賃貸料		4,825		4,719
その他利息・配当金		1,061		1,220
計		114,898		106,234

※8 売買目的有価証券運用損の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
売却損益		△1		-

※9 金銭の信託運用益および金銭の信託運用損中の評価損益の合計額は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
		△182		△58

※10 金融派生商品費用中の評価損益は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
		△1,136		△652

※11 その他特別利益は次のとおりであります。

(単位：百万円)				
	前事業年度		当事業年度	
	(自	2016年4月1日	(自	2017年4月1日
	至	2017年3月31日)	至	2018年3月31日)
子会社清算益		-		23,071

(有価証券関係)

前事業年度 (2017年3月31日)

子会社株式および関連会社株式で時価のあるものについては、金額の重要性が乏しいため記載を省略しております。

当事業年度 (2018年3月31日)

子会社株式および関連会社株式で時価のあるものについては、金額の重要性が乏しいため記載を省略しております。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式および関連会社株式の貸借対照表計上額
(単位：百万円)

区分	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
子会社株式等	1,082,037	1,032,188
関連会社株式等	3,190	4,322
合計	1,085,228	1,036,510

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象としておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	(単位：百万円)	
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
繰延税金資産		
責任準備金	157,587	156,127
財産評価損	47,782	50,399
支払備金	29,038	30,883
税務上無形固定資産	28,043	27,912
退職給付引当金	24,388	25,753
その他	44,632	55,079
繰延税金資産小計	331,471	346,157
評価性引当額	△54,265	△53,612
繰延税金資産合計	277,206	292,545
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△334,298	△358,457
その他	△5,369	△4,838
繰延税金負債合計	△339,667	△363,295
繰延税金負債の純額	△62,461	△70,750

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	(単位：%)	
	前事業年度 (2017年3月31日)	当事業年度 (2018年3月31日)
法定実効税率	28.2	28.2
(調整)		
受取配当金等の益金不算入額	△2.2	△92.5
特定外国子会社等合算所得	0.0	53.9
その他	0.0	1.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.0	△9.4

(企業結合等関係)

事業分離

連結財務諸表「注記事項（企業結合等関係） 事業分離」に記載しておりますので、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④ 【附属明細表】
【事業費明細表】

(単位：百万円)

区分		金額
損害調査費・ 営業費及び一般管理費	人件費	236,896
	給与	(166,013)
	賞与引当金繰入額	(18,435)
	役員賞与引当金繰入額	(97)
	退職金	(345)
	退職給付引当金繰入額	(16,198)
	厚生費	(35,805)
	物件費	193,294
	減価償却費	(11,771)
	土地建物機械賃借料	(17,416)
	営繕費	(3,595)
	旅費交通費	(5,019)
	通信費	(7,443)
	事務費	(13,035)
	広告費	(2,463)
	諸会費・寄附金・交際費	(11,280)
	その他物件費	(121,268)
	税金	18,421
	拠出金	0
	負担金	—
	計	448,612
	(損害調査費)	(123,507)
	(営業費及び一般管理費)	(325,104)
諸手数料及び集金費	代理店手数料等	383,952
	保険仲立人手数料	1,832
	募集費	—
	集金費	11,083
	受再保険手数料	26,602
	出再保険手数料	△31,141
	計	392,329
事業費合計		840,942

(注) 1 金額は当事業年度の損益計算書における損害調査費、営業費及び一般管理費ならびに諸手数料及び集金費の合計であります。

2 その他物件費のうち主なものは業務委託費、資産管理費、銀行振込等手数料であります。

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	当期末減価 償却累計額 又は 償却累計額	当期償却額	差引 当期末残高
有形固定資産							
土地	143,299	—	39,951 (2,360)	103,348	—	—	103,348
建物	448,430	8,832	55,078 (378)	402,185	296,354	5,999	105,830
リース資産	6,560	825	2,837	4,549	1,985	1,330	2,563
建設仮勘定	2,751	10,433	6,264	6,920	—	—	6,920
その他の有形固定資産	74,546	5,459	5,103	74,902	49,198	3,018	25,703
有形固定資産計	675,589	25,551	109,234 (2,738)	591,906	347,539	10,348	244,366
無形固定資産							
ソフトウェア	—	5,623	—	5,623	709	709	4,913
その他の無形固定資産	37,771	44,487	6,892	75,367	876	713	74,490
借地権	577	8	0	585	—	—	585
電話加入権	0	—	—	0	—	—	0
ソフトウェア仮勘定	27,848	32,232	6,891	53,188	—	—	53,188
販売権	9,345	12,247	0	21,592	876	713	20,716
無形固定資産計	37,771	50,111	6,892	80,990	1,586	1,423	79,404
長期前払費用	—	—	—	—	—	—	—
繰延資産							
—	—	—	—	—	—	—	—
繰延資産計	—	—	—	—	—	—	—

(注) 「当期減少額」欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

区分	当期首残高	当期増加額	当期減少額 (目的使用)	当期減少額 (その他)	当期末残高
貸倒引当金					
一般貸倒引当金	226	229	—	226	229
個別貸倒引当金	3,266	343	93	174	3,341
計	3,493	572	93	401	3,570
投資損失引当金	7,808	—	—	331	7,476
賞与引当金	18,375	18,435	18,375	—	18,435
役員賞与引当金	135	97	135	—	97
価格変動準備金	68,706	10,486	—	—	79,193

- (注) 1 一般貸倒引当金の当期減少額(その他)は、洗替による取崩額であります。
2 個別貸倒引当金の当期減少額(その他)は、回収等による取崩額であります。
3 投資損失引当金の当期減少額(その他)は、要引当額の減少による取崩額であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	4月1日から4か月以内
基準日	—
株券の種類	株券不発行
剰余金の配当の基準日	3月31日
1単元の株式数	— (注)
株式の名義書換え	
取扱場所	—
株主名簿管理人	—
取次所	—
名義書換手数料	—
新券交付手数料	—
単元未満株式の買取り および買増し	(注)
取扱場所	—
株主名簿管理人	—
取次所	—
買取・買増手数料	—
公告掲載方法	電子公告としております。(URL https://www.sjnk.co.jp/) ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社は単元株制度を採用しておりません。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、上場会社ではありませんので、金融商品取引法第24条の7第1項の適用がありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書およびその添付書類ならびに確認書

事業年度 第74期（自 2016年4月1日 至 2017年3月31日）

2017年6月29日 関東財務局長に提出

(2) 半期報告書および確認書

第75期中（自 2017年4月1日 至 2017年9月30日）

2017年11月28日 関東財務局長に提出

(3) 臨時報告書

① 企業等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）の規定に基づく臨時報告書

2017年9月4日 関東財務局に提出

② 企業等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）の規定に基づく臨時報告書

2018年2月15日 関東財務局に提出

③ 企業等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）の規定に基づく臨時報告書

2018年3月6日 関東財務局に提出

④ 企業等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）の規定に基づく臨時報告書

2018年6月19日 関東財務局に提出

(4) 訂正発行登録書（社債）

① 2017年6月23日 関東財務局長に提出

② 2017年9月4日 関東財務局長に提出

③ 2018年2月15日 関東財務局長に提出

④ 2018年3月6日 関東財務局長に提出

⑤ 2018年6月19日 関東財務局長に提出

(5) 発行登録追補書類（社債）およびその添付書類

2017年4月19日 関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

2018年6月28日

損害保険ジャパン日本興亜株式会社
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	小澤裕治	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	鴨下裕嗣	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	窪寺信	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている損害保険ジャパン日本興亜株式会社の2017年4月1日から2018年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、損害保険ジャパン日本興亜株式会社及び連結子会社の2018年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- ※ 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2018年6月28日

損害保険ジャパン日本興亜株式会社
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	小澤裕治	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	鴨下裕嗣	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	窪寺信	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている損害保険ジャパン日本興亜株式会社の2017年4月1日から2018年3月31日までの第75期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、損害保険ジャパン日本興亜株式会社の2018年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- ※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第2項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2018年6月28日
【会社名】	損害保険ジャパン日本興亜株式会社
【英訳名】	Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 西澤敬二
【最高財務責任者の役職氏名】	該当なし
【本店の所在の場所】	東京都新宿区西新宿一丁目26番1号
【縦覧に供する場所】	金融商品取引法の規定による備置場所はありません。

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長 西澤 敬二は、当社の第75期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。